

八神コウを攻略するため、俺は遠山りんも攻略する

グリーンやまこう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は八神コウが好きだ。でも、彼女を攻略するにはある人も同時に攻略しなければ、恋人同士になることができない。

そんなわけで俺は……遠山りんを同時に攻略する。

※他のヒロインも攻略します。

目次

八神コウを攻略するのは難しい	1
悪い状況とは、二重にも三重にも重なるものである	16
企画も会議も、同じくらい大事なものである	32
セクハラは言うまでもなく、した方が悪い	47
偶然とは、予期せず起こるから偶然なのである	64
酒は飲んでも飲まれるな	79
転ぶのは恥ずかしいし、キャラを間違えるのはもつと恥ずかしい	103

初給料の使い方はみんな違ってみんないい	126
会社でパンツ姿になるのは間違っている	143
ひふみと一緒に飲むお酒はやっぱりおいしい	159
恥ずかしい思い出、苦い思い出はなかなか忘れられない	177
意外な人に心配されるほど戸惑うことはない	195
同期三人、とある休日のお話	215
同期の一人はやっぱりお母さん	238
人とは変わること成長していくもので	

ある | 252

オタクは基本的に語りたい | 268

バイトの取り扱いは意外と大変 | 285

わざとじゃないことも、大事にされると

なかなか言い出せなくなる | 303

風邪をひくと不安になるのは誰でも一緒 | 325

差し入れは親睦を深めるための一番簡単

な手段かもしれない | 354

名刺の渡し方は教えてもらうまで意外と

分からないものである | 375

慣れない言葉は時として人の感情を

ちやごちやにするものである | 394

家族の襲来は往々にして突然起こるもの

である | 416

お洒落をするのは思いのほか大変

437

好きな奴からの言葉ほど動揺を誘うもの

はない | 455

八神コウを攻略するのは難しい

「ふわぁ……ねむっ」

あくびを噛み殺しつつ、俺は目を擦る。そんな眠気を覚ますため、視線を外に移した。今、俺がいるのは自分の席ではなく、そこから少し離れた窓の近く。

先ほどまでやっていた仕事がひと段落し、気分転換に外の景色を眺めたいと思いやつてきたのだ。言っておくが、決して仕事をさぼりに来たわけではない。

「ふう……」

左手に持ったコーヒーのカップをゆっくりと啜る。

季節は春。会社の前に並ぶ桜並木からは、桜の花びらがひらひらと舞い踊っている。春になるとやたら『桜』をメインにした楽曲が多数作成され、世の中に出されるのだが、この光景を見るとそれも納得できてしまう。桜の花びらが舞い落ちる光景は何時みても、何歳になってもいいものだ。

そして、春眠暁を覚えずとはよく言ったものだが、俺も多分に漏れず眠くなっている。春は本当に罪な季節だ。……きつと秋になったら秋になったで「秋も罪な季節だな」と

か思っているに違いない。

そんな事を考えつつ、桜並木に目を奪われていると、

「あつ、こんなところにいた！ タケルつてば外なんか眺めてどうしたの？ もしかして、サボり？」

からかうような声に、俺は振り返る。

そこには黒いシャツにロングスカートと、おおよそお洒落っぽさの欠片もない格好をした女性が、腕を組みながら俺の事を見つめていた。

「コウか……いや、別にサボってたわけじゃないよ。ちよつと窓の外の桜並木に見惚れていたんだ」

「それって、サボってるのと同じじゃ……？」

疑惑の視線をスルーして、俺は彼女の右手に視線を移す。

「それは？」

「新しいキャラの仕様書！ タケルに作ってもらおうと思つて！」

「……一応、俺は企画班なんですけど？」

「いいじゃん！ どうせ、企画班は暇でしょ？ 今だつて、窓の外見てサボってたくらい

だし」

にひひと笑う彼女の名前は八神コウ。特徴的な金髪と、少しスレンダーな体つき。そして彼女は、かの有名な「フェアリーストーリー」のメインキャラデザイナーという顔も持つ。

そんなゲーム業界では有名人であるコウに、俺は何も言い返すことができない。

実際、サボってたわけだしな。それに俺は元々キャラ班の人間である。キャラデザくらい、お茶の子さいさいだ。

「分かったよ。じゃあ、仕様書を見せてくれ」

「さっすが、タケル！ 頼りになるう。えつと、これが仕様書で——」

説明を始めたコウに、もう一度視線を向ける。うん、素材は抜群にいい。多分、もつとお洒落に気を遣えばもつと可愛くなるだろう。

ただ、いかんせん、本人がそういうことに無頓着なのだ。その証拠に、普段の格好は男つぼく、綺麗な金髪も無造作に伸ばされている。

なぜ、女つぼい格好をしないのか。本人曰く、「私、胸もないし、色気もないから」とのことらしい。

まあ、確かに胸はないかもしれないけど、素材がいいんだから女つぼい格好すれば絶対に似合うと思う。

今度、何度目か分からないが説得を試みようかな。それに胸だつてないわけじゃなくて、あのつつましやかな大ききこそ、至高なのであつて――。

「――ケル。タケルつてば!」

「へっ?」

「もうっ! 話聞いてた?」

不満げな表情を浮かべるコウ。彼女の外見（ほぼ胸）ばかり見ていたせいか、説明を何にも聞いていなかった。

「悪い。ポーつとして何も聞いてなかった」

「全く……これからマスターアップに向けて、忙しい日々が続くんだから気を付けてよね!」

話を聞いていなかった俺に、ブンブン怒っている。

ちなみに所属班は違うものの、俺とコウは同期入社だ。今年でイーグルジャンプ入社、7年目になる。あつ、イーグルジャンプって言うのが働いている会社の名前。

何をしている会社なのかと言われれば、ゲームを作っている会社と答える。そんな会社だ。後、無駄に女子率が高い。というか、俺以外に男子の姿を見かけない。男子は絶滅してしまつたみたいだ。

もうすっかり慣れてしまつたが、最初はなかなか慣れなかつたものである。それで、

あと説明しておくことは……：そういえば俺自身の名前を言っていないなかったな。

本名は興梶（こおろき）タケル。聞くことの少ない苗字と、それなりの確率で存在する名前の組み合わせ。

自分で言うのもなんだけど結構、アンバランスな名前だと思っている。どうせなら、名前も個性的なのによければよかったのに。それこそ今はやりのキラキラネームとか……いや、あんなのをつけさせられるくらいなら俺はタケルのままでいい。というわけで、タケルという名前はまあまあ気に入っていた。

25歳独身。都内で悲しき一人暮らしだ。

よく結婚した友達とか親からは、「結婚しないの?」とか、「好きな人は?」なんて質問をよく受ける。それに、結婚していない友達からも合コンや婚活パーティーなどよく誘われるのだが、一度も行ったことはない。

結婚は別にして、好きな人がいないわけではないからな。そして、好きな人とは同じ職場であり、結構親密な関係にあると自分では思っている。

これまでの話で、だいたい俺の好きな人が理解できたことだろう。ここまですと「なんだ、じゃあ告白すればいいじゃん」とか感じるかもしれない。ただ、様々な要因の影で俺の恋はなかなか成就しないのである。

「ん? タケル、難しい顔してどうしたの?」

首を傾げるこいつが様々な要因の一つ目。

まあ、こいつは俺の好きな人でもあるんだけど……。

「そんな難しい顔してると、好きな人にも嫌われちゃうぞ?」

冗談っぽく話すコウに、俺は思わずため息をつく。

今の会話で分かった通り、コウは俺に好かれているだなんて、これっぽっちも思っていないようだった。

つまり、コウは鈍感すぎるのである。

何度もコウに対してアピールはしてきたし、コウの目の前で「俺、好きな人いるんだよなあ……:チラッ」って感じに言ったりもした。

しかし、その時のコウの反応は、「えっ!? 嘘っ! タケルってば好きな人いるんだ! 誰々?」もしかして、リン?」というありさまである。

彼女の反応には思わず愕然とした。まあ、彼女の鈍感さを嘆くのはこの辺りにしておこう。どんなに嘆いたところで、彼女の鈍感さは変わらないのだ。

それよりも、次の問題のほうが深刻だったりする。

「あらく、二人で楽しそうに話してどうしたの?」

「っ!?!」

背筋にとんでもない悪寒が走った。やわらかい声色なのだが、どこか隠しきれない嫉妬の色が見え隠れしている。

こんな声を出せる知り合い、俺は一人しか知らない。

「あつ、りん！」

明るい声をあげたコウとは対照的に、俺は突然背後に現れた我が宿敵に、すぐさまファイティングポーズへと移行する。全く、気配を感じなかったぞ……。

「楽しそうって……別に、普通に話してただけだよ？」

「ふうーん。普通なんだあ〜」

そう言いつつ、もの凄い形相で睨みを聞かせる俺の天敵。もとい、遠山りん。

彼女もまた、俺たちと同期入社。赤色に近い髪をボブカットに整え、出るところは出る、引つ込むところは引つ込むといった、女性の誰もが羨むプロポーション。

更に、可愛くてお洒落で仕事もできるといふことで、非の打ち所がほとんどない女性だ。

そう、ほとんどない。ある一点を覗いては……。

「コウちゃん、お昼ご飯作ってきたんだけど、一緒に食べない？」

先ほどの見せた鬼のような形相は鳴りを潜め、コウに向かつてりんは天使のような微笑

笑みを浮かべる。その笑顔を、少しだけでいいから俺にも見せてほしい。

毎回、毎回、鬼のような形相で睨まれるのは心臓に悪いからな。

「うそっ！ 食べる食べる！ りんの作るご飯はおいしいからな」

食べると言ったコウを見てご満悦の遠山さん。そして、勝ち誇ったような笑みを俺に向けてきた。

まるで、「コウちゃんは私の物だから」と言わんばかりに……。

「よおーし！ それじゃあお昼まで残りの仕事、頑張ろつと。それじゃあタケル、キャラデザの件、頼んだよ。今回は二日でよろしく」

「はいはい、二日……つて、ふつかあ!? 流石にあの複雑なキャラを二日では無……」

「タケルならできると信じてるから！ んじゃね」

完全に無理ゲーなスケジュールを指定したコウは、手をひらひらふって自分の席へと戻っていく。

コウのことは好きだけど、無茶苦茶なスケジュールを設定してくるのは本当にやめてほしい。まあ、残業してでも終わらせるんだけどね。

そんなコウを追いかけるようにしてりんも自分の席へ――

「……コウちゃんは渡さないから」

隣を通り過ぎようとするタイミングで、とんでもなく低い声が聞こえてきた。嫉妬の気持ちを感じたとしてもしない、そんな一言に俺はため息をつく。

さて、ここまでの会話で遠山りんの問題が分かっていたただけだろうか？ 彼女は世間一般で言われる百合属性……というよりは、レズ属性といったほうがいいだろう。

つまり、りんはコウのことが好きなのだ。……もう一度言おう。りんはコウのことが大好きなのだ。

別に、彼女の事を否定するわけではない。恋愛にはいろいろな形があるからな。ただど恋のライバルが女になるだなんて、普通は思わないだろ？ 入社直後では全く考えられない……ほんと、寝耳に水の展開である。

いや、仕事上ではほんと優秀なんだよ。ただ、コウが絡むと……あんな感じになってしまう。もはや、俺にはどうすることもできない。恋する乙女は何時だって暴走するものだ。

ちなみに、りんがコウの事を好きであるという事実を知っている人は、俺を含めて三人ほど。俺とディレクターと、あと……、

「お……お疲れ様……た、タケル君」

紹介しようと思ったら、ちやうど本人の方から来てくれたらしい。俺は彼女の方に振り返る。

「おう、お疲れ、ひふみ」

おどおどしながら声をかけてきたのはキャラ班の一人である、滝本ひふみ。一応、俺の後輩にあたる。今は班が違うので後輩とは違うかもだけど。

赤茶色の髪をリボンでポニーテールに纏め、白いシャツと赤いスカートを見事に着こなしている。今日も、ニーソとスカートの間にはぞく絶対領域が眩しいぜ。

そして、りんと並ぶ……というか、それ以上のプロポーションを誇る彼女。マジで入社当初、彼女を見た時は主に胸を二度見してしまった（それをりんの野郎に見られていたらしく、白い目で睨まれた）。

しかし、一見完璧に見える彼女にも弱点はある。それは、重度のコミュ障だということだ。

おかげで、彼女とのコミュニケーションには、人一倍苦労した思い出がある。仕事の腕は問題ない。ただ、普段は無表情で何を考えているのかが分からず、話しかけると顔を真っ赤にして挙動不審になる。

俺が話しかけるたびに「ごめんなさい……」を連発された時は、心が折れそうになっ

た。まあ、今となってはそれもいい思い出になっている。

どうやってひふみと仲良くなったのか。それについてはまた、おいおい話していくことにしよう。

「どうかしたのか？」

「えつと……その……、窓の外を見て、ため息……ついてたから。……どう、したんだらうって……」

「……………」

コミュ障だっていいじゃない。だって、天使なんだから。

このように、ひふみさんはいい子なのだ。ほんと、今すぐにでも後ろから抱き締めて、そのポニーテールに顔を埋めてハスハスしたい。

「いや、まあ、さつきコウとりと一緒に話してて……」

「ああ……」

それだけで事情を察せるひふみさん、マジで天使。

困惑の表情を浮かべるひふみに、俺は苦笑いで答える。コミュ障だからなせる業なのか、ひふみは意外と観察眼に優れている。

俺がコウのことが好きだというのもすぐに見破られたし、りんの恋心もあつという間に見抜いていた。後は、常軌を逸するコウの鈍感さも……。

だからこそ、ひふみは後輩でありながら、俺のよき相談相手になっていた。

「……り、りんちゃんも、悪気があったわけじゃ、ないと思うから……」

りんを庇うひふみさん、マジで天使。

さつきから、ひふみの事を天使としか言っていないな。それもある意味仕方がない。だって、彼女はまごうことなき天使なのだから。一家に一人、ひふみが欲しい。

「うん、それは俺も分かってるよ。それに、俺がりに嫌われるのはある意味当然だし」
彼女にしてみれば、自分の好きな人に男が言い寄っているのだ。気分が良くなるわけがない。

あとは、まあ、若かりし日に色々あったんでな。それについては聞かないでくれ。黒歴史を語るようなもんだから。

それにりんとは、今更仲良くなるつもりもないし……。コウとかひふみとかと違い、ビジネスパートナーって感じだ。

「だけど、心配してくれてありがとな。よしっ、今度会社終わったら飲みに行こうか。もちろん、俺の奢りでな」

「っ!!」

ばあああああつと、分かりやすくひふみの顔が明るくなる。いい忘れてたが、ひふみはお酒も好きなのだ。それも、日本酒が好物というなかなかの酒豪。

二人で飲みに行くと、大体俺の方が先に酔いつぶれている。そして、起きるとお代が大変なことになっている……。

「うんっ……、ちゃんと、予定……あけとくから……」

少しだけ笑みを浮かべた彼女はやっぱり可愛い。よしっ、今度の飲み会までにコウからのキャラデザを絶妙なタイミングで終わらせておこう。

終わらないと残業だし、早く終わり過ぎても新たなキャラデザを押し付けられるだけだ。

「うっし。飲みに行く予定も決めたことだし、残りの仕事も頑張りますか」

俺は大きく伸びをする。まだ、とんでもなく忙しいわけではないのだが、仕事を早めに終わらせておくに越したことはない。マスター前とかにばたばたするのも嫌だしな。まあ、早く終わらせてもマスター前は基本ばたばたするんだけど……。

「そ、それじゃあ……私も、仕事に戻るね」

ひふみも席へと戻り、做うようようにして俺も席へ……戻る前にもう一度、外の桜並木に視線を移す。

「……そういえば、明日新入社員の子が入って葉月さんが言ってたな」

新入社員が誰なのかは入ってからのお楽しみと言われて、詳しく教えてもらっていない。キャラ班に入るとだけ言われている。つまり、コウの部下になるみたいだ。

個人的には誰でもいい……と言いたいところなのだが、ぶっちゃけ男が入ってほしかったりする。だって、寂しんだもん！

あつ、でも男なら男でりんが嫉妬しそうだな。コウと同じキャラ班に入るわけだし。うん、それなら女の子でもいいや。火のない所に煙は立たないわけだしね。

そもそも、葉月さんが面接をして男が入った試しがない。

今回も「いやー、さつきとつても可愛い女の子を見つけてね！ 思わず、貰っちゃったよ！」とか言ってたから。……貰ったって、一体どういうことなのだろう？ それにしても葉月さん、本当に可愛い女の子大好きだよな。

……ただし、ガチな方の人ではない。りんとは違い、あくまで可愛い女の子を愛でるのが大好きなだけである。

普段が適当すぎるだけで、やる時はやる人なんだけどね。しかし、よく仕様変更をすするため、うみこさんにしよっちゆうデコピンをされている。俺はくらったことがないものの、無茶苦茶痛いらしい（本人談）。まあ、自業自得である。

「取り敢えず誰が入るにしても、警戒だけはされないようにしないと」

ひふみのように、極度のコミュ障である可能性もあるわけだし……。そんな事を考えながら、俺は自分の席へと戻っていく。

「あつ！ やつと戻ってきた。全く、タケルってば少しサボり過ぎじゃない？」

「サボってるだなんて失礼な。これからの仕事をよりよくしていくために、英気を養っていただよ」

「だから、それってサボりなんじゃ……？」

「さあーで、残りのお仕事も頑張りますか！」

ちなみに、葉月さんからは新入社員が入るということ以外にも、とあることを言われていた。

『君は八神のことが好きなんだろ？ だったら遠山君も一緒に攻略すればいいじゃないか』

と。

悪い状況とは、二重にも三重にも重なるものである

『○○行き、間もなく発車いたしまあーす』

駅員の声と共に扉が閉まり、ゆっくりと電車が動き出す。

「今日は……いつもより早いから若干混んでるな」

ゲーム会社の朝は……意外と遅い。現在の時刻は朝の九時半。普通の企業ならとつくに働き始めている時間に、俺は出勤していた。

夜は遅くまで働く代わりに、朝は結構ゆっくりなのだ。ゆっくりと言っても、普段より大分早い。その影響もあつてか、若干眠い。

俺はあくびを必死に噛み殺す。周りには一般の乗客と共に、スーツ姿の男性もちらほら。恐らく、外回りの営業さんなのだろう。

「朝からスーツとは、ぶくろうさんです」

ちなみに俺はスーツなど着ていない。うちの会社、服装は自由なので大事な時以外、

俺はジーパンにTシャツと、比較的ラフな格好で出社している。スーツはスーツで楽しんでだけど、堅苦しいから嫌いなんだよな。

そして、俺はそこそこ乗車時間のある電車内で、とあることに思考を巡らせる。

「葉月さん、一体何を考えているんだ？」

何を考えているんだとはもちろん、昨日の言葉。

『君は八神のことが好きなんだろ？ だったら遠山君も一緒に攻略すればいいじゃないか』

正気の沙汰とは思えないが、あの人は、あの言葉を、くそ真面目な顔で言ってきたのだ。嘘とか冗談とかじゃなく、本気なのだろう。

しかし、このご時世、女性二人と付き合うなどご法度だ。一時期、不倫は文化ともてはやされた時もあったのだが、それもとうに昔の話。

浮気、不倫、二股といった言葉に社会は敏感になり、それを破った芸能人などが連日のように糾弾されている。

つまり、不倫や二股といった行為は、世間一般的に見ても禁忌と化した行為になってしまったのだ。

「そもそも、コウは別にして、りんを攻略って……どんな無理ゲーだよ」

エアーマンとか、ラオシャンロン並みに攻略不可能な相手だと思う。

何回やっても、何回やっても、遠山りん、倒せないよ……えっ？ 今は簡単に攻略できる？ 俺の時代は違ったんだ！ ラオシャンロンのしつぽに巻き込まれて、何度友達の足を引つ張ったことか……。

「……話が逸れたな」

何度でも言うが、りんはコウのことが大好きなのである。コウに近づく相手全てに嫉妬するくらい……。ひふみ相手にすら嫉妬してるからな。

やつぱり、無理だ。攻略できる気がしない。ギャルゲーみたいに次のルートが分かっていたら、攻略も簡単なんだけど……。

しかし、現実とギャルゲーは違う。フラグが立ったり、見えたりはしないのである。

「はあ……今日、企画の仕事ついでに、もう一回葉月さんに聞いてみるか」

今のりんがコウを捨ててまで俺に靡く姿など、想像すらできない。そもそも簡単に靡いてしまったのは、コウへの愛はその程度だったのかと、それはそれでなんかガツカリする。

俺ってば、めんどくさい性格してるな。

『え〜、次は〇〇駅い、〇〇駅い〜』

そんな事を考えているうちに、降りる駅を伝えるアナウンスが聞こえてきた。

俺は電車を降りると、会社までの道のりをのんびり歩いていく。数分も歩くと、見慣れたイーグルジャンプの看板が見えてきた。

エレベーターを使って会社のある階へ向かう。ところで、なぜ俺が少しだけ早く出社しているのか。それにはもちろん、理由がある。

ピッ!

社員証をかざして俺は扉の中へ。まだ誰も来ていない社内は静まり返っている。

……いや、誰も来ていないわけではない。昨日もあいつは泊まるとか言ってたしな。

俺は鞆を机の上に置き、とあるデスクの下に視線を移す。

「んんう……」

聞こえてきたのはくぐもった声。そして、目に飛び込んできたのは純白のおパンツ。……確認の為に、もう一度だけ言っておく。俺の目に映っているのは、紛れもない女性のおパンツだった。

「はあ……」

ため息をつく俺。ある意味とんでもない光景なのだが、ぶっちゃけ何度か見たことがあるので、あまり興奮はしない。

今となっては、「おっ！ 今日のパンツは初めて見たな」と冷静に分析できるほど。初めて見た時はしばらくの間、前かがみだったのにな。慣れというのは本当に怖い。

まあ、そんな事はいいとして、早くこいつを起こさないと今日、入社する新人社員の子に上司のパンツ姿を見せる羽目になる。

そんな事になったら、社内の常識を疑われてしまう。というわけで、俺は未だグースカ眠っている彼女の肩をポンポンと叩いた。

「おいつ、コウ！ 起きろ。今日は新入社員の子が入社してくるんだぞ」
「んんっ……うるさあい。もう、ご飯はいらないよぉ」

駄目だ。完全に寝ぼけてやがる。俺はご飯の話なんて一言もしてないんだよ！
机の下で眠っていたのは、俺の思い人でもある八神コウだった。

しかし、パンツ姿で眠っていたあげく、寝ぼけているので魅力も半減……しない。見慣れた光景とはいえ、彼女のパンツ姿は一日頑張る力を俺にくれる。やはり、パンツとは偉大である。

ちなみに、こいつはしよっちゅう会社に泊まって仕事をしているのだが、なぜ最終的

にパンツ姿になるのかはよく分からない。

本人曰く、「スツキリするから！」とのこと……。俺にはその気持ち、全く分からない。さて、コウがなぜパンツ姿になるのか、欠片も理解できなかつたところで、早く起こさない。その為、俺はもう少し強い力で揺さぶる。

「コウツ！ いい加減に起きろつて！ 流石に新入社員の入社初日に、上司のパンツ姿は見せられないんだよ」

「んへえ〜……」飯もいいけど、パンもいいよねえ〜」

「パンじえねえ！ パンツだ、パンツ!!」

こいつの頭の中は、朝ご飯で一杯らしい。寝ぼけてパンツを。パンと勘違いしている。は、早く起こさないと新入社員が……。

「おいっ！ 八神コウ!!」

今度は強めにコウの肩を揺する。流石のコウも、これだけ強く揺すればきつと起きてくれるだろう。

「んっ……っ……」

目を擦る。よしっ、どうやら起きてくれたみたい——

「んうーん……うるさいなあ〜」

ガシツと掴まれる右手。もう、嫌な予感しかしない。

「へっ? ……おわあっ!？」

右手を掴まれたと思ったたら、そのままコウの眠る机下まで引きずり込まれる。そして、寝ぼけるコウにがっちりと抱擁された。

「うへへえ……あつたかあい」

完全にコウの抱き枕と化した俺。頭が彼女の胸へと押し付けられる。パンツではもう興奮しないが、胸の感触を思いっきり味わえる状況で興奮しないわけがない。

普段、「私、胸ないから」とか言ってるくせに、意外とあるじゃねえか! やわらかいじゃねえか!!

しかも、彼女のいい匂いと合わさって頭がクラクラしてくる。

(こういうのは、アニメとか漫画の中だけでいいんだよおおおおお!!)

必死にもがくも、全く抜け出すことができない。あんな細い腕のどこにこんな力が

……。そして、悪い状況というのは重なるものである。

「ここがオフィスだから」

「っ!?!」

この状況を一番見られてはいけない人の声が聞こえてきた。

俺の身体はポケモンで言う、状態異常こおりの如く、カチコチに固まる。

(やばいやばいやばいやばい……)

やばいとか思ってるくらいなら、身体を動かせという話なのだが、いかんせん、全く身体が動かない。

そうして焦っているうちにも、りと、恐らく新入社員と思われる二人の足音が近づいてくる。

く、くそつ、この状況をどう切り抜け――。

「そうだ、何か飲む?」

「コーヒーブラックで」

新入社員の子とは仲良くなれそうだ。……って、ちがーう!!

誰がコーヒー好きとかは、今はどうだっていい。俺はこの状況、絶対に切り抜けてみせる!

「ううん……、つかれたあ……もうやだあ」

コウの口から、そこそこ大きな声で寝言が漏れた。しばらくして、

「ぎゃーー!!」

新入社員の悲鳴が聞こえてきた。俺は頭を抱えた。

何とかしようと思ったら、この有様だよ！ もうヤダ、おうち帰りたい。悲しみのコンボに思わず涙がこぼれる。

そんな俺の背後で足音が聞こえたので、視線だけを何とか後ろに向けると、

「っ!？」

色の薄い青色の髪をツインテールに纏めた女の子が、キーボードを片手に立ち尽くしている姿が目に入った。

多分、新入社員の子女のだろうけど……かなりの童顔である。下手したら中学生に見えるだろう。

だけど、可愛い。そこら辺は、流石葉月さんというべきだ。流石、可愛い子を自分のチームに引き込んでいるだけある。

……うん、冷静に彼女を分析している場合じゃないね。早いとこ、言い訳を――。

「(イ)、(イ)、(イ)めんなさいいいいいいい!!／／／」

言い訳する暇もなかった。

真つ赤な顔で、手をぶんぶんと振る新入社員。ああ、恐れていたことが……。

彼女の反応を見るに、色々と誤解をしているのだろう。一瞬にして、カオスな状況が出来上がってしまった。

「ううん……?」

そこでもうやくコウが目を覚ました。いや、起きるの遅すぎいいいい!! もう、手遅れだよ、色々!!

「あれっ?　なんで、タケルがこんなところに?」

男を自分の胸にがつちりとホールドしているにもかかわらず、普段通りの八神さん。いろんな意味で泣きそうになる。

そして彼女は視線を後ろに移し、

「あれっ?」

あれだけがつちりホールドしていた腕を解き、コウは立ち上がると新入社員の元へ。

「中学生？　なんで子供がいるの？」

「子供じゃないです!!」

「ごめん、俺も子供（中学生）だと思った。

パンツ姿の上司と、中学生のような新人社員。すげえ、奇妙な光景……なんて思っていたら、

「あら、コウちゃん起きてたの？」

大魔王降臨。

完全に彼女の存在を忘れていた。俺は、一気に絶望の淵へと突き落とされる。この状況、きつと言いつは不可能だろう。

彼女の視線はコウ、新人ちゃんと移っていき……最終的に、寝転がっている俺のところで止まった。スツと目が細められる。

「一体、何をしているのかしら？　コウちゃんが寝ていたところで」

「……ナニモシテオリマセン」

こうなったら俺のできることはただ一つ。黙秘権を行使すること。

「タケル、もう一度聞くわよ。一体、そんなところで、コウちゃんの寝ていた場所で、一体何をしていたのかしら?」

詰問するような彼女の口調。しかし、俺はそんな口調くらいでは屈しない。というか、屈したら色々終わる。

そんなわけで俺はデスクの下で正座をし、口を真一文字に結び、俯く様にして下を向く。

「……ふうん。あくまでしらを切り通すつもりなのね」

疑惑の視線を凄まじく感じるが、何も問題はない。雄弁は銀、沈黙は金である。

コウは寝ぼけていて状況を覚えていないだろうし、俺は何を聞かれても黙っているだけだ。口を開かなければ、りんが真実を知ることはない。よしつ、完璧な作戦じゃないか!

「涼風さん。さつき、悲鳴を上げてたみたいだけど、一体何を見たのかしら?」

や、やべえええええ!! いきなり作戦が崩壊した。

りんが新人ちゃんに声をかける。そう、事情を知っているのは俺だけじゃなかったの

だ。すっかり失念していたぜ……。

しかも、この新人ちゃんは、色々と誤解している。これは、彼女が口を開く前に誤解を――

「ふ、二人が抱き合っている姿を……／＼／＼」

真つ赤な顔を手で覆うようにして、新人ちゃんが呟く。照れてる姿も可愛い……じゃなくて！

抱き合っているだけで大問題なのに、顔を真つ赤にされたらそれ以上の事をしていたみたいになっちゃうじゃん!!

「新人ちゃああああああん!!」

とんでもない事態になってしまい、俺は顔真つ青にして絶叫する。

最後のほうが某国民的アニメに登場する子供みたいになったが、そんな事を気にしてはいられない。だ、大魔王が覚醒してしまう。早いとこ、それは誤解だということを伝えたい。

「ち、ちち、違うんだ、りん！ これには深い、ふかあーいわげが……」

「何だ、私つてばタケルに抱き締められてたのか。どうりで胸の辺りに頭の感触を感じたわけだよ」

「八神いいいいいいいい!!」

はい、もう爆弾発言以外の何物でもないですね。本当にありがとうございます。

「……興柁さん、ちょっとこちらに来ていただけますか？」

目のハイライトが消え、事務的な口調で俺を呼ぶ遠山さん。

「きよ、拒否権は？」

「そんなの、最初からあるわけないでしょ。ついでに基本的人権も、あなたにはないと思いなさい」

首根っこを掴まれ、オフィスの床をずるずると引きずられていく。「抱き締めてきたのは俺じゃなくてコウなんだ！」と言い訳する暇もなかった。というか、人権くらいは認めてくださいよ、遠山さん。俺だって日々、頑張つて生きているんだから……。

男が女に引きずられていくという、情けない光景。俺は泣いていた。

「二人は本当に仲がいいなあ〜」

未だパンツ姿のコウが呑気に口を開く。この状況を、どう見たら仲がいいと言えるのだろうか？ あと、早くズボンを履け。

「あ、あれって、本当に仲がいいと言えるんでしょうか……」

コウの言葉に、困惑気味の声を上げる新人ちゃん。大丈夫、君の思っていることは間違っていないよ。

はあ、新入社員の入社初日なのに、どうしてこんなことに……。しかし、そんな俺の思いも空しく、俺はりんにこっつりと絞られたのだった。

☆ ★ ☆

「お、おはようござい……って、タケル君!? ど、どうしたの?」

壁にもたれるようにして白くなっていた俺に、入社してきたばかりのひふみが驚きの声を上げる。

「ひ、ひふみか……すまん、俺はもうダメみたいだ」

しかし、今日も天使なひふみが寄り添ってくれても、心に負った傷は簡単に癒えてくれない。

「た、タケル君……まだ、死んじゃ……駄目だよ」

涙目で心配してくれるひふみさん、ほんと天使。

「今、死んじやつたら……お仕事が、終わらない……」

「どうやら、仕事の心配をしてくれていたらしい。お仕事、大事だよ。ひふみは、会社員の鑑だよ。」

「そ、それに……タケル君と……飲み……いけなくなっちゃう」

「なんだ、やっぱりただの天使か。」

「ひふみ……」

真っ白になっている場合じゃない。俺は彼女の両手をしっかりと握り締める。

「お酒、絶対に飲みに行こうな」

「……うんっ！」

彼女の笑顔は、お金の換算できない価値があると思う。そして、ひふみと飲みに行くまで絶対に死ねない。

無事に復活を遂げた俺は決意を新たに、今日もお仕事頑張ろうと思うのだった。

企画も会議も、同じくらい大事なものである

「し、新人の涼風青葉です。皆さん、今日からよろしくお願いします」

やや緊張気味の挨拶を終え、みんなに向かつて頭を下げる新入社員。もとい、涼風青葉さん。

ひふみのお蔭で無事復活した俺は、新人ちゃんの挨拶を聞いている最中だった。少し顔を赤くしてペコペコ頭を下げているあたり、実に微笑ましい。

入社初日に、自分の名前だけをボソツと言つて頭を下げた、どつかの誰かさんとは大違いである。

「……タケルつてば、何か失礼なこと考えてない？」

横で新人ちゃんの挨拶を聞いていたコウに睨まれる。こういう所の察しはいいのに……恋愛方面にそつちの鋭さも移行してほしいものだ。

「いや、失礼なことは考えてないよ。それより、新人の涼風さん。お前の班に入るみただけで、教育とか大丈夫なのか？」

「んー……まあ、何とかなるんじゃない？ 私がいなくても、ひふみんとか、ゆんとか、はじめもいるしね」

「はじめは一応、モーシヨン班だぞ」

「席も近いし、大丈夫だよ。それに、タケルだつて支えてくれるでしょ？」

さも当然のように笑顔を浮かべたコウが、俺の顔を覗き込んでくる。あー、今のすごい、ドキツとした。

しかし、こうして頼ってくれるのはありがたいけど、彼女（新人ちゃん）が俺に抱いている印象は今のところ、かなり悪いからなあ。恐らく彼女は、俺の事を社内です司の女性を襲った、最低最悪な野獣先輩だと思っっていることだろう。

その為、まずは教育する以前に、誤解を解くことから始めないと……。

それにしても、今年の新入社員は彼女一人か……。あまり期待してなかったけど、やっぱり男子は入らないみたい。

来年は男も入れろつて、ちゃんと葉月さんに言っておかないと。

「まあ、支えるところは支えるけど、涼風さんはお前から色々教わりたいと思うぞ。なんつたつて、フェアリーズストーリーのメインキャラデザを担っていた、八神先生が同じ部署にいるんだからな」

「ちよ、ちよつと、八神先生はやめてつて！」

パシッとコウが俺の肩を叩く。だけど俺は分かっていた。彼女は照れているのだと。少し顔の赤くなったコウに癒されていると、挨拶が終わったらしく社員が自分の持ち場へと戻り始める。

「じゃあ、私は青葉に言うこともあるし、先に戻るね！」

ててて、と戻って言った彼女の見送り、

「さて、それじゃあ俺も自分の席へ——」

「さつき、コウちゃんとイチヤイチャしてたみたいだけど、何を話してたのかしら？」

「うおあっ!？」

忘れた頃に遠山りん。びっくりしすぎて大きな声をあげてしまう。

「そんなに驚くってことは……まさか、私に言えないようなことでも」

「ち、違う、違う！ 今驚いたのは、お前が急に現れたからだ！ 別にお前が思っている

ような、やましい話は一切してないよ」

そもそも、一番前から俺たちの様子が見えたということに驚きだ。りんは、新人ちゃ

んを紹介するために司会をやっていたのである。

あそこからは結構、距離があつたはずんだけど……。

「本当……？」

俺の返事に、懐疑的な視線を向けるりん。何一つ信用されてなくて悲しい。

「本当だった！　嘘だと思うなら、後でコウに直接聞いてみるよ」

でも、あいつに聞いたらまた余計なことを言いそうだな……。まあ、今回ばかりは大丈夫だよな？

「……分かったわ。今回は見逃してあげる。でも、次勝手に話してたら……分かってるわよね？」

そう言っつて自分のデスクへと戻っていった。

どうやら俺は、コウと話すのにもりんの許可がいるらしい。子供かよ……つて話である。

あつ、そういうえぼりん、俺に基本的人権を認めていないんだった！　それならコウと話すのに許可がいるのも納得……できねえよ!!

「タケルさん！」

頭を抱える俺の肩が、誰かによってポンポンと叩かれる。

振り返ると、少し焼けた肌にショートカットの髪。そしてスポーティーな格好に身を包み、今日も巨乳と太腿の眩しい俺の後輩が経っていた。

「おうっ、どうしたはじめ？」

声をかけてきたのは篠田はじめ。

ボーイッシュな見た目通り、明るく快活で、行動的な性格。そしてスポーツも得意。ただし、筋金入りのオタク。

彼女の机は、大量のフィギュアやおもちやで埋め尽くされているほど。まあ、俺もアニメとかゲームとか好きなんだけどね。彼女とはちよくちよく、アニメやゲームのイベントへ一緒に参加している。

そんな彼女も、この会社の多分に漏れず可愛い。こいつも、もうちよつとお洒落に気を配ればと思うことがよくある。まあ、今の格好、彼女の胸を堪能できるからやめてほしくはない。男の心とは実に複雑だ。

彼女はモーシヨン班なのだが、席がないとのことでキャラ班と同じ場所にデスクを置いてある。その影響で、俺とも話すようになったのだ。

「いえ、さつき遠山さんと話している姿が見えたので、何を話していたのかなあって」
「どうやら、りに詰問される姿を目撃されていたらしい。」

「い、いや、まあ、色々あったんだ……」
「もしかして、また喧嘩ですか？」

はじめに『また』と言われる辺り、俺とりんの喧嘩は、社内でそこそこ有名になっているといふことを如実に表している。別に、喧嘩しているという自覚はないんだけど

……。いつも、一方的に絡まれているだけだし。

その事をはじめに伝えようとしたところ、別の声によって俺の声が遮られてしまった。

「どうせ、タケルさんが怒らせたとちやいますか？」

ニヤニヤと声をかけてきたのは、同じく後輩の飯島ゆん。

金髪の髪をツーサイドアツプに纏め、ロリータファッションに身を包む彼女は小柄な体つきとよく合っており、とても可愛らしい印象を抱く。

文字入りのTシャツを着ているはじめや、いつも同じTシャツばかりを着ているコウとは違い、とてもお洒落に気を遣っていた。

ただし、机の上は若干禍々しい。残業をするときは、できるだけ近づかないようにしている。

ちなみに、はじめとは同期にあたり、彼女はキャラ班に所属していた。主に、モンスターのキャラデザを担当している。

「ゆんか……。いや、俺は何も悪くない。コウと話したら、りんが勝手にイチヤイチャしてると誤解したんだ」

「それは……お疲れ様です」

事情を知っているゆんは、とつても複雑そうな表情を浮かべた。ごめんね、朝から変な思いをさせちゃつて。

「ほんと、遠山さんって八神さんのこと好きですよね。まるで、八神さんと本気で付き合いたいと思っっているみたい……まっ、女同士でそんな事ありえないですけど」

『……………』

それがあり得ちやうんだよ!! 何も知らないって、本当に幸せなことだと思う。

「はじめはずつとそのままでいてほしいな……」「そうですね……」

「?」 どうしたんです、二人して急に?」

頭に疑問符を浮かべるはじめをゆんに任せて、俺は自分の席へと戻る。

今日やるべきことは、コウに押し付けられたキャラデザと、次回作の企画だ。

キャラデザはいいとして、次回作の企画はなかなか骨が折れる。うちのボス、なかなか納得してくれないし……。今作ってるフェアリーズストーリー3の企画なんて、無茶苦茶時間かかったからな。あの時の残業、俺は一生忘れない。

そんなわけで俺は昼間での間、キャラデザと次回作の企画に勤しむのだった。

「んあ~~~~」

切りのいいところまで作業を続け、俺は大きく伸びをする。

キャラデザの方は取り敢えず、完成のめどが立った。企画は……ボスと要相談だな。

そして俺は、あらかじめ備蓄してあるカップラーメンを手に社員食堂へ。お湯を入れ、三分待ち、ふたを開け、ラーメンをすすする。

「うん、やっぱりお昼はカツ○ヌードルビッグに限るな」

味と言ひ、量と言ひ、値段と言ひ、申し分ない。一人暮らしには欠かせないものと言えるだろう。

そのままラーメンをすすする暇っていると、

「おや、君の昼食はまたカップ麺かい？ そんなものばかり食べていると、身体に悪いよ？」

「にゃ〜お」

からかるような声と、猫の鳴き声に俺は顔を上げる。

ウエーブのかかった白色の髪を腰辺りまで伸ばしたロングヘア。縁の赤い眼鏡を

かけ、今日もストールを羽織っている。

その腕には、一匹の猫が抱かれているのもいつも通りだ。

「……葉月さんですか。別に、男の昼食なんてこんなものですよ。それに、安いからいいんです」

俺の前に現れたのは、ディレクターの葉月しずく。イーグルジャンプのボス的存在の人だ。

そして、職場が女性だらけになる原因を作っている人でもある。

「安いのはいいけど、本当に身体だけには気を付けてくれよ？ 君がいなくなると、企画の仕事に影響が出るんだから」

「本当にそう思ってるのなら、もうちょっと企画を簡単に通してくださいよ」

「それはできない相談だね。妥協して出した作品なんて、面白くないだろ？」

「まあ、それは同意しますけど……」

いつもは適当なのに、こういう所のプロ意識は非常に高い人だからな。流石、フェアリーズストーリーのストーリーを構成しているだけはある。

ちなみにフェアリーズストーリー2、3のストーリー構成は、俺との共同制作ということになっていた。まあ、実力には雲泥の差があるんだけどね。なんだかんだ、葉月さんは凄い人なのである。

しかし、普段は可愛い女の子を見ては、ハアハア言ってるただの変態なので、いまいち尊敬できない。

あと言うことがあるとすれば、おっぱいが大きい。

「ところで、次回作の企画については、進んでいるのかい？」

いつの間にか俺の前に座り、ご飯を食べ始めた葉月さん。そんな彼女に、俺はスープを飲みながら答える。

「一応、大まかな感じは決まったって感じですかね。でも、それを認めてくれるかについては、葉月さん次第ですから」

「それじゃあこの後、私の所に持ってきてくれないかな？　すぐにでも確認したいんですね」

「それは構わないですけど……この後って確か、会議じゃなかったですっけ？」

「会議なんて、遠山君やうみくんたちに任せておけばいいんだよ。私にとっては会議より、新作構想のほうが大事だからね！」

「だから、うみこさんに怒られるんですよ……」

会議に出ないと言いだめたディレクター兼上司に、俺はため息をつく。今日の会議は別に重要じゃないからいいけど……。いや、ディレクターが会議に出ないだけで大問題だ。

しかし、彼女は普通じゃないので、本当に会議に出ないことだろう。荒れるだろうな、今日の会議。

「もずくく、君から飼い主に何とか言ってくれよ」

「なあ〜お?」

俺は足元で丸まっていた葉月さんの猫を抱き上げる。猫の名前はもずく。飼い主がしずくということで、ゴロで名付けたらしい。

猫にしてはサイズが大きいものの、もふもふで、やわらかくて、触っていると癒される。まるでティーツ〇ーの様。

俺もペットを飼いたいところなのだが、住んでいるマンションはペット禁止なので飼うことはできない。

今度引越すときは、ペット可のところに引越そうかな?

「……ところで、遠山君の攻略は順調かい?」

食後のブラックコーヒーを楽しんでいた俺の耳に、とんでもない言葉が聞こえてくる。おかげで、ブラックの液体を吹き出すところだった。

「なっ!!? 何を言うんですか急に! というか、もつとポリウムを落としてください!!」

慌ててきよろきよろと、あたりを見渡す。幸いにも、周りには聞こえなかったらしい。

みんな、お昼の休憩時間を楽しんでいる。

「はあ……というか、あの言葉、冗談じゃなかったんですね」

「当たり前だろう？ こっちとしても、君と遠山君には是非とも仲良くしてほしいんだ。二人とも優秀なのに、毎回毎回、八神を取り合つて、いがみ合つてもらつても困るからね」

非難……というよりは実に楽しそうな視線を向けてくる葉月さん。

もちろん葉月さんには、俺とりんが八神の事を好きだということばはばれている。この人もひふみと同様、観察眼に優れているからな。葉月さんに、隠し事をできる気がしない。

「二人がもつと仲良くなるために、興梧君には順調に遠山君を攻略してほしいものだよ」
「……順調も何も、全然状況は変わりませんよ。そもそも、りんのように問題が……」
「攻略できないのを遠山君のせいにするだなんて、いつから君はそんなつまらない男になつてしまつたんだい？ 男ならもつとグイグイ押していけないと」
「いつからも何も、俺は初めからこういう男です……」

そう言つてもう一度、コーヒーを啜る。仲良くなれない理由は、全面的にりんが悪いと思うんだけど……。

そもそも、押してどうにかなる相手なら、とつくに何とかなつている気がする。しか

し、歩み寄れていないことも事実なのでここは認めるしかない。

「別に、遠山君だつて悪くないだろ？ 可愛いし、お洒落だし、胸はあるし、可愛いし……超優良物件だと、私は思うけどね」

「可愛いが二回出てますよ。まあ、確かに素材は抜群ですけど……その他に問題があり過ぎて、どうしようもないです」

入社当初、コウと並んでとんでもない美人がいるなと思つたくらいだからな。

可愛いし、愛想もいいし、おっぱいも大きいし……でも、その時感じた胸のときめきは、既に色あせてしまっている。

まあ、俺じゃなくともりんが抱えているコウへの愛情を見れば、誰しも愛は冷めるだろう。

「いいじゃないか、問題の一つや二つ。問題を抱えていない人間なんて存在しないんだ！ それに、乗り越える問題が大きいからこそ、成就する愛も大きくなるってものなんだよ」

熱弁されたけど、この人は俺たちの状況を見て楽しんでるだけだ。おかげで、何も心に響かない。

「葉月さん、今の状況を楽しんでますよね？」

「当たり前だろう？ こんな楽しい状況、今楽しまないでいつ楽しむというんだい？」

すつごいいい笑顔で、今の状況を楽しんでいると言われた。せめて一回でいいから否定してくれ……。

そこで葉月さんは床でゴローンとしていたもずくを抱き上げる。どうやら、昼食を食べ終えたみたいだ。

「さて、私は席に戻るけど、さつきも言った通り企画書を頼んだよ。後は遠山君、攻略の件もね」

「企画書の件だけ了解しました」

手を振りながら去っていく葉月さんに頭を下げる。あれでも一応は上司だし……。

そして俺もコーヒーを飲み終わると、新たなコーヒーを片手に自分の席へ。今日も、午後のお仕事を頑張ろう。

ちなみに、午後イチで企画書を見せていた最中。

「葉月さん、こんなところで何をしているのですか？ とつくに会議は始まっていますよっ。」

「う、うう、うみこ君?! い、いやあ、私としては会議よりも企画のほうが大事であつて……」

「すいません、タケルさん。この人、少し借りていきますね」

「どうぞ、どうぞ。すいません、いつもいつもうみこさんにはご迷惑をおかけして」

「ちよ、ちよっと、興梠君！ 今のは一体どういう意味——」

「行きますよ」

ディレクターである葉月さんを引きずるようにして、会議へと連れていくうみこさん。

やっぱりこうなったか。だから俺は会議に出席しろと言ったのに……。

しかし、こうなってしまったのは葉月さんのせいなので助けたりしない。自業自得である。

そんな思いを抱きつつ、ずるずると引きずられていく葉月さんを見ていた俺だった。

セクハラは言うまでもなく、した方が悪い

「さて……」

葉月さんがうみこさんにより、連行されてしまったので、企画の仕事ができなくなっ
てしまった。

仕方がないので、キャラデザでもしようと思自分の席へ戻る。

キャラデザは完成のめどがたつたとはいえ、まだ終わっていないからな。残業しない
程度のところまでは進めておこう。

そんなわけで自分のパソコンを立ち上げていると、机の上で頭を抱える新人ちゃんの
姿が目に入った。ついでに、おもちゃの剣をぶんぶん振り回すはじめの姿も。就業中
に、何をやっているんだあいつは……。

はじめには構わず、俺は頭を抱える新人ちゃんの元へ。

「涼風さん、お疲れさま」

「わひゃあつ!？」

声をかけただけで、すごい驚かれた。そして、警戒心マックスの表情で睨まれる。泣きそう。

まあ、彼女にとって俺は女の敵みたいなもんだからな。仕方がない。

「えつと、な、なんででしょうか？」

やばい……新入社員にもう嫌われてるとか、心折れそう。これは一度、しっかりと話し合っておく必要がありそうだ。

「い、いや、俺の席から涼風さんの姿が見えて、頭を抱えてたから。どうしたのかなと思つて」

警戒心を抱かれないように、普段よりも優しい声色で尋ねる。

「……そ、その、先ほど八神さんに指示されたページをやっていたんですけど、よく分からなくなつてしまつて」

シユンとする涼風さん。コウのデスクに視線を移すも、彼女は今確か会議に出席しているはずだ。

あいつ……適当な指示にもほどがあるだろ。仕方がなく、俺は彼女が分からないと言つたページを覗き込む。

「どれどれ……ああ、これくらいなら俺にもわかりそうだから、教えてやるよ」

「えっ……いいんですか？」

「新人のわからないところを教えるのが上司の役目だからな。まあ、コウよりは技術に劣るけど、それは許してくれ」

「あ、ありがとうございます……」

この人、意外といい人なのかも……という表情を涼風さんが浮かべる。取り敢えず、一定の好感度を上げることには成功したらしい。

そのまま、分からないと言った部分を彼女に教える。

「……よしつ。教えられるところは、こんなもんかな。また、分からなくなったらいつでも俺に言ってくれ」

「は、はい。すいません、お手を煩わせてしまって……」

「全然大丈夫だから、気にすんなよ」

そう言って涼風さんに微笑みかけたのだが……どういうわけか、彼女は顔を真っ赤にして、瞳を潤ませている。

えっ？ 俺、何か悪いことした？

「お、お礼は……身体で払ったほうがいいんですか？」

一瞬、言われたことの意味が分からずに、俺は呆然としてしまう。しかしその後、数

秒かけて、彼女の言った言葉の意味を咀嚼し……。

顔がとんでもなく熱くなった。

「な、なな、何を言い出すんだ急に!？」

「だ、だって、今日の朝、八神さんを襲ってしまいましたし……。お礼をするなら、それくらいしないと足りないかなって……」

「どうやら、彼女に対する俺の誤解は、とんでもないレベルになっていたらしい。教えてくれたお礼は身体って……。どんなAVだよ!」

「違うから、涼風さん! それは大きな誤解だから。俺、そんな変態じゃないから!」
「真つ赤な顔を手で覆う涼風さんに、俺は必死に変態じゃないと繰り返す。しかし、必死過ぎて、逆に変態感が増している気がしてならない。」

「さつきまでいい雰囲気だったのに、どうしてこうなった!？」

「ご、ごめんなさい。私、期待に応えられるような身体つきでもありませんし、え、ええ、エッチな知識ありませんけど……」

「お、落ち着いて、涼風さん! 今日の朝見たことは全部、違うんだよ!!」
勢いあまつて俺は、彼女の肩をガシツと掴んでしまう。

「ひいっ!」

短い悲鳴と共に、怯えたような表情を浮かべる涼風さん。それもそのはずで、血走った瞳に、荒い息を吐いた男に詰め寄られているのだ。

俺が涼風さんの立場なら、間違いなくピンタしている。しかし、冷静さを欠いた今の俺では、そんな事にすら気付けない。

「全く……さつきから何をやっとするんですか? 新入社員相手に、いきなりセクハラとか、洒落にならないので、やめてもらえますか?」

呆れたような声で冷ややかなツツコミを入れたのは、隣に座るゆん。

そこでようやく冷静になった俺は、今現在の状況を再認識する。怯える新入社員の肩を掴み、はあはあと荒い息を吐く上司。うん、間違いなく俺は変態であり、セクハラ同然の行為だ。

いつの間にか、はじめも不思議そうな表情で俺たちのやり取りを見守っている。

「ごめんな、えっと、青葉ちゃんやっただけ? うちの上司が本当にご迷惑を」

ぺこっと、ゆんが涼風さんに向かって頭を下げる。先輩のしりぬぐいをする後輩の鏡。まじで、ごめんなさい。

「い、いえ、謝ってもらうほどじゃ……」

「青葉ちゃんが謙遜する必要なんて何もなくて。悪いのは全部、タケルさんやから」
そう言つて涼風さんに笑顔を浮かべた後、鋭い視線を俺に向ける。

「タケルさん、さっきのやり取り、ほんまもんの変態みたいでしたよ？」
「うぐつ……」

辛辣なゆんのツツコミ。しかし、本当にその通りなので何も言い返すことができない。

変態というレッテルを貼られた俺は、その場に崩れ落ちそうになる。

「タケルさん、青葉ちゃんを怖がらせたバツとして、明日うちたちのお昼を奢ってもらいますからね？」

「ちよ、ちよつと待った！ 涼風さんはいいけど、どうしてゆんの分まで奢らなきゃいけないんだよ!？」

「……奢らないと、今日の出来事、社内メールで全員に送信しますよ？」

「明日、誠心誠意を込めて昼食を奢らさせていただきます」

社内での居場所をこれからも確保するために、俺は土下座を敢行する。

「あつ！ ゆんばつかりずるい！ タケルさん、私の分も奢ってくださいよ！ 今月、おもちや買いすぎちやつて、ピンチなんです」

はじめに関しては自業自得だろ。それに、三人ともなるとお金が……。

「え、えつと、流石に三人は、厳しいかなと……」

「あゝ、はじめにもおごつてやらんとうち、社内メールでセクハラの件、一斉送信してしまいそうやなあゝ」

「分かった！ はじめにも奢るから！ だから、社内メールは送らないでくれえええ!!」
床に頭を擦り付けて部下に許しを請う、上司の姿がそこにあつた。

うう、これで今月のお昼代が凄いことに……。好きなアニメBDの初回限定版が買えなくなつてしまった。

「い、いいんでしょうか……えつと」

「うちは、飯島ゆん。気軽に『ゆん』って呼んでもらつて大丈夫やから」

「あつ、はい。ゆんさん。それで、本当にいいんですか？ 明日の昼食を奢ってもらうなんて……」

申し訳なさそうな顔になった涼風さんに、ゆんは問題ないと手をふる。

「青葉ちゃんに怖い思いをさせたんやから、ある意味当然の報いや。だから、気にしないで大丈夫やで♪」

俺の財布は大丈夫じゃないんですけど……。しかし、そんな事を言える立場ではないので、唇を噛んで耐えるしかない。

畜生、俺はどうしてセクハラまがいの事をしてしまったんだ。

「やったー！ 明日だけだけど、昼食代が浮くぞ。これでまた別のおもちやが買える！」

おもちやを買えると喜ぶはじめ。はしゃぐ姿はまるで子供の様である。少しは貯金しろ！

「それで、明日のお昼は会社近くのイタリアンで問題ないですよね？」

「お、お前、そのイタリアン、結構いい値段する——」

「いいですよね？」

にっこりと威圧的な笑みを浮かべるゆん。

「……はい」

逆らうことのできない俺は情けなく首を垂れる。世の中というのは結局、罪の犯したほうが悪なのだ。セクハラ未遂でも、セクハラと言われてしまえば、それが正しくなる。実に不平等な世界だ。

……今回に関しては現場を見られてるから、どうしようもないんだけど。あの現場を百人の女性が見たら、百人ともセクハラで俺を通報するだろう。

「ありがとうございます、タケルさん。やっぱり、タケルさんはほんまに優しいですね」
「あ、あはは……」

奢らせといて、何が優しいだよ！

昼食を奢ってもらえるとすつかりご満悦なゆんに、俺は乾いた笑いを浮かべる。

「そうだ！ ひふみ先輩も、タケルさんに奢ってもらったらどうですか？」

能天気にはひふみへとはじめが話をふる。

はじめさん、そうやってホイホイ話ふるのマジで止めて！ 財布のライフはとつくに

ゼロなんだから！ むしろ、マイナスなんだから！

だけど、ひふみはいつも昼食を会社で食べてはいない。だから、ワンチャン奢らなくてもいいと言ってくれる可能性が……。

そんな事を考えているうちに、イヤホンを外したひふみが振り返る。

「……わ、私は……いいよ。いつも……家で、食べてきちやってるから……」

よ、よかったあ。流石はひふみん。今回は家で食べてきているという、キミに救われた。

しかし、なぜか手招きをされる俺。

「な、なんでしようか？」

するとひふみは俺の耳元へ顔を寄せ、

「……………今度、飲みに行くときは……………タケル君が、奢ってね……………」

囁くような彼女の言葉。耳にかかる彼女の吐息がこしよばゆい。なんかのご褒美かと思つた。

あまりの気持ちよさに、社内でありながらぞくぞくしてくる。思わず顔を向けると、微笑を浮かべたひふみと目が合った。

「ま、任せとけ」

あまりの可愛さに発狂しかけたが、その気持ちを何とか抑える。何度見ても、笑顔の彼女は天使だ。

ひふみの笑顔って割とレアだから、見るとただただ幸せになれる。

しかし、幸せな気分には浸っていない場合ではない。なぜなら先ほど、明日のお昼を三人に奢るといふ約束（脅迫）をしてしまったから。

「何を話しているんですか？」

「いや、何でもないよ。ただ、俺の財布がより軽くなった……………」

「よく分からないですけど、タケルさんは大変なんですね!」

「そうだよ、大変なんだよ俺は! 恐らく、何もわかっていないであろうはじめに励まされる。」

「……さて、話も済んだことだし、みんな仕事に戻れよ」

「いったい誰が、うちの仕事を止めたと思ってるんですか?」

「う、うるさい! それよりも、涼風さんが困ったらしっかりと教えてやるんだぞ?」

「任せてください、タケルさん! 青葉ちゃんも、困ったらちゃんと聞くんだよ!」

「は、はいっ! ありがとうございます」

「はじめがちやんと教えられるのか、うちは不安やなあ」

「そ、それくらい、大丈夫だよ!!」

ゆんにいじられるはじめをしり目に、俺は自分の席へと戻る。なんか、何もしてないのにドツと疲れた。

新人とのコミュニケーションは、何時の時代も難しい。その事を改めて痛感する俺だった。

その日の夜。

「あれっ？ 珍しいね、タケルがこんな時間にまで残ってるなんて」

パソコンに向かって唸っていた俺に、同じく会社に残っていたコウが声をかけてきた。

「こいつがこの時間にいることは珍しくない。一方の俺は、毎日定時退社を目標にしているため、この時間に残っているのは珍しいのである。」

残業はマスター前だけで十分。残業はしたくないでござる。

ちなみに、りんは帰宅しているためこの場には居ない。というか、いたらとつくに殺されてる。

「いや、ちよつと色々あつてな。後々焦るといけないから、今のうちに焦ってるんだよ」「どうせまた、葉月さんに色々言われたんでしょ？」

流石、長年一緒に働いているだけあつてコウはよく分かっている。まあ、彼女もまた葉月さんに無茶苦茶なことを言われる被害者だからな。

「まあ、そんなところ。今日の会議後に改めて企画を提出したら、「うーん、これじゃあちよつと面白みが足りないねえ」。そうだ！ ここをこうして、こっちはこうで

……」つて感じに修正の嵐だったよ」

「というか、俺の提出した企画、ほぼやり直しだった。だからこそ、こうして残業に励んでいるというわけである。」

「葉月さんつて、普段適当な割には、作品のことになると厳しくなるからね。私も、何度やり直しをくらった事か……」

フェアリーズストーリーの3もそうだが、2でも俺たちは散々やり直しをくらった。まあ、今となつてはそれもいい思い出なんだけど。」

しかし、その当時に戻りたいかと言われれば、絶対に戻りたいとは思わない。

残業、残業、また残業……。徹夜がダメな俺にとつて、当時の日々まさには地獄よりも酷い日々だった。

「というか、コウはどうして残ってるんだ？ 今はそんなに忙しくないだろ？」

「うーん、私は会社のほうが落ち着くから？」

「借りてる部屋が泣いてるぞ……」

家に帰りたくなるのが普通だと思っただけ……。

まあ、うちの会社にはシャワー室もあるし、着がえさえ持つてくれば、全然住めるんだけどね。」

「それに、タケルも残ってたみたいだったし。なら、私も残ろうかなつて」

「……………今の言葉、他の奴に言うなよ？ 絶対だからな」

「ほえっ？ なんで？」

何でって……………そりゃ、勘違いするやつが絶対に出てくるからだよ。

しかし、こいつのことだ。男の気持ちなんて全く考えていないんだろう。ほんと、男泣かせだよ、コウは……………。

不思議そうに首を傾げるコウに、俺はため息をつく。

「それにしても……………今日、青葉からやたらタケルのこと聞かれたんだけど、何かしたの？」

おっと、話がまずい方向に……………。

「……………何もしていません」

「何もしてなければあんなにタケルのこと、しつこく聞いてこないと思うんだけど？」

ジトつと俺を見つめるコウに、観念したと手を上げる。

「えっと、それには深いわけがあつて……………」

今日あつたことを全て説明すると、コウからの視線がますます厳しいものになった。

「……………タケルの変態」

「返す言葉もございませ……………」

俺はただの変態です。もう、否定するのも疲れた。

「ところで涼風さんはコウの目から見てどうだ？」

「んー？ 青葉？ うーん、まだどうこう言えるレベルにはなっていないけど、少なくとも真面目だし、いい子だよ。飲み込みも早いし、将来有望かも！」

「天下の八神先生に褒められるとは、なかなか見込みがあるんだな、涼風さん」

「だーかーら、八神先生はやめてって！」

怒ったようにコウが両頬をムニムニと引つ張ってくる。痛いけど、心は痛くない。むしろ、コウと合法的にイチヤイチャできていたので幸せなくらいだ。

ひとしきり俺の頬をムニムニして、コウは手を離す。

「全く……私の事をいじってる暇があったら企画を進めなよ」

「進めたいのは山々なんだけどな。夜遅くて眠いおかげで、全くアイデアが出てこない！」

「頼むよ。タケル達企画が作業進めてくれないと、私たちの作業も進まないんだから」
「ぜ、善処します……」

しかし、善処するも何もまずは葉月さんを突破しない限り、どうしようもない。

早いところ、葉月さんを納得させられるような企画を作る必要があるそうだ。

「あつ！ そういえば、2、3週間後くらいに、キャラ班で青葉の歓迎会をやるんだ。それで、タケルも参加にしておいたから」

「はいはい、俺も参加……って、えっ？ 何で俺も参加？」

「タケルも元キラ班の人間でしょ？ それにはじめやゆん、ひふみんとも仲もいいし、いいかなって！」

まあ、確かに仲がいいから大丈夫だけど、涼風さんとのコミュニケーションだけが心配だなあ。飲み会までに誤解を解いて、信頼を取り戻しておかないと……。

しかし、信頼を取り戻すのは一筋縄ではいかない気がする。だって信頼を作るのは難しく、失うのは簡単だからな。……はあ。

「それじゃあ、ありがたく参加させてもらおうよ。参加費はどのくらいなんだ？」

「飲み会は会社のおごりだから大丈夫だよ」

よしっ、それなら思う存分飲んで食ってやろう。誰かの金で食べる飯ほど、美味しいものはない。

「ちなみに、来るのはキラ班のメンバーだけ？」

「キラ班のメンバーと、あとりんも来るよ！」

「……………」

彼女もやつぱり来ますよねえ。途端に飲み会が憂鬱になってしまった。当日は隅っここで大人しくしておこう。

「うっし、じゃあ俺はもう一回企画を練り直すとするわ。コウも、帰れるときはちゃんと

家に帰るんだぞ？」

「タケルってば、ま……お母さんみたい。うん、今やってる仕事が一区切りついたら今日は帰るよ」

そう言つて俺たちは元のデスクに戻る。

最終的に俺たちが一緒に会社を出たのは、夜の12時を回ったころだった。

明日の朝、ちゃんと起きれるか心配です。

偶然とは、予期せず起こるから偶然なのである

残業によって見事遅刻しかけた俺は、息も絶え絶えに会社へと滑り込んでいた。やっぱり、残業なんてするもんじやない。

流れる汗を拭きつつ俺は自分の席に着く。

「タケルってば、遅刻ギリギリだよ?」

既に着席してコーヒーを飲んでいたコウに声をかけられる。その声に、からかいの色が混ざっているの言うまでもない。

「仕方ないだろ。俺、朝強いわけじゃないし。というか、俺よりコウの方が朝弱かったはずだろ?」

「わ、私は……大丈夫だから」

冷や汗を流したコウがそっぽを向く。しかし、俺は知っていた。こいつは毎朝、りん

からのモーニングコールで起きていることを。

あえてツツコむ様なことはほしくないけどね。ちなみに、どうして俺がこんなことを知っているのかと言えば、りんに自慢されたから。「コウちゃんは私のモーニングコールで起きているのよ」って感じに。

そんな彼女の言葉に大人げなく嫉妬したのは内緒。

「まあ、遅刻しなかったから許してくれ。それよりも、お前に頼まれてたキャラデザ、完成したから一度確認してもらえるか？」

「えっ！ もうできたの？ 早いねえ。流石タケル!!」

「全く、俺が何年キャラデザにいたと思ってるんだよ。あれくらいのキャラデザ、お茶の子さいさいだ」

「その割には頭を抱えてたじゃん」

痛いところをつかれて俺は口をつぐむ。確かに完成したとはいえ、今回のキャラデザは意外と細かい部分が多かったので若干苦戦したのだ。

俺のキャラデザスピードは、決して速いとは言えない。むしろ、ひふみとかに比べたら遅いくらいである。

「ま、まあ、とにかく完成したからいいんだよ！」

「ものすごく強引に押し切られた気がするけど……でも、ありがとう。じゃあ、確認して

おくね」

俺から渡されたキャラデザの紙を手にも、コウは自分の席へと戻っていく。さて、俺も自分の仕事に戻りますか。相変わらず、企画の方は行き詰ったままだし……。

そんなわけで、企画を考えること約一時間。

「ちよつと、お手洗いに」

席を立ち、俺は一度扉の外に出る。すると、

「うっ……うっ……」

新入社員の涼風さんが体育座りをして泣いていた。

あ、あれっ？ 知らないうちにまたセクハラして泣かせてたっけ自分？ しかし、昨

日の今日でセクハラなどありえないので、彼女は別の理由で泣いているのだろう。

「え、えつと、涼風さん？」

泣いている彼女に声をかける。

「あっ……えつと」

「そういうえば、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。俺は企画班の興梠タケル。まあ、企画班と言っても普通にキャラデザも手伝ってるんだけど。そんな事はどうでもいいとして、どうしたんだこんなところで？」

顔をあげた彼女は潤んだ瞳で俺を見上げてきた。やばい、可愛い。

「こ、興梶さん……お手洗いに言ったら、社員証がなくて」「な、なるほど……」

この会社は、社員証がないと会社内には入れない。

つまり涼風さんが泣いていたのは、トイレに行ったあと社内に入れなくなってしまったから。

確かに、入社二日目に社内へと入れなくなったら泣きたくもなる。朝は普通に出勤できていたみたいなので、恐らく先輩社員の誰かと一緒に入ったのだろう。

「悪いな、涼風さん。この会社は社員証がないと、中に入れないことになっているんだよ。一応、君の先輩にりんが頼んでおいたはずなんだけどな」

しつかり者のりんがコウに伝えなかったとは考えにくい。きつと、コウが忘れているのだろう。

「ちよつとコウに聞いてみるわ」

涼風さん連れて再び社内へ戻る。そして、鼻歌を歌いながらキャラデザをしているコウの元へ。

「おーい、コウ」

「ん？ あれ、タケルじゃん。どうしたの青葉を連れて？」

「いや、涼風さんの社員証がまだ作られてないんだけど、どうしたのかなって？」

「えっ！ 青葉の社員証ってまだなかったの？ 全く、それを忘れるだなんて事務も適当だよな」

「おかしいなあ。昨日のうちにりんからコウへ連絡が入ってるはずんだけど」

俺の言葉にコウが記憶を遡るようにして固まる。しばらく時間をおいて、

「い、今から撮ってきまーす」

慌てて写真を撮りに、涼風さんを連れて自分の席から出ていった。俺はため息をつく。やっぱり、忘れていたらしい。

「コウちゃんとは話してたの？」

……だから、いきなり現れるのはやめてくれ。心臓に悪い。

ほんと、これじゃあコウと仕事の話も出来んぞ……。

「いや、さっきトイレに行ったら涼風さんが社内に入れなくて困ってたんだよ。それで話を聞いたら、社員証を持っていないって」

「社員証って……もうっ！ 昨日頼んでおいたはずなのに」

今回の件には流石の遠山さんもお腹みただ。コウって、キャラデザ以外の時は結構抜けてる。私生活とかも適当だし。

「だけど、おつちよこちよいなコウちゃんも可愛い」

それでいいんですか、遠山さん？ 不満げな表情を引つ込め、ニマニマとりんが微笑

む。

ほんと、俺にも毎回そんな笑顔で微笑んでほしい。自分の世界へと入ってしまったりを放つて俺は席へ戻る。

その後、無事社員証を取り終えたらしいコウと涼風さんも戻ってきた。写真を撮っている最中、はじめの光る剣を借りていたけど、どういふことなのだろう？

ちなみにその後、社員証を机の上に忘れた涼風さんが再び社内に入れず泣いていた。彼女は天然なのだろうか？

☆ ★ ☆

涼風さんの社員証を作ってから約一週間後。

「うーん、だいぶ良くなったけどまだ固いね」

涼風さんの作った村人のキャラデザに対して、コウが指摘を入れている最中だった。ちなみに俺は相変わらず企画を提出し、葉月さんに大幅修正された企画し、修正しを繰り返している。それでも、一週間前に比べれば格段に企画は進展していた。

「えっ……でもこれって村人ですよ？ そんなに見ないんじゃない？」

コウの指摘に、涼風さんが戸惑いの声を上げる。確かに涼風さんの言うことも分らない。村人というのはあくまでモブ。主人公たちの陰に隠れている存在だ。

「そう？ 私はしよつちゆう見てるけど」

しかし、村人の作成ですら八神コウというキャラデザイナーは妥協しない。涼風さんに再度リテイクを要求する。

シユンとした涼風さんの背中が見えなくなつてから俺は小声でコウに声をかけた。

「なあ、ちよつと涼風さんの作ったキャラデザを見せてくれないか？」

彼女は一週間前から村人を作成しているのだが、未だ完成には至っていない。

「青葉のキャラデザ？ いいよ」

コウの許可を得たところで、俺はパソコンの画面を覗き込む。

そこに写っていた涼風さんのキャラデザは実際、なかなかのものだった。正直、俺が新人だった時よりもうまい。まあ、確かに表情が硬かったりしているものの、最初のキャラデザとしては十分合格点であろう。

「これでリテイクか。なかなか厳しんだな」

「タケルの言う通り、これでも十分合格点なんだけど……」

その先の言葉を発することはなかったが、きつと彼女は涼風さんに期待している。だ

からこそ、あえて厳しいことを言っているのだろう。

コウは決して口に出さないけど、長年の付き合いだ。何となくわかる。

「そうか。まっ、新人教育も上司の仕事だし、程ほどに頑張れよ」

「ほどほどにつて……それは褒めてくれてるの？」

「ちゃんと褒めてるから安心しろ。じゃ、俺は仕事に戻るから」

涼風さんもなんだかんだ大丈夫だと思おうし、問題ないだろう。そう思って俺が席に戻ろうとしたところで、

「興梠君。先ほど提出してもらった企画の修正をお願いしたいんだけど」

笑顔で修正を要求する葉月さん。

「……………はい」

頷きたくなかったものの、頷くしかない。今日は就業時間ギリギリまで仕事決定です。

☆ ★ ☆

「タケルさん、お疲れ様ですーす!」「タケルさん、お疲れ様です」

「お疲れ……つて、もうそんな時間!?!」

驚いて時間を確認すると、時刻は既に11時を回ろうかという所だった。

(最近はわりと遅くまで残ってたし、今日は帰ろうかな)

俺は大きく伸びをする。疲れていてもいいアイデアは出てこないし、風邪でも引いたら大変だ。……という、大義名分を心の中だけに掲げ、俺は帰り支度をする。

(よしっ、じゃあ帰るか)

席を立った俺だったのだが、まだパソコンの前に残って作業をしている涼風さんとの姿が目に入った。

「二人とも、どうかしたのか?」

「あつ、興柁さん」

涼風さんが不安げな瞳で俺を見つめてくる。パソコンの画面には3Dのキャラモデル。

コウからリテイクの指示を受け、あれからずっとリテイクをしていたのだろう。

「ちよつと見せてもらおうな」

画面に映る村人は修正前と比べ、かなり良いものになっていた。涼風さんが不安がる程、出来は悪くない。

修正前にも思ったが、新人にしては及第点以上である。

「やっぱりこれじゃダメですよね……」

「いやいや、ダメどころかこれで採用したほうがいくらいだよ。りんもそう思うだろう？」

傍らに佇んでいたりに声をかける。

「そうね。すっかりできていると思うし、最初でこれは凄と思うわ」

りんも感心したように頷く。俺だけじゃなく、彼女も認めるほど涼風さんの力量は凄いのだ。

それにしても、コウが絡まないとりんとの会話は至って平和である。毎回こんな感じならいいのに……。

「で、でも、まだ納得できてない箇所がいっぱいあって……」

上司の二人の褒められても涼風さんの表情は晴れない。まあ、直属の上司に認められないわけだしな。彼女が納得できないのも無理はないだろう。

「コウちゃん、厳しいものね」

納得できないと言った涼風さんに、りんは苦笑いを浮かべる。ストイックなコウを間近で見えてきたひとりだからな。

「遅れは大丈夫だから、今日はもう帰りましょう」

「……はい」

りに促され、涼風さんはようやくパソコンの電源を落とす。

帰りたくなさそうなのは明らかだが、残業すればいいキャラデザができる……というものでもない。集中力が無くなった中で仕事をして、時間と体力を無駄に浪費するだけである。

だからこそ、疲れた時は早く帰った方がいい。さつきから、自分を正当化する言い訳を言っているだけのような気がする。

そのまま三人で会社を後にし、駅へと向かう。正直、りんが何も言わなかったのが意外だった。絶対、「一緒に歩かないでもらえるかしら？」と言われると思つてたのに……。

まあ、新入社員の手前、そんな事も言えなかったのだろう。冷たい視線を向けられなくてよかったのだが、俺たちにはまた別の問題があるんだよね。

なんて事を考えながら改札口をくぐり、俺たちは駅のホームへ。そして、ちょうどやってきた電車に乗り込んだ。

「青葉ちゃんは一人暮らし？」

「いえ、実家から通いです」

隣で二人が話している。

なるほど、涼風さんは実家暮らしなのか。それなら、遅く帰ってもご飯とお風呂は保証されているのだろう。一人暮らしだと何も出てこないからな。

反面、一人暮らしは何をしても文句は言われたいし気楽に生活できるため、一概に悪いとも言えない。もちろん、俺は一人暮らしである。

たまーに、妹がやってきて掃除とかしてくるんだけど。

「NPCは作って楽しい?」

ざっくりとした質問に、涼風さんは少し複雑な表情を浮かべた。

「楽しいです……だけど、こんなに大変だとは思いませんでした。修正が来るのも初めてで……」

「そうね。それがモノを作ってお金をもらうってことよね」

彼女の言葉は妙に重みをもって俺の心に響く。

モノを作ってお金をもらうというのは、とても難しいことだ。俺自身もその事入社から7年間で痛感している。

キャラデザにしろ、企画にしろ、売れなければ意味がない。利益を上げられなければ会社は立ち行かなくなってしまう、待っているのは倒産という結末だけ。

だからこそ、何度も修正が必要なのである。面白い作品を、汚い話ではあるがお金となる作品を世に送り続けるために。

そこでりんが、思案顔になっていることに気付く。そして口元に手を当て、

「実はね、今朝の青葉ちゃんの提出してきたのは、本当ならオツケーなの」

突然のカミングアウトに涼風さんの目を点にする。そして、「ふえっ!？」と可愛い奇声をあげながら立ち上がった。

可愛いけど、電車内で急に立ち上がると危ないよ。今は人が少ないからいいんだけどね。いや、なにもよくないわ。

「うう……どういふことなんですか一体」

頭を抱える涼風さん。まあ、彼女の言いたいことも分からなくはない。俺だったら多分、発狂している。

「青葉ちゃんには、通常のオーケーラインで満足してほしくなかったからじゃないかな。コウちゃんは少し不器用なところがあるけど、あれでも期待してるのよ。タケルもそう思うでしょ?」

「俺もりんと同じだよ。コウは何も言わないけど、理由もなくリテイクを連発させるよ。うなやつじゃないから」

「そ、そうなんですか」

「そうよ。だから安心して……。あつ、私この駅で乗り換えだから」

「俺も乗り換えだな。それじゃあ涼風さん、お疲れ様」

「あつ、はい！ お疲れ様です。ところで——」

涼風さんが不思議そうな顔をして訊ねてきた。

「お二人の家は同じ方向なんですか？」

『っ!?!』

ギクツ、といった表情で俺たちは固まる。同じ方向は同じ方向だ。

しかし、こんなことを新入社員に知られたくはない。

「い、いやつ、乗り換えの駅が同じだけだよ。家の方向は全然違うんだ!!」

「そ、そうよ青葉ちゃん！ 私たちは乗り換えの駅が同じだから!!」

「そ、そうなんですわ……」

先輩二人の気迫に涼風さんは引いていた。そのまま涼風さんと別れ、俺とりんは二人で別の電車に乗り換える。

同じ駅で降りた俺たちは、同じ改札口をくぐり同じ道を歩いて、同じマンションへ。そしてりんは305号室。俺は306号室の鍵を開ける。

「……このことは青葉ちゃんはもちろん、コウちゃんにも絶対に内緒だからね」

「言われなくても、こんなの絶対に言わないよ。特に社内の人間にはな……」

「絶対よ？ それじゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

事務的な挨拶を済ませ、俺たちはそれぞれの部屋に入っていく。……もう言わなくても分かると思うが、俺とりんのマンションは同じであり、しかもお隣の部屋だった。

言っておくが、お隣同士になったのは偶然だし、俺の方が早くこの部屋に引越してきている。家賃もそれなりに安く、部屋も綺麗で広いため気に入っていたのだが、こんなことになるだなんて……。

ちなみにお互い、引越す気は全くない。りんが隣にいるからとかそういう理由ではなく、単純に引越しが面倒だし、こんないいマンションも他にないからだ。他意はない。

酒は飲んででも飲まれるな

涼風さんに、俺とりんの部屋が隣同士だということがばれかけた次の日。

「あれ？ 涼風さん、もう入社してたの？」

9時になる少し前に入社した俺は、既に自分の席でキャラデザをしていた涼風さんに驚きの声を上げる。てつきり、今日は一番乗りだと思っていたからな。

俺がこんなに早い時間に出社しているのはご存知の通り、企画の仕事がまだ葉月ボスの許可を得ていないからである。早く終わらせないと洒落にならない。

「あつ、興梠さん。おはようございます」

ペコつと頭を下げる涼風さん。

「それは、昨日リテイクを指示されてた村人のNPC？」

「はい、そうです！ 昨日、ねね……友達との電話で少しヒントを得たので、朝早く出社して直そうかなと」

俺が画面を覗き込むと、昨日あれだけ苦しんでいた村人のNPCは格段に良くなっていた。表情も柔らかくなったし、より親しみやすいキャラに変貌している。

友人と何を話したのかは知らないけど、いいアドバイスをもらったんだろな。

もちろん、メインのキャラほどのインパクトはない。しかし、名脇役のキャラから滲み出す渋さみたいなのが増した。うん、俺そういうキャラ好きだよ。

「すごい、よくなってるじゃん。これなら多分、コウの許可も出ると思うよ」
「そうなればいいんですけど……」

そこで、コウのデスク辺りから『ピピピ……』という目覚ましの音が聞こえてくる。あいつ、昨日も泊まったのかよ……。

「おはよう、青葉にタケル。今日は早いなあ〜」

しばらくすると、眠たげな瞳を擦りながらコウが歩いてきた。

相変わらず、Tシャツとパンツだけの姿で。うーん、眼福眼福。

「あ、おはようございます……って、スカート履いてくださいよ!! た、タケルさんもいるんですよ!?!」

「へっ?」

スカート履いていないコウに、涼風さんが少し顔を赤くしてツツコむ。スカート履いていない人にしつかりとツツコむのが、本来の姿なのだろう。

しかし、俺はパンツ見たさにツツコむことを止めてしまった。元気にツツコむ涼風さんを見習わないと。

それにしても、八神さんがいつも通りで泣きそう。

「うーん、タケルなら見られても別にいいかなつて。恥ずかしくないし」
もつと泣きそう。

「八神さんも女の子なんですから、もつと身だしなみに気を付けたほうがいいと思いますよ?」

「女の子って……てへへ」

「褒めてないです」

なぜか照れて頭をかくコウ。そんな彼女に向かって、涼風さんが辛辣なツツコミを入れる。

「そうだぞ、コウ。お前も、一応女の子なんだからもつとお洒落に気を遣え。もつとフリフリの格好をしろ」

「それは絶対にイヤ。何度でも言うけど私、色気皆無だし……」

いやいや、今現在のパンツ姿はかなりの色気がありますよ? 普通の男なら一発で

ノックアウトです。あんたは自分の魅力をもう少し自覚してください。

それに、フリフリの格好をしていけばりんが「可愛いっ!!」と言つて喜ぶからな。機嫌もよくなり、俺への攻撃も少なくなるので一石二鳥である。

「それよりもコウ。涼風さんから話があるみたいだぞ」

「えっ? 話?」

「あつ、はい! 丁度、村人のキャラデザが終わったので、チェックをお願いしますか?」

そう言つて彼女は、コウに村人のNPCを見せる。

「うん、わかった。それじゃあ確認するね」

コウは涼風さんの席に座り、キャラの確認をし始めた。キャラを上下左右動かしながら、真剣な瞳で涼風さんの村人をチェックしていく。そして、

「OK。すごくよくなった!」

遂にコウからの了承を得た涼風さんは顔を綻ばせ「やった!」と、両手でガッツポーズ。可愛い。

「青葉的にはどう? 満足?」

嬉しそうな涼風さんにコウが訊ねる。

「これは満足ですけど、また一から作ったら、もつといいのができる気がします。後、時間がかかりすぎですね……」

うーん、今の若い子はしつかりしてるなあ。とても高卒一年目のセリフとは思えない。

俺なんか「満足です。もう作りたくないです」とか、口走る気がする。

「確かに一週間は時間、かかりすぎだね。じゃあ、次は三日で作ってみようか」

「えっ?」

「だから、スリーデイズ!」

やべえ、うちの同期がとんでもないことを言い出した。高卒一年目にキャラデザをスリーデイズでとか、鬼畜以外の何物でもない。

俺だってキャラデザには最低でも二日、三日かかる。コウはそれだけ、涼風さんに期待してるということなんだろうけど……。

「せ、せめて4日になりませんか?」

「お、俺もそっちの方が現実的だと思っただけ」

さりげなく助け船を出す。しかし、うちの同期はどこまでも高いレベルを掲げる人だった。

「何言ってるんだよ。最終的には一日一休、作ってもらおうと思ってるんだからね！」

当然という口調でコウが言い切る。おいおい、一日一休だなんて俺でも無理だ。

「ひふみ先輩が言ってる帰れなくなるって、こういうことですか？」

ひふみも、余計なことを涼風さんに吹き込んだりや駄目だよ。会社の闇を涼風さんに見せるのはまだ早い。むしろ、闇を知ってるのは俺たち上司だけでいい。

「ま、まあ、終われば帰れるし」

涼風さんの質問に、苦しい言い訳でコウが返答する。正直、何の解決にもなっていない。

「嫌です！ 私、下着姿で寝るなんてありえないです！」

「なにおう!!」

「そっちかよ!!」

ツツコまざるを得なかった。というか、普通の人は会社で、男がいる中で下着姿で寝ないからね!!?

☆ ★ ☆

涼風さんのキャラデザが無事終わってから二日経過した仕事後。

「それでは少し遅くなっちゃいましたが、涼風青葉ちゃんの新人歓迎会を行いたいです。乾杯！」

『乾杯!!』

りんの音頭で俺たちは各々飲み物が入ったグラスを持ち上げ、カチンと合わせる。そして、俺はグラスに注がれていたビールでのどを潤す。

今日の夜は、あらかじめ予定されていた涼風さんの歓迎会だった。

出席者はキャラデザ班（コウ、ひふみ、ゆん、涼風さん）と、はじめとりんと俺。ちなみに俺はひふみの右隣。コウの横に行こうと思ったら、遠山さんにもすごい瞳で睨まれこの席に落ち着いた。

べ、別に悔しくなんてないんだからね。ここの席だとトイレとか行くのに便利だし!! 「今日は会社のおごりだから!」

ほんと、こういう所は気前のよい会社だと思う。普通、飲み会の費用なんて社員負担が当たり前だろうし。

「よっしやー！ 食うぜ!!」

コウが鍋に入っていた肉を根こそぎ箸で掴み、自分の皿へと移す。

「あー!! そんなに肉をもつていかないで下さいよ!!」

それを見ていたはじめが声を上げる。全く、二人は食い意地の張った小学生かよ……。ひとしきり肉をもぐもぐした後、コウはテーブルの上に置いてあったたこ焼きを涼風さんに差し出す。あつ、嫌な予感しかない。まつ、止めないんだけどね!

「青葉! 入社祝いにこれ食べてみ」

「えつ、なんですか?」

怪訝そうな瞳を向ける涼風さん。

「まあ、ほれほれ」

「!?!」

無理やり口に突っ込まれ(たこ焼きだよ!）、涼風さんはびっくりしていたようだったが、

「けほつ、けほつ! なにこれ、辛い!!」

からし入りロシアンタコ焼きに悶絶していた。そんな彼女を見て、コウはケラケラと笑っている。

涼風さんには申し訳ないが、これも新入社員の通る道だ。俺も新人の時はやられたし

……。えっ？ 誰につて？ もちろん、葉月さんだよ！！

「青葉ちゃんは、こういう飲み会は初めて？」

「は、はい」

「というか、まだお酒飲めへんもんね〜」

ゆんの奴、顔が真っ赤だ。もう酔っているのだろう。彼女はお酒、もの凄く弱いから。反対に、

「……おいしい」

隣のひふみは、淡々と日本酒を飲み続けている。彼女はべらぼうに強い。俺なんかよりよっぽどだ。多分、この中の誰よりも強いだろう。

俺も強いほうだと思うんだけど、ひふみと飲むと毎回俺が先に潰れるからな。

(さて、グラスのビールも飲み終えたことだし……)

手をあげて店員さんを呼ぶ。

「すいません、このサワーを一つ」

注文を終えて視線を前に移すと、ニヤニヤ顔のコウと目が合った。

「な、なんだよ？」

「いや、タケルつてば相変わらずビールが苦手なのかなつて」

「うるさいな。苦手なものは苦手なんだよ！」

「タケルさんって、どうしてビール苦手なんですか？」

はじめが無邪気な瞳で聞いてくる。その横では相変わらずニヤニヤ顔のコウ。からかわれるだろうから、絶対に言いたくない。

「……特に理由はない」

「タケルは、苦いからビール嫌いなんだよ！」

「えっ！ そうだったんですか？」

「コウ！ 俺の許可もなしに言うんじゃないよ!!」

「アハハッ、子供みたいな理由でしょ？」

コウに笑われて顔が熱くなる。隣ではりんまでニヤニヤと笑っていて……これだから言いたくなかったんだよ！

「でも、ブラックコーヒーは普通に飲んでいますよね？」

「それはそうなんだけど……同じ苦さでも、なんか違うんだよなあ」

とにかく、苦手なものは苦手だということだ。これ以上追及されなくなかった俺は、コウたちから視線を逸らす。

そして運ばれてきたピーチサワーを飲んでいると、涼風さんがこちらを見ていることに気付いた。

「ん？ どうかした、涼風さん？」

「いや、興梠さんって意外と可愛いなあと。サワー飲むって、なんだか女の子みたいですね！」

「……………」

新入社員にまでいじられる始末。素でやってるのか、計算してやっているのかは知らないが、新入社員にいじられるのはとんでもなく恥ずかしい。

まあ、強姦魔と恐れられるよりはましなだけ……。別にいいじゃねえか。男がサワー飲んだって!! ビールが嫌いだって!!

それにしても、涼風さんは意外とSなのかもしれない。その後、しばらく飲み食いしながら談笑を続ける。

途中、葉月さんがやってきて、コウの事をいじったり、肉を大量に食べたりしたが、飲み会は平和に進んでいった。

1時間くらい経過したころ、

「青葉って、彼氏いんの?」

「へっ?!」

唐突にコウが口を開いて、涼風さんに彼氏の有無を尋ね始めた。脈絡のない質問に涼風さんも驚いている。

「い、いるわけないじゃないですか!!」

なるほど、涼風さんには彼氏がいないのか。彼女の可愛さならいても不思議じゃないんだけど。

学校が女子高だったとか、何か理由があるのかな？ 共学なら、男が放っておくはずがないほど、可愛いし。

すると、涼風さんが反撃とばかりに口を開く。

「……でも、八神さんはいそうですよね？」

「へっ!?」

『えっ!?!』

彼女の質問に、コウではない二人の目つきが変わった。主に、俺とりんである。

コウに彼氏なんて、俺が絶対に許さないからな。こちとら何年コウの事を想い続けていると思ってるんだよ。入社から今までの間ずっと。7年間だよ!? 確かに、関係が進展していないのには俺にも原因はある。しかし、それでも彼女への想いは誰にも負けないつもりだ。恋愛は時間じゃないといつやつもいるけど、俺は時間こそ正義だと思ってる。ぽつと出の奴なんかはコウを奪われてたまるか。そもそも、彼女の良さは他の男に

理解できるわけがない。理解できているとしたら、俺かりんだけである。断言してもいい。つまり、俺が彼氏？　として認める相手はりんだけである。りんがコウの事を射止めたら、俺も引き下がるほかない。彼女ならきつとコウを幸せにできるだろう。だけど、俺も毛頭負けるつもりなんてない。俺だってコウのことが好きなんだからな。

……おっと、予想外の質問に少しだけ動揺してしまった。お見苦しいところを見せてしまい申し訳ない。

まあ、目の前に座るりんも黒いオーラを出しているので、気持ちと同じなのだろう。

「いい、いるわけじゃないじゃん！」

「なに初々しく照れてるんすか……」

呆れるはじめを他所に、俺とりんは「ふう……」と安どのため息を漏らす。

これで彼氏がいるとか言ったら、テーブルをひっくり返しているところだった。

「仕事ばつかしてつとよー、そんな暇ねえつーの!!」

いやいや、仕事をしていてもそんな暇はありますよ。あなたの事を好きな男性が目の前にいますよ？

「ぐ、ゴホンッ、ゴホンッ」

俺はわざとらしく咳払いをする。これで少しはコウも――

「タケルってば風邪？ 風邪なら早く病院に行ったほうがいいじゃない？」

「……………」

号泣しそう。オイコラ、りん。ほくそ笑んでんじゃねえよ！ コウの反応に気をよくしたのか、

「ちよつとコウちゃん、飲み過ぎじゃない？ これは私が飲むわ」

「えつ、ちよ、その酒強い……………」

強いというコウの制止も聞かずに、りんはグラスを奪い取るとグイグイとお酒を流し込む。飲み終えたりんは瞳をとろんとさせ、

「私も彼氏いないわ……………」

「聞いてねー」

コウはゲラゲラと笑い、涼風さんは困惑気味。そして俺は、「でしようね〜」という反応。

彼氏がないのは当たり前である。そもそも、りんは彼氏がいればコウを奪い合うといった事態にはなっていない。

「あおばちゃん！ しんじんはせんぱいにおさけをつぐものれす！」

「は、はあ……………」

うわあ……………りんのやつ完全に出て上がってるな。呂律も回ってないし、涼風さんに絡

んでるし……。涼風さんが可哀想だ。

言われるがままに、涼風さんがりんのグラスにビールを注ぐ。

「えっと、こんな感じがいいのかな？」

当然、ビールなんて注いだことのない涼風さんは戸惑うばかりだ。ほんと、うちの同期が申し訳ない。

「……………」

りんは注がれたビールのグラスを見て、ため息交じりに首をふった。

「す、すいませんー！」

「びーるのただしいつぎかたつてのはねー、こうするのよー。こうちゃん!!」

名指しされたコウは、慣れた手つきでビールを注いでいく。すると、CMでよく見る様なグラスの感じになった。

「これがべすとなのー！」

「おお……………」

グラスを見た涼風さんが感動している。

「いや、そこ感動するとこ違うから……………」

ナイスツツコミだはじめ。もつと言つてやれ。

その後、飲み過ぎて突っ伏してしまったりんはそのまま寝かせておき、俺たちは再び

談笑を始める。

「ところでひふみ先輩」

「……………どう、したの？」

涼風さんがひふみに話をふる。ちなみにこの少し前に、涼風さんはひふみのお酒を注文したりしていた。

実をいうと、頼まれたのは俺なのだが、面白そうだったので涼風さんに頼んでみたというわけである。

ひふみが顔を真っ赤にして焦る姿だったり、お酒の名前を言い間違えたりした涼風さんが可愛かった。

「どうして興柊さんとは積極的に話すんですか？」

「っ!？」

そして話は先ほどに戻るといっわけである。渦中のひふみさんは、涼風さんの質問に顔を真っ赤にしていた。

「そ、そそ……………そんな風に……………見えた？」

「はい！ 今日も興柊さんと楽し気に話していましたし。それと、興柊さんには自然な笑顔を見せるんだなあ」と

「っ!!」

追撃を受け、ひふみの顔がさらに赤く染まる。傍から見ると完全にいじられてるよな、ひふみ。涼風さんに悪気は全くないと思うんだけど。

やっぱり、涼風さんは天性のSなのだろう。

「まあ、ひふみにとって俺は元上司だしな。他の人より喋りやすいんだろう」

このままだとひふみが、無意識的に羞恥プレイを受けると悟った俺は助け舟を出す。

「あっ！ そうだったんですね」

納得といった表情で頷く涼風さん。

「そうだったんだよ。上司でいた期間もそれなりに長かったしな。話す機会は他の人より格段に多かったんだよ。だよな、ひふみ？」

確認をとるためにひふみに視線を向けると、なぜか彼女はむすつとした様子で口をとがらせていた。

「ひふみ？ どうかしたのか？」

「……なんでも、ないよ」

プイッと拗ねたようにそっぽを向くひふみ。そんな表情も天使……じゃなくて、どう

してひふみは怒っているのだろうか？

「ひふみ先輩、どうかしたんでしょうか？」

「さあ……」

涼風さんと共に首を傾げるも、結局答えは出てこなかった。

「タケル君の鈍感」

☆ ★ ☆

「それでは……二次会来る人！」

コウが大きめの声を出して参加を募る。

「私はゆんを送って帰りますー」

しかし、はじめは酔っぱらってふらふらとユンを送るといつて参加せず、ひふみはいつの間にかいなくなっていた。

(俺も今日は疲れたし、帰ろうかな)

流れに乗って俺もさりげなく帰ろうとしたのだが、

「私はいけます……」

とつくに限界を突破したと思われるりんが手を上げる。おいおい、大丈夫なのかよ……。

「よしつ、じゃあ4人でいこう!」

無理やりな感じで二次会参加が決定した。そのまま歩いていき、近くにあったバーへと入店する。

「マスター、なんかウイスキー。青葉は?」

「え、えつと……あつ、私はこのオレンジブロッサムで!」

「青葉、それお酒だよ?」

「えっ!?!」

お酒、飲んだことないもんね。間違えてもしようがないよね。

仕方がないので、俺がオレンジブロッサムを注文し、涼風さんはオレンジジュースに落ち着いた。個人的には、バーにオレンジジュースがあることに驚いたんだけど……。

その後はお酒を飲みつつ、少しだけ話をしてすぐに解散となった。しかし、問題は解散後であって、

「そーいえば、りととタケルの家って近いんだっけ? りんってば、ふらふらだから送っ

ていってあげてよ！」

「えっ……」

「じゃあ、よろしくね〜」

文句を言う暇もなかった。コウが手を振りながら帰っていく。

「興梠さん、大丈夫ですか？」

「……ああ、俺のことは気にしなくていいから、涼風さんも帰っちゃって大丈夫だよ。それに、早く帰らないと親御さんも心配するだろう？」

ほんとなら手伝ってほしいけど、高卒一年目の涼風さんを遅い時間まで連れまわすのも申し訳ない。

そもそもコウにしても涼風さんにしても、手伝わせると必然的に家が隣同士だということがばれてしまう。だから、りんを送るのは俺しかいないというわけだ。

「それじゃあ興梠さん、お疲れ様です」

「お疲れ。気を付けて帰れよ」

涼風さんを見送った後、どうしたもんかと腕を組む。こんなべろべろのりんを電車に乗せるわけにはいかないしな。

仕方がないので、適当にタクシーを捕まえ俺は何とかしてりんと乗り込む。幸い、ここから俺たちのマンションまで距離はないので助かった。

タクシーの運転手に道を教え、ふうと息を吐く。

「……………こうひゃん」

「……………寝言までコウの名前を呼ぶのかよ」

悔しいけど、幸せそうに眠るりんの顔は可愛かった。そして無事マンションにタクシーが到着したのだが、

「どうやって運ぼう?」

りんは完全に眠ってしまい、起きる気配がない。

「はあ、仕方がないな」

優しい運転手に手伝ってもらい、りんを自分の背中にのせる。そのまま運転手に頭を下げ、俺はマンションのエレベーターへ。

背負ってみて分かったことなのだが、彼女は驚くほど軽い。しかも、いい匂いがする。あと、おっぱいがやわらかい。

ドキドキするなど言い聞かせていると、ようやくりんの部屋の前に到着した。一度彼女を背中からおろし、申し訳ないと思いつつ彼女の鞆を漁る。

「鍵はどこだ……………あつ、あつたあつた」

鞆の中に入れていてくれてよかった。これがスカートのポケットとかだったら、もつと四苦八苦していたところだろう。

「やして……」

鍵は開けた。しかし、降ろしてしまったのもう一度背負いにくい。こうなれば、方法はもう一つしかないだろう。

「よつとー」

俺は寝ている彼女を横抱きにする。一瞬躊躇したものの、すぐに下ろして帰ればいと自分を納得させ、部屋の中へと足を踏み入れた。

「……綺麗な部屋だな」

部屋はりんの性格を表したかのように整理整頓され、趣味のよい家具などが置かれている。ゲームとか漫画が散乱している俺の部屋とは大違いだ。

なんてことを考えつつ、俺はりんをベッドの上におろす。これで無事、任務完了だ。俺はテーブルの上に簡単なメモを残すと、彼女の部屋を後にする。

そして、自分の部屋に戻ると、勢いよくベッドにダイブした。

「つ、疲れた……」

酔っぱらいの相手がまさかこんなに疲れるだなんて……。

「酒は飲んでも飲まれるな、か」

この言葉がいろんな意味で身に染みる一日だった。

☆★☆☆

次の日。

「えっ、なにこれ？」

休日の良いことに昼まで寝ていたのだが、インターホンによって起こされ、玄関の前にいたお客に驚いていた。

「だから、昨日のタクシー代。それと、散々助けられたみたいだからそのお礼！」

若干怒りつつ、りんがタクシー代とケーキが入っている箱らしきものを押し付けてきている。

「どうやら、ケーキ屋まで行って買ってきたものらしい。」

「いや、タクシー代は貰うけど、こっちの箱は別に——」

「いいから受け取って！」

強引に押し切られ、俺は仕方なく箱を受け取る。

「それじゃあ、これで借りはチャラだから！」

そう言っつて自分の部屋へ……帰る前に一度、俺の方に振り返る。

「き、昨日は、その……ありがとう」

少しだけ顔を赤くした彼女はそれだけ俺に伝え、今度こそ自分の部屋へ戻っていった。

しばらくの間、りんのいた場所を呆然と見つめていたのだが、

「いつも、あれくらい素直ならいいのに」

思わずそう呟いてしまった。

転ぶのは恥ずかしいし、キヤラを間違えるのはもつと恥ずかしい

涼風さんの新人歓迎会があったり、酔っぱらったり人を何とかして連れて帰ったり、そのりんが少しだけ素直になったりしてから休日を挟んで月曜日。

「……………」

スマホで時刻を確認すると、午前9時。この時刻が何を意味するのか。

「やべえ……………寝坊した」

いつもより一時間も遅い。準備とか色々含めると、ギリギリ間に合うか間に合わないくらいの時間になる。

「と、取り敢えず準備をして……………」

畜生、こんなことになるくらいなら好きなアニメのBD（SAO）を徹夜で見直すんじゃないかったぜ……………。急いで身支度を整え、家を飛び出した。

駅に到着し、改札をくぐる。ベストタイミングでやってきた電車に乗り込んだ俺は、そこでようやく一息ついた。

しかし、まだまだ油断できない。電車というのは遅れるものだ。人身事故の影響で何

度遅刻しかけたことか……。だが、今回の不安は杞憂に終わったらしい。遅れることもなく、スムーズに乗り換えを済ませる。

すると、乗り換えた先の車両で見知った影を二人ほど見つけた。

「ゆんに、涼風さんじゃないか」

「あつ、タケルさん。おはようございます」

「興侶さん、おはようございます」

俺の後輩であるゆんと涼風さんが頭を下げてくる。

「二人ともどうしたんだ、こんな時間に？」

「い、いやあく、ちよつと寝坊しちやつて……」

「うちもです……」

どうやら彼女たちも俺と同じ理由で遅刻しているらしい。よかった、仲間がいた。

……いや、仲間がいても遅刻は遅刻なんだけど。

「ところでタケルさんも遅刻ですか？ 普段、こんな時間に出社しませんよね？」

「お、お恥ずかしながら俺も遅刻だよ。昨日、アニメのBDを徹夜で見ちやつて」

「相変わらず、タケルさんのアニメ好きは酷いですね……」

呆れるゆんに俺は頭をかく。酷いとは何だ、酷いとは。アニメが好きで何が悪い！

アニメは日本が海外に誇る文化の一つなんだぞ！ クールジャパンなんだぞ！

「興梠さんって、アニメ好きなんですか？」

「アニメどころか、ゲームも漫画も好きだぞ。グッズはあんまり買わないんだけどな」
「グッズをかうお金がないからちやいますか？」

「……………」

ゆんにツツコまれた俺はぐうの音もでない。

本当ならグッズも欲しいんだけど、いかんせんお金が絶望的に足りないのだ。アイマスとか、ラブライブとかのソシャゲに課金しちゃうし。

「あ、あはは……………あつ！ もう直ぐ降りる駅ですよ！」

涼風さんの言葉に俺たちは我に返る。確かに、次の駅は俺たちの降りる駅となっていた。

「よしっ！ 二人とも、まだギリギリ間に合うかもだから全力で走るぞ」

走ると意気込む俺だったが、どうにも二人の表情が暗い。

「どうかしたのか？」

「す、すいません。私、運動神経が悪くて……………」

「仲間や！ うちもごっつい遅くて、いつもビリやねん」

ゆんも運動神経が悪いらしく、涼風さんの手を掴んで喜んでいる。確かに、ゆんも涼風さんも運動神経よさそうに見えないからな。

「ところで、興柊さんは運動神経いいんですか？」

涼風さんの疑問に俺は胸を張る。

「俺は50メートル9秒台で走れるぞ」

「へえ、50メートル9秒台……あれっ？」

「タケルさん、それってめちゃくちゃ遅いんとちゃいますか？」

「自慢じゃないけど、俺も運動神経めっちゃ悪いぞ」

高校時代の友人曰く、俺の走り方は抜群におかしいらしい。おかげで何度、クラスメイトに走っている姿を笑われたことか……。自覚はないのだが、タイムがタイムなので認めるしかないのである。

「興柊さんも運動神経悪いと聞いて、なんだか安心しました。……あつ！ 着きますよ」
涼風さんの言葉に俺とゆんは改めて身構える。

『○○駅、○○駅』

「つきました。行きましょう！」

扉が開くと共に走り出した俺たち。人ごみをかき分け、階段を駆け下り、改札口を――

ブーーーーー!!

「おわっ!？」

改札に行く手を阻まれ、俺の身体はつんのめる。どうやらお金が足りなかったらしい。

「やべつ、チャージしてなかった」

「興侶さん!?!」「もうっつ！なにをしとるんですか！」

別の改札口から出ていた二人に頭を下げる。

「わりい。チャージし直してくるから、二人は先に言つてて」

怪訝そうな視線を向ける後ろの人にぺこぺこと頭を下げつつ、券売機でチャージを済ませる。どうでもいいけど、スイカの中に13円しか入ってなかったぞ……。

そんなこんなでもう一度改札をくぐり直し、俺は先に行く二人を追いかける。

（おつ、意外と離れてなかったみたいだな）

視線の先には女の子走りの二人。するとゆんが振り返り、涼風さんに向かって何かを叫ぶと、手を差し出した。その手に向かって涼風さんも手を伸ばし――。

ピターン!!

涼風さんが盛大にズッコケた。しかも、頭からヘッドスライディングするみたいに。い、今のは絶対に痛かっただろうな……。

そこで俺は涼風さんに注目しすぎてしまったらしい。彼女が転んだ拍子に鞆の中身が飛び出し、ペンらしきものが走る俺の進行方向へ。

涼風さんに気を取られていた俺は、当然避けられるはずもなく、ペンを踏んずけて足を滑らせる。

「おわっ!？」

運動神経の悪い俺が耐えられるはずもない。結局、涼風さん並みのヘッドスライディングをかましてズッコケたのだった。

25歳にもなって、人前で転ぶのはキツイっす。

☆ ★ ☆

『おはようございませす』

そのまま遅刻した俺たちは、同じく遅刻していたひふみを巻き込んでイーグルジャンプへと出社していた。しかし、遅刻という事実はどうすることもできない。というか、鼻めつちや痛い。

「おいおい、遅刻だつてのに随分のんびりしてるね。自覚はあるの?」

一方、目の前にいるコウは珍しく怒っている。

「す、すいません……」

「特に青葉。それにタケル！」

名指しされ、俺と涼風さんはピクツと肩を震わせた。まあ、俺は当然なだけで……。青葉はまだ入社して一か月も経ってないのに。何時までも学生気分じゃ困るよ。タケルもこの年で遅刻って、上司としての自覚はあるの！」

『ごめんなさい……』

二人して頭を下げる。転んだとはいえ、遅刻は遅刻。最近、気持ちに緩みがあったのかもかもしれない。反省しないと。

「コウちゃん……会社の、前まで……は」

「……ん？」

「青葉ちゃんがさつき転んでしもて、鞆の中身が飛び出てもたんですよ。その中身をタケルさんが踏んずけて転んで……」

フォローしてくれるのはありがたい。でも、改めて聞くと当時の状況を聞くと、俺ってほんと恥ずかしいな。

しかし、話を聞いたコウは途端に心配そうな顔になる。

「えっ？　ちよつとこけたって大丈夫なの？」

『へっ？』

「それで二人とも鼻が赤かったのか……それならそうと、早く言つてよ！ 勘違いしちゃつたじゃん！」

戸惑う俺と涼風さん。コウは頬をかきながら、

「青葉は何時も頑張つてるし、学生気分だなんて一度も思つたことないよ。……でも、一応上司だし」

なるほど。慣れないことしてるなと思つたら、上司として怒つていたのか。

「タケルも上司として私より頑張つてると思うし、いつも私を助けてくれるし……」

もごもごこと歯切れが悪い。ただ、これだけは分かる。コウはやっぱいいやつだなと。

「とはいえ、酷い事言つてごめん……」

ここで素直に謝れる辺り、コウも優秀な上司だと思う。上司というのは自分のミスをなかなか認めず、プライドの塊みたいなやつが多いからな。転んだとはいえ、遅刻してごめんなさい。

「今日の所は三人とも遅刻じゃないことにしてあげるけど、三人とも遅刻届は出すように。タケルもだよ」

『は、はい……』

一応俺も返事をする。さて、それじゃあ早いとこ遅刻届を書かないと。

「……で、これはなんなのかな？」

「えっ？ 遅刻届ですけど」

「ウの質問に涼風さんが答える。

「そうじゃないよ！ なんで遅刻理由が青葉もゆんも『寝坊』なの？ これじゃあ帳消しにできないじゃん！」

『あっ……』

「書き直し」

そして今度は視線をひふみと俺へ。

「ひふみちやくん。これはなに……？」

ひふみの遅刻届にはなんか顔文字が書かれていて……これは怒られるわ。

「……朝……ごはんが……おいしくて。……つい」

「んなこと聞いてないよ！ まず書類に顔文字書かないでよ!! 最後にタケル！」

「えっ？ 俺なんか変なところあつた」

「むしろ変なところしかないよ！ 『SAOはやっぱり最高だぜ』って何!! アニメのことなんて聞いてないし、タケルは何年会社にいるのさ!!」

「いや、遅刻したありのままの理由を書いた結果だよ。それにS A Oは最近3期も決まって益々盛り上がる——」

「そんなこと聞いてない!!」

あつ、はい。ごめんなさい。そこでコウは顔を真っ赤にして叫ぶのだった。

「ああもう! 反省して損した!!」

☆ ★ ☆

「それ、青葉ちゃんのモデル?」

「ああ、そうだよ。今モーションつけてるんだ!」

企画の仕事に頭を悩ませ、うんうん唸っていた俺の耳にゆんとはじめの会話が聞こえてきた。

どうやら、はじめが涼風さんのキャラモデルにモーションをつけている最中らしい。

(自分の作ったキャラにモーションがつくと、すごく感動するんだよね)

俺も初めて作ったキャラにモーションが付いた時は、ものすごく嬉しかった。きつと

涼風さんも喜ぶことだろう。

「待機モーシオンなんだけど、どうかな？」

「せやなあ、せつかくかわいキヤラモデルなんやから、もつとキウンとするようなのがええんとちやう？」

「きゅんんん？」

ゆんの指摘に、はじめはさっぱり分からないという声をあげている。まあ、確かにキウンというのは分かるようでわからない。キウンキウンする瞬間なんて人それぞれだからな。

その後、「こないな感じ」との会話をした後、

「へー、これが会話モーシオンなんや。へー、これが歩行もーしよんなんや。へー、これが——」

ゆんの声が少しだけ大きくなり、からかいの色が混ざる。

恐らく、涼風さんが自分のキヤラが気になってチラチラ見ていたのだろう。それに気づいたゆんが彼女をからかうためにわざと大きな声を出して気を惹いた。こんな所だと俺は推測する。案の定、

「意地悪しないで下さい！」

涼風さんが抗議の声をあげていた。どうでもいいけど、意地悪って言い方が可愛い。

こりや、いじりたくもなる。

さて、可愛い涼風さんに癒されたところでもう一度企画の仕事に戻りますか。

「コウちゃん、タブレットペン余ってない？」

「えっ？ 持ってないよ」

「困ったわ。なんだか反応が悪くなっちゃって……」

今度はうしろから声が聞こえてくる。振り返ると、困った顔でタブレットペンをいじるりんの姿が。

「俺のタブレットペン。余ってるから使う？」

「ええ、じゃあそうさせて——」

「はじめと青葉に買いに行かせればいいよ！ うん、それがいい！」

『えっ？』

突然の提案に俺とりんは素っ頓狂な声を上げる。

「い、いや、買いに行かなくても俺のタブレットペンを貸せばいい話で——」

「はじめ、青葉〜」

俺の言葉を無視してコウは二人の元へ。残った俺とりんは顔を見合わせ、珍しく苦笑いを浮かべた。

「分かりやすいわね」「分かりやすいな」

きっと、はじめと青葉を今よりもっと仲良くさせようとしても企んでいるのだろう。なんか、ほっこりする。

「あつ、ついでにタケルもついていってあげてよ！」

「……はい？」

席に戻ってきたコウから二人について行けと命令が下る。なぜ巻き込まれた？

「別に二人だけでも、いいだろ？」

「一応だよ一応。それに、タケルもついていったほうが面白いと思うし」

面白いつて何だよ、面白いつて！ 確かに、この三人つてなかなか接点ないから面白いかもだけど……。こちとらまだ仕事が終わっていないんだ。

しかし反論空しく、俺とはじめと涼風さんでタブレットペンを買いに行くことに。

「おつかいって頻繁にあるんですか？」

「ううん、たまにあるくらいだよ。タケルさんも行った事ありますよね？」

「まあ、俺がまだ入社したての時くらいかな。それでもあんまり経験はないんだけど」

三人で話しながら近くの家電量販店まで歩いていく。ちなみに、はじめと涼風さんが前を歩き、俺はそのすぐ後ろを歩いていた。

「でも次からは青葉ちゃん一人で行かされると思うから、レシートとか捨てないよう
注意ね！」

「は、はい！ 気をつけます」

「おいおい、はじめがちゃんと先輩やってるよ」

「それってどういう意味ですか、タケルさん！」

「プンプン怒るはじめを宥めつつ、俺たちは到着した家電量販店へ。そのまま、タ
ブレットペンが売つてあるフロアまで足を進める。」

「タブレットペンのコーナーって久しぶりに来たけど、今は色々な種類があるんだ
なあ。ちなみに、いつもはネットで買ってます。店員さんと話すの面倒だしね。べべ
べ、別にコミュ障じゃねえし！」

「タブレットペンって、太いのや細いのもあるんですね……。どれがいいんでしょう？」
「……普通のいいんじゃないかな？」

「はじめ、今適当に言っただろ？」

「ぎくつ！ ……じゃ、じゃあタケルさんはどれがいいと思うんですか？」

「……普通のでいいんじゃない？」

「タケルさんだって、違いが分かかっていないじゃないですか！」

結局誰一人タブレットペンの良し悪しが分からなかったため、普通のタブレットペン

を買うということでは落ち着いた。

「……あつ」

そこでレジに向かおうとしていた涼風さんから声上がる。

「どうした？」

「すみません、お財布を会社に忘れてきちゃいました……」

「ドジだなあ〜」

やれやれと言った様子ではじめはポケットを漁り……顔が真っ青になった。

「なんだ？ はじめも財布忘れたのか？」「もしかしてはじめさんですか？」

二人からの追求にはじめはふるふると首を振り、

「いや……、落としちゃったっぼい」

『えっ!?!』

俺と涼風さんの声が被る。いや、だって涼風さんのように忘れてきたのならともかく、落としたとなると結構まずい。俺が同じ立場ならもつと焦っている。

財布の中にカードとか入ってるわけだしな。

「取り敢えず、店内を一度探してみようか」

「ここに来るまで歩いてきたところを逆走するも、はじめの財布はどこにも見当たらない。

「お店の中には落ちてなさそうですね」

「となると、外で落とした可能性もあるな」

「うう……」

財布が見つからず、意気消沈するはじめ。

「……私、サービスカウンターで聞いてくるよ」

「それじゃあ私は財布を取りに戻るついでに、はじめさんの財布を探しながら戻りますね」

「俺はさっきのタブレットペンの会計だけ済ませておくよ」

「ありがとう青葉ちゃん。タケルさんもありがとうございます」

お礼をいってサービスカウンターへ向かうはじめと、会社へ戻る涼風さんを見送った後、俺はタブレットペンの会計を済ませる。

普通とはいえ、割といいものだったらしく高かったのでカードを使いました。

(さて、はじめの所に行くか)

店内図でサービスカウンターの場所を確認する。歩いていくと、用紙に向かってペンを走らせているはじめの姿が目に入った。

しかも、なにやら物々呟いている。あつ、机を思いつきドンツと叩いた。何してんだ、はじめの奴？

「でも青葉ちゃんはしつかりしてるなあ……。それにいい子だし可愛いし。しかもまだ10代……。なんてケシカランなんだ!!」

「21歳のお前が何言ってるんだよ」

「あいたつ!!」

取り敢えず、はじめの頭をチョップする。はじめなんて、まだまだ10代みたいなものだ。25歳の俺が言うのはおこがましいかもしれないけど。

「た、タケルさん」

「財布は届いてたか？」

「いえ、サービスカウンターにも届いていませんでした……」

「後は涼風さんだけが頼りか」

新入社員を頼りにするものかどうかと思うが、仕事じゃないのでいいでしょう。しばらく二人で涼風さんの帰りを待っていると、

「はじめさん、興梠さん!」

俺たちの元に涼風さんが走ってきた。

「青葉ちゃん、どうだった？」

心配そうに尋ねるはじめに、涼風さんはニコニコ顔であるものを取り出した。

「ふふふ、これなーんだ？」

彼女が取り出したのは女物の財布。これはもしかして……。

「青葉ちゃん……」

「ちよっ、はじめさん大げさ」

財布を手に涙を浮かべるはじめ。その反応を見るに、どうやら彼女の財布らしい。無事、見つかったみたいだ。俺もホッと一息つく。

「ところで、どこに落ちてたんだ？」

「会社に戻ったら、はじめさんのデスクの上に置きっぱなしになってたんですよ」なるほど。どうやらはじめのおっちょこちよいが今回の原因らしい。

「全く、今回は会社にあつたからよかつたけど、これからは気を付けるんだぞ？」

「うう……すいません、タケルさん。あと、青葉ちゃんも本当にありがとう。おっちょこちよいな先輩でごめんね」

謝るはじめに、涼風さんは「そんなことないです！」と首をふる。

「私もおっちょこちよいだから安心します。……って、そんな事言ったら怒られちゃいますね」

そう言つてペロツと舌を出す涼風さん。

（可愛いなあ、チクシヨー！）

心の声をはじめと被った気がする。それくらい、今の仕草はあざといけど可愛かつ

た。

「青葉ちゃんはそれでも可愛いし……」

「へ？ は、はじめさんだって可愛いですよ！ 興柊さんも、そう思いますよね？」

だから、なぜ俺に話を振るし。この手の話題は苦手なんだよな。だからといって、涼風さんを無視するわけにもいかない。

「そうだな。はじめは涼風さんの言う通り可愛いよ」

取り敢えず、思ったことを口に出す。別に可愛いのは本当だし、嘘は言っていない。

「そう、ですか？ ……へえ〜」

はじめが煮え切らない返事を返す。なんか顔も赤いけど、どうかしたのかな？

「……興柊さん、今のセリフってどういった意味で？」

「どういった意味？ 意味も何も、ただ思ったことを言っただけなんだど」

「興柊さんって、天然なんですか？」

「涼風さんだけには言われたくないよ」

小声で涼風さんとやり取りしていると、はじめがふうと息を吐き、

「そ、そうかにゃ？」

『えっ？』

とんでもないセリフが飛び出し、思わず固まってしまう俺と涼風さん。

「……………あっ！ わ、わあ、可愛いなあ〜」

いち早く元に戻った涼風さんが苦し紛れに返事をする。とんでもない棒読みだったけど…………。

「いや、やつぱり照れるな〜」

口では照れると言っているが、さほど照れていない様子のはじめさん。これは色々つまずい。

（す、涼風さん！ どうしてあんなこと言っちゃったんだよ!?!）

（だ、だって…………）

（はじめは可愛いけど、ああいう感じの可愛さじゃない。完全にキャラ間違えてるよ）

（それは、確かにそうですねけど…………じゃあ、興枯さんがやんわり言っして下さい。キャラ間違えてますよって。はじめさんの先輩なんですから）

（こういう時ばかり先輩を持ち出すのはずるいと思う。涼風さんこそ、同じ女の子同士、やんわり指摘を…………）

（こういう時ばかり女の子を持ち出さないで下さい!）

結局、どちらも注意できずに会社へと戻ってきてしまった。みんなからの反応が怖い。

「八神さん！ 買ってきましたあ」

「おお、お疲れ〜」

「どうぞ〜！」

「!? あ、ああ。ありがとう」

コウは様子のおかしいはじめに困惑気味だ。

「……………どうしたの?」

「ほへ? 何がですか?」

「ほ、ほへ?」

視線が俺と涼風さんの方に向く。そして彼女は視線だけで訴えてきた。「これは一体何!」と。

『……………』

しかし俺と涼風さんは口を真一文字に結び、首をぶんぶんと横に振る。俺たちは何も知らないと言わんばかりに。そこで別の所からとある声が上がった。

「あははっ! はじめつたら、自分のキャラ間違えてんで」

声の主はもちろんゆん。涼風さんは声を聞いた瞬間ビクツとしていたが、俺は逆に安

心した。これではじめも元に戻るだろう。

「……………」

ゆんの指摘に身体をプルプルと震わせるはじめ。そして、

「…………分かってたよ、チクショー!!」

「は、はじめさーん!!」

泣きながらオフィスを出ていったのだった。

☆ ★ ☆

ちなみにその後。俺は拗ねたはじめの機嫌を直すべく声をかけていた。

「はじめ。さつき可愛いって言ったのは本当なんだ。ゆんの言う通り、キャラを間違えていただけであって、普段のはじめは可愛い。これは本当だ！はじめは可愛いんだよ！」

しかし説得も空しく、はじめは顔から耳から真っ赤にさせ、涙目になってトイレにこもってしまった。はあ、完全に拗ねちまったよ……。

「興梶さん、やっぱりわざとやっていますよね？」

「えっ？ 何が？」

初給料の使い方はみんな違ってみんないい

「青葉ちゃん。はい、これ」

はじめが財布を無くしたり、キヤラを間違えたりしてから一週間後。

後ろでりんが涼風さんに声をかけている。

「なんですかこれ？」

「給料明細よ。あとで中を確認しておいてね」

なるほど。給料明細を渡すために声をかけていたのか。

俺は椅子を回転させて涼風さんの方に向き直る。その時、興奮気味に給料明細を確認するはじめての姿が見えたが取り敢えずスルー。

「涼風さんは入社してから初めての給料だな」

「は、はい！ バイトもしたことないので本当に初めてです」

涼風さんは給料明細を見て、目を輝かせている。涼風さんは高卒だし、初めてなら尚更嬉しいだろうな。

ちなみに俺の高校はバイト禁止だったけど、普通にバイトしてました。良い子のみんなはきちんと校則を守るんだぞ？

まあ、バイト時代とは比べ物にならないくらい給料が入ったので、嬉しかったんだけどね。ただし、税金。お前は許さない。

「でも、振り込みだとやっぱりこういう封筒だけなんですわね」

「ん？」

封筒をしげしげと眺めていた涼風さんの口から出た言葉に、りんが首を傾げる。

「だってお給料と言えば封筒の厚みで多いとか少ないとか、一喜一憂するものかと」

いつの時代の話だよ！ 今どきそんな光景、テレビドラマでも見ないと思う。

「あ、青葉ちゃんって本当に10代？」

心の声を代弁してくれたのか、苦笑いでりんがツツコミを入れる。その後で俺にも給料明細を手渡してきた。

「はい、こっちはタケルのぶん」

「おつ、サンキュー」

別に今すぐ確認する必要はないのだが、気になったので中身を確認する。

……よしよし、若干上がった。これで少しは趣味にまわすお金も増えるだろう。

「で、でも本当に貰っていいんですかね？ まだこれしか作ってないのに……しかも残

業代まで」

画面に映し出されているキャラデザをみて、申し訳なさそうな表情を浮かべる涼風さ

ん。俺はそんな彼女に、問題ないと首をふった。

「いいんだよ最初のうちは。スピードが遅いのは当たり前だし、これからできるようになっていけば問題ないよ」

「タケルも最初のうちは酷かったから、気にしなくて大丈夫よ青葉ちゃん」

「お前の一言は余計だ」

しかし、りんの一言を否定できないから辛い。昔のこととはいえ、最初は迷惑しかか
けていなかったからな。

口には出さないけど、葉月さんには結構救われたし感謝はしている。

りんは結構そつなくこなしていた記憶があるな。コウは例外。高卒の新人で、あそこ
までできるのは本当におかしい。これが才能の違いなのかと嫉妬した時期もあった。
まあ、今ではいい黒歴史（思い出）だ。

「だから青葉ちゃんは、何も気にせずお給料を受け取って」

柔らかな笑みをりんが涼風さんに浮かべる。それにしても、ちゃんと残業代を出す
イーグルジャンプは偉いと思う。払うのが当たり前なだけで、最近は残業代の未払い
だったり、サービス残業が社会問題になっているからな。

某運送会社とか、某広告会社とかでは結構大きな問題になってたし。

「涼風さんの場合は、これからきちんと会社に貢献してもらえれば何も問題ないよ。そ

れに会社に貢献していけば——」

「評価も上がって、お給料も上がるってわけですよ!!」

「人のセリフをとるんじゃないやねえ……」

最後のセリフを、やたらテンションの高いはじめに持っていかれる。言いたかったセリフがとられると結構萎えるよね。

それにしてもこいつのテンションがこれだけ高いってことは、恐らく給料が少し上がったのだろう。

「は、はあ……もしかしてはじめさん、お給料あがったんですか?」

「あつ、分かっちゃった? ちよつとただけだね」

俺の予想は正しかったみたいだ。ニヤニヤと笑みの止まらないはじめ。嬉しそうで何よりです。

「どうせ、デスクのおもちゃに全部消えるんやろ?」

「い、いいだろ別に!!」

同じく給料明細を貰っていたゆんが辛辣なツツコミを入れる。しかし、ゆんが突っ込まなかつたら俺がツツコんでいたと思う。なんせ、彼女の机には所狭しとおもちゃが置かれているからな。家にも相当あるっほいし。

「そ、それにタケルさんだって漫画とかBDとか買ってるから!」

「俺は貯金をしたうえで買ってるんだ。だから何も問題な——」

「少し前、『やばい、今月はピンチだ……。こうなったら食費をもっと切り詰めるしか……。』とか言ってますでした？」

「……あのクールに神アニメが多すぎたのが悪い」

ジト目のはじめから視線を逸らす。ちなみにゆんとりんからは、呆れたような視線を向けられました。

「で、でも、おもちちゃだつて資料になつてるし、八神さんだつてよく持つてくし……。特にこれ！」

はじめがビームサーベルみたいなのを取り出してぶんぶんと振り回す。

「これがあるだけで仕事がかどるんだ」

「ちよ、危ないからぶんぶん振り回すなつて」

「えく、せっかくカッコいいのに……」

ぶつぶつ文句をいながらビームサーベルをしまうはじめ。しかし、何を思ったか今度は別の剣を取り出す。

「ついでに西洋の剣もあります」

「な、なんでもありませんね……」

こいつのデスクには仕事の道具より、おもちやのほうがるかに多いんじや……。

はじめの新人教育を社内のだれがやったか知らないけど、完全に教育の仕方を間違えている気がしてならない。

「青葉ちゃん、これ持ってみない？」

そういつて西洋の剣を涼風さんに手渡す。

「は、はい……って、細いのにすごく重い！」

「でしょ？ 鉄の塊だからね！」

なぜそんなところは無駄にこだわってるんだよ。まあ、そんなところに惹かれないかと言ったら嘘になる。

一方、西洋の剣を持った涼風さんはふらふらと少し危ない様子だ。

「よくこんなの、振り回せるなあ……あつ！」

案の定バランスを崩した涼風さん。その剣が……俺の額へと迫り、

ゴンツ!!

「ぐへっ?!」

「うわあつ! タケルさん!」

避けられるはずもなく、額に西洋の剣が直撃した。額を抑えて蹲る俺に、はじめが急いで駆け寄ってくる。

「うぐお……」

「す、すいません興柎さん!! 大丈夫ですか!？」

あまりの痛みに悶絶する。デミグラスソースは出てないみたいだけど、痛いものは痛い。

畜生、こうなるんだつたらはじめのビームサーベルを借りておけばよかつた……。

「ぷっ……大丈夫タケル?」

「オイコラ。笑いたい気持ちはわからんでもないけど、笑うんじゃねえ」

堪えきれずにふき出したりんに恨みがましい視線を向ける。

しかしりんは顔を真っ赤にして笑いを堪えるばかり。まじで痛いんだぞ。

「まあまあ、取り敢えず額が真っ赤になってるんで、これ貼つといてください」

ゆんが鞆から絆創膏を取り出して俺に差し出して来る。ここですぐに絆創膏を取り出すあたり、ゆんの女子力の高さがうかがえるな。

ありがたく絆創膏を頂戴した俺は、そのまま一番痛いところに張り付けておく。

「だ、大丈夫ですか?」

「これが刃の所だつたら危なかつたけど、幸いなことに平らな部分だつたからな。ただし、俺以外にあつたら大変だから普段は人目につかないところにしまっておいてくれ」

「分かりました!」

「涼風さんも、ぶつけたことは気にしなくていいから」

「あ、ありがとうございます」

もう一度だけ涼風さんが頭を下げる。なんだかんだ、高卒とは思えないくらいしつかりしてるよな。ただし、身長は除く。

そこでりんが再び話を給料のことに戻す。

「話が半分それちゃったけど、お給料の査定は年に一回だから。青葉ちゃんも来年には昇格していればいいわね」

「評価って、いい仕事をしていけば上がるものなんですか？」

「青葉ちゃんだと、まだ与えられた仕事をこなしてくれれば大丈夫よ」

まあ、涼風さんはとてもまじめに仕事をこなしてくれているので、昇格はほぼ間違いないだろう。俺が新人の時にもちやんと上がったのだ。従って、何も心配する必要はない。

その後はどのように評価しているのかであったり、はじめがどうしてキャラ班のブラスにいいのかなどを話して（はじめが落ち込んで若干めんどかった）、初任給は何に使ったのかという話になった。

「青葉ちゃんは初給料、何に使うか決めてる？」

「えっ？ ……ああ、何にしましょう。全然考えてなかった」

給料自体貰うのが初めてだし、ある意味仕方のないことだろう。

「うちは服買ったなあ〜」

ゆんは服を買ったのか。確かに、いつも可愛い服を着てるから納得できる。

「好きなキャラのフィギュアにすれば思い出に残るよ!!」

「うーん……」

はじめもぶれないなあ。だけど今後は計画的にお金を使おうね。しばらく思案顔で

悩む涼風さんだったが、

「やっぱり貯金ですかね」

もの凄く堅実な答えが返ってきた。ほんとこの子、高卒？ 他のみんなも俺と同じよ

うなことを考えているのか、微妙な表情を浮かべている。

どうでもいいけど、はじめは涼風さんを見習いなさい。

「遠山さんはなんに使ったんですか?」

そこで涼風さんがりに話を振る。あつ、これは絶対に長くなるやつや。俺は知って

る……というか自慢されたから知っている。

自慢された日の夜は家に帰ってからも悔しくて眠れなかったものだ。しかし、初給料

をもらった頃はコウと仲良くなかったので今更悔やんでも仕方がない。

「私? わたしは……」

「何々？ みんなでなんの話してるの？」

まさに今から話すというタイミングでコウが会話に混ざってきた。そんな彼女に涼風さんが「今、遠山さんは初給料を何に使ったのかについて話してて……」と説明するすると、

「あつ、私も気になる。何に使ったの？」

事情を知っている者からすれば、信じられないといった発言がコウの口から飛び出した。

案の定りんは「えっ……」と表情を固まらせる。

「覚えてないの!? 信じられない!!」

「へっ?」

間拔けな声を上げるコウ。今回ばかりは流石にりんが可哀想だ。

それにしても、怒り方が完全に彼氏を叱る彼女である。

「なあ、コウ。お前、本当に覚えてないのか？」

「ええ……なんかあつたっけ？」

一応助け舟を出したのだが見事に不発。どうやら本当に覚えていないらしい。こりゃ、もうどうしようもないや。

「……………っ!」

プルプルと震えながらりんが怒っていますという視線を向ける。

「何でそんなに怒ってるの？」

また火に油を注ぐ様な言葉を……。

「一緒に日帰り温泉に行ったでしょ？」

「いたたたた！ そうだった、そうだった！」

怒り心頭といった様子で、りんがコウの頬を横に引つ張っている。しかし、初任給と一緒に日帰り温泉を忘れられていたのだ。無理もない。

俺がりんの立場なら、怒りを通り越して抜け殻になつていただろう。頬を引つ張られていたコウだったが、しばらくしてようやく解放される。

「もう、そんなに怒ることないじゃん。温泉くらいで……」

あのバカ……『くらい』とか言ったら絶対りんが――。

「くらい!! 二人でどこに行こうかも決めたじゃない!!」

何も学習しないコウに、再び噴火する遠山さん。親の顔より……は見たことないけど、それでも結構見慣れた光景だ。

一方コウは、ここまで言われても思い出せないらしい。

「あー、そんな気がする」

そんな気がするって、絶対覚えてないだろ。

「じゃあ、どこに行ったか覚えてる？」

「……………」

りんが涙目でぷくつと頬を膨らませる。悔しいけど可愛い。そんな事はいいとして、間髪を入れない質問にコウが黙りこくる。

はたして、コウは覚えているのか。まあ、答えはほぼ出てるんだけど……。

「…………タケル、あとはよろしくね！」

こんなに無責任なよろしくを俺は知らない。

「コウちゃん!!」

りんが声を上げるもコウはあつという間にどこかへ行つてしまい、「はあ…」とため息をついていた。

「遠山さんと八神さんって仲がいいんですね」

「入社も一緒にいたいやしね。青葉ちゃんは同期おらへんからちよつと寂しいな」

「そうですね…………ところでひふみ先輩は同期っているんですか？」

涼風さんが我関せずといった感じで仕事を進めていたひふみに話を振る。そういえばひふみの同期の話って、あんまり聞いたことなかったな。

話を振られたひふみは仕事の手を止めこちらに向きなおる。

「…………違うチームにいる」

「へー、離れ離れでなんだか寂しいですね」

「……別に……喋らないし」

『……………』

悲しいなあ……。ひふみらしいっちゃ、ひふみらしいんだけども。

「あ、あはは……。あれっ？ 入社って言えば、興梠さんは遠山さんと八神さんと一緒なんですよ？」

「俺は二人と同期だよ。だけど最初のうちはあんまり仲良くなくてな。話し始めたのも結構遅かったんだよ」

当時の事を思い出しながら口を開く。俺の方にも原因はあったのだが、コウもコウでかなり人見知りするタイプだったからな。

「へえ、なんか意外ですね。最初から仲がいいものだと思ってましたよ」

「今の俺たちを見たらそう思うのも無理ないかもな。まっ、とにかく色々あったんだよ」
少しだけ強引に話を切り上げた俺は、未だにご立腹の様子であるりんの肩をトントンと叩く。

「まあ、そう落ち込むなって。コウの性格はあんな感じだって、りんもよく知ってるだろ？」

「それはそうだけど……。私を励ますのならまず、その勝ち誇ったような顔を止めなさい」

「おっと、これは失敬」

キツと睨まれ俺は顔を手で覆う。どうやら気持ちを隠しきれなかったらしい。まあ、俺も昔自慢されたわけだし、これでおあいこだ。

「ちなみにひふみんは初給料、何に使ったの？」

いつの間にか戻ってきたコウがひふみに初給料の使い道を尋ねる。

りんがあれだけ怒ってたのに、よく戻ってこれたな。ある意味コウの鈍感さには感心する。

「……コ……プレ」

「へっ?」

「……コスプレ、……衣装に」

「ええっ!? 嘘ッ!? 写真ないの?」

「……ひみつ」

コウや他のみんなも驚いていたが、実をいうと俺はひふみがコスプレをするということを知っていた。

イベントに誘われてついていくこともしばしばだからな。ま、まあ、俺もコスプレするって約束付きだけど……。ひふみは可愛いからいいけど、俺がコスプレする理由はマジで分からない。

「うーん、残念だなあ。あつ、ついでにタケルは初任給、何に使ったの？」

「ついでって言うな、ついでって！」

「俺？俺は普通に家族でご飯を食べに行っただけだよ」

「ええ、普通だよ」

「つまらないという表情を浮かべるコウ。普通に悪かったな。」

「実家暮らしの妹にせがまれたんだよ。どうしても行きたいって」

「興梠さんの妹さんは今おいくつ何ですか？」

「大学2年生だから、今年二十歳になるよ。涼風さんよりも一個だけ年上」

「仲はいいんですか？」

「はじめからの質問に俺は少しだけ考える。」

「いや、別に普通だと思っただけ。たまに、一人暮らしの家に泊まりで来るぐらいだし。」

「掃除とか洗濯とかしてくれるから助かるんだよ」

「えっ……」

「なぜか女性陣（コウを除く）の表情が固まる。えっ？俺、おかしなこと言った？」

「わ、私、一人っ子なので分からないんですけど、世間一般的には妹が兄の一人暮らしの部屋に泊まることってあるんでしょうか？」

「そ、そりや、たまにはあるかもしれないけど……普通は泊まるだけで掃除や洗濯なんてしないんとちゃう？」

「……ま、前に……、タケル君が言ってたんだけど、……別に実家とタケル君が住んでいるマンション、近いわけじゃないみたい……」

「タケルさんの妹ってまさかブラコン？」

「それは考えたくないわね。一回だけあった……写真を見たんだけど、タケルの妹とは思えないほど美人で可愛かったわよ」

なんか女性陣でひそひそ話し合ってるみたいだけど、内容までは聞こえてこない。

「掃除も洗濯もしてくれるって、いい妹さんだね」

「だろ？　ほんと、俺には勿体ないくらいだよ」

「どうして二人は妹さんについて、疑問を感じないのよ……」

頭を抱えるりに、俺とコウはお互いに顔を見合わせ首を傾げる。だって、別に変なところは一つもなかったし。

「ま、まあ、取り敢えず世間話はこれくらいにしておいて、そろそろ仕事に戻りましょう。青葉ちゃんも初給料は貯金でもいいけど、何か思い出に残ることをするでもいいと思うわ。……忘れちゃう人もいるようだけど？」

「ひゅー、ひゅー……」

りんからの厳しい視線を、コウはへつたくそな口笛でやり過ごしている。あれで誤魔化せていると思っているのだろうか？

「はあ、そうですね。何か考えてみます」

恐らくだけど、涼風さんが何をしてても両親は喜ぶと思うけどな。特に父親なんて泣いて喜ぶだろう。

そんな感じで話は打ち切りとなり、俺たちは仕事へと戻っていくのだった。

ちなみに会社が終わった後、コウが今日のお詫びとばかりにりんを岩盤浴に連れて行ったらしい。

ところが岩盤浴でコウが、「最近太った？」などと二の腕をぶにぶにさせながら言ったらしく……。

『ほんと、コウちゃんって鈍感よね!!』

「……なあ、切つていい？」

なぜか俺に文句をぶちまけてきたため、貴重な睡眠時間を削られました。

会社でパンツ姿になるのは間違っている

「他のキャラより身長高すぎるからちよい低くして」

「あつ、確かに……」

コウからの指示に涼風さんが頷いている。しかし、初めてキャラを作り上げた頃に比べたらだいぶ早くなった。ほんと、近所の子供とゴーヤ並みに成長のスピードが速い。

「まあ、今日は夜も遅いし続きは明日だね」

「そうですね。すいません」

「いやいや、謝ることはないよ。涼風さんは十分頑張ってくれてるし。それに、この時期から残業ばかりしているとコウにみたいになるぞ？」

「ちよつと、それってどういう意味？」

ぶくつと頬を膨らませるコウ。どういふも何もそのまんまの意味です。涼風さんに

は、一週間で何日も会社で泊まるような社畜になってほしくないからな。

まあ、コウの場合は好きで泊まってるみたいだからいいんだけど。

「ただど青葉ちゃんも、タケルの言う通り本当によく頑張ってるし、仕事も早くなってるわ」

「そうですかね？ えへへ……」

褒められたのが嬉しかったらしく、涼風さんの表情が綻んだ。年相応の笑顔は俺の心をほっこりさせる。

「それじゃあ、私はお先に帰りますね。お疲れ様です」

「お疲れ〜」

「お疲れ様。私もそろそろ帰るわ。二人はどうするの？」

「俺はもう少しだけやって帰ることにするよ」

「私は泊まり！」

「コウさんや。元氣よく宣言するのはいいけど、たまにはおうちに帰ってください。借りた部屋が泣いてるぞ。」

「そう。じゃあ私はお先に失礼するわね。……くれぐれも変なことをしないように？」

「するわけないだろ……ここは一応会社なんだから」

りに牽制された俺は思わずため息をつく。それに、コウの方にその気がないんだか

ら、変なことのようにない。……自分で言つて悲しくなってきた。

そんなわけが帰社。社内に残ったのは俺とコウだけになった。

「さあーで、残った仕事に取り組みますか」

次回作の大枠自体は通ったのだが、細かいところで葉月さんにリテイクをくらいまくっている。时期的に、そろそろ細かい部分をまとめていかないとまずいので結構焦っていた。

しかし、仕事に取り組もうとしたタイミングでコウがなにやらごそごそとし始める。まさか……とは思いつつ後ろに振り返ると、

「……なんでスカートを脱いでるんだ？」

「あつ……つい、いつもの癖で」

あはは、とコウが頭をかく。見慣れた光景とはいえ、ドキツとするのでやめてほしい。というか、一人の時はいつもスカート履いてないのかよ。

「取り敢えず、スカートを履け」

「ええ、いいじゃん別に。タケルしかないわけなんだから」

「俺しかないのが問題なんだよ」

逆に、俺以外だったら襲われてた可能性もあるからな。まあ、俺も必死に理性で煩惱を抑え込んでるんだけど……。

ほんと、無防備すぎるのも問題である。我慢するこっちの身にもなってほしい。

「スツキリするんだけどなく。タケルもやってみたらわかると思うんだけど」

男女がパンツ姿って、傍から見たらかなりまずい光景だろう。そもそも、パンツ姿で仕事をする男って無茶苦茶気持ち悪い。コウは女だからいいかもしれないけど……いや、よくないか。

「断固として拒否します」

「つれないなあ〜」

コウが不満を露わに口を尖らせる。そんな可愛い表情をしても、絶対にズボンは脱ぎません！

なんて俺が呆れていると、

「二人は一体何をしているのかしら？」

「えっ?」

帰社したはずのりんが戻ってきていた。いや戻ってきただけなら全然いいんだけど、視線が絶対零度である。

恐らく、パンイチの姿で俺と話すコウを見て、色々と勘違いをしているのだろう。

「りん! 何でいるの!?!」

「終電が行っちゃったの。ところでタケル。私言ったわよね? 変なことをしないよ

うにっつて」

相変わらずりんが鋭い視線を向けてくる。これは早いとこ疑惑を解かないとえらいことになりそうだ。

「お前が思ってることは何もしてないよ。いつも通り、コウが勝手にスカートを脱ぎ始めただけだ」

「タケル、その言い方はなかなか酷くない？」

「事実だからしようがないだろ？」

「まあ、確かにそれなら仕方ないわね。そもそも、タケルに変なことをする度胸があったら今頃、もうやることやってるだろうし」

「悪かったな、度胸がないへタレで」

地味にグサツとくる言葉を言われたものの、納得してくれたらしく絶対零度の視線を引っ込めてくれた。

良いのか悪いのか分からないけど、取り敢えず良かったです。

「そういうえば終電が終わってるって言ったけど？」

「タケルも帰る方向が同じだから、今日は会社に泊まりね」

なんてこった。今日は家に帰ってお気入りのアニメを見ようかなと考えてたのに……。

まあ、終電が無くなってしまったのはどうしようもないので、今日は素直に泊まることにしよう。

「なんかこの三人が残るって久しぶりだね」

「確かにそうなんだけど……コウちゃん。まずはスカートを履きなさい。私とかタケルだからよかつたけど、気をつけなきゃだめよ」

「うーん、本当にすつきりするんだけどな。あつ、そうだ！ 私とタケル以外誰もいないんだし、りんも脱いだら——」

「するわけないじゃない!! コウちゃんでも恥ずかしいのに、タケルまでいるのよ!」
顔を真っ赤にしてりんが声を荒らげる。コウはあつけらかなとしてるけど、世間一般的に見ればりんの反応が普通です。

その後、りんの圧力によってコウはスカートを履かされた。

「泊ってばかりで肩こってるんじゃないの?」

「これでも二日に一回は帰ってるって!」

「毎日帰って休まないとだめでしょ?」

「いたいいたい!」

目の前でりとコウがイチャイチャしている。肩を揉んでるだけなんだけどな。

しかし、それだけでも二人の空間を作り出してしまふあたり、仲がいいということな

のだろう。ちなみに蚊帳の外にいる俺はものすごく寂しい。

「会社に寝泊まりして、疲れが取れるのか？」

寂しさに耐え切れず俺はコウに尋ねる。

「ん、最初のうちはなれなかつたけど、最近はやんと休めるようになってるよ！ 慣れちゃえば何も問題なし！」

慣れちゃえばって……泊まるのに慣れたくはないな。俺は自分のベッドじゃないと寝つきが悪くなるタイプだから余計に。

「それなら、今度からは家に帰って休むことに慣れてもらわないとね？」

「だから痛いって！」

「また、イチヤイチヤしてるよあの二人。たまらなく疎外感とジエラシーを感じるからやめてほしいものだ。」

「でもこうして泊まってる、なんかマスター前みたいだな」

「ははは、言ってる。もう直ぐ夜も賑やかになるんだろうな！」

「おいおい、笑い事じゃないぞ。マスター前なんてほんと、地獄以外の何物でもない。プログラマーの班なんて、この世の終わりみたいな雰囲気でバグやらなんやらを探していた。」

うみ子さんだけ平気そうにパソコンをいじってたけど。あの人も大概化け物だよな

。

「そうならないようにするのが、私たちの仕事だからね」

苦笑いでりんが答える。

しかし、ADとしてのりんは非常に優秀だ。実際のところも予定通り来てるし、残りのキャラ数と残りの日数を間違えていない限り大丈夫だろう。

「だけど、ゲームしつかり売れるかな？」

「どうだろうね。私は自分が納得できればそれでいいし」

コウらしい答え。そんな彼女に、りんが少しだけ弱々しく笑う。

「強いなあ、コウちゃんは」

「初めてのADで胃が痛いって？」

「うん、ちょっと……やっぱりADはコウちゃんってよく思うよ。ゲームの顔はコウちゃんだし」

珍しく弱音のような言葉をこぼす。りんがそんな事を思っていたなんて、少し意外だ。すると、コウはくるつとりんの方へと振り返る。

「……言つとくけど、りんが仕切ってくれてるから私は作業に専念できるんだからね。それに背景だってゲームの顔だし、何より私の性格じゃみんなついてこないと思うし」

……」

恐らくコウのセリフを聞いた時、三人の脳裏には同じ光景が浮かんでいただろう。

しかし、そんな記憶を吹き飛ばすようにコウが「うがあ!!」と頭をかく。

「つて、何で弱音みたいなのをはいてるんだ私!!」

「ふふつ、こんな所みんなには見せられないわね」

クスクスと笑うりんにはすっかりいつもの雰囲気に戻っていた。

「まあ、確実に売れる保証なんてどこにもないけど、いいゲームにはなってるんじゃないか? なんせ、俺がストーリー製作に携わってるわけだし」

「あらっ? 締め切り直前までひいひい言いながら残業していたのは誰だったかしら?」

「さ、さあ、誰だったかな」

前に言ったかみだけど、あの時は本当に地獄だったぜ。いい年して会社で号泣しそうになったのはよく覚えている。

「とにかく真面目な話、新人の青葉がさ楽しそうな顔をしているうちは大丈夫だよ」

「それもそうだな。辛そうな顔してゲーム作ってたら、万人を楽しませるようなゲームなんて絶対に作れないし」

「タケルの言う通りね。青葉ちゃんはいい子でよかったわ」

「だけど、キャラデザがやりたいんだったもつとガツガツしてほしいよね。私だったら好きな設定のキャラ見つけて、ダメもとても書かせてって言いに行くのに」

「厳しいなあ」

俺もりんと同じ感情をコウに抱く。しかし、これくらいやる気と根性があったからこそ、今の八神コウがいるのだろう。じゃないと、高卒新人でキャラデザなんて任せられない。

葉月さんは、コウのそういつた部分をきちんと見抜いていたのだと思う。

「涼風さんに村人以外のキャラデザを任せたりしないのか？」

「そうだなあ。今の村人が終わった任せてもいいかな……つて、あつ!!」

そこでコウが、大きめの声を上げパソコンを見つめる。

「どうしたの？」

「PCがフリーズしてる。仕事再開しようとしたらこれって」

「なんだ、パソコンがフリーズしただけかよ」

「何だじゃないよ!! もうヤダ」

まあ、パソコンがフリーズすると萎える気持ちはよく分かる。

これで保存できてなかったりすると、ほんと仕事を投げ出したくなる。……以前、一

回だけリリースして企画の内容が吹っ飛んだ時は、しばらく机の上で頭を抱えていた。「寝るの?」

「ううん、このままキャラデザやる!」

そういつてコウはタブレットペンを手に仕事に戻る。

「それじゃあ俺も企画の仕事に戻ろうかな。あんまり時間もないわけだし」

俺もコウに倣って、起動させたままだったパソコンへと向きなおった。よしよし、俺のパソコンはリリースしてないみたいで安心したよ。

「もう……コウちゃん、無理しないでね。私は寝かせてもらおうわ。一応、タケルも無理はしないように」

「へいへい」

片手だけあげて俺は答える。一応とはいえ、心配してくれたのは素直に嬉しかった。本人とはライバル関係なので絶対に言わないけどね。

その後は、切りのいいところまで仕事を進めることにした。そして、時計の短針が1を指したところで俺は大きく伸びをする。

「うーん、取り敢えずここまでにしておこうかな」

パソコンの電源を落とし、コウのデスクに視線を移す。

「コウ、頑張るのはいいいけどもう一時だし、今日はもう終わりにしといたらどうだ?」

「えっ？ もう一時!？」

驚いたような声を上げるコウ。どうやら、キャラデザに夢中で気が付かなかったらしい。ちなみに、りんは自分のデスクの下で熟睡中。

「全く、俺が声をかけなかったらいつまでもキャラデザやってただろ?」

「あはは、確かに」

パソコンの電源を落としつつ、コウが苦笑いを浮かべる。しかしその苦笑いをすぐに引つ込めると、少しだけ陰のある表情になった。

「ねえタケル。……私さ、ちゃんとリーダーできてるかな?」

「……大丈夫だ。俺が見ている限り、ひふみやゆん、それにはじめ。涼風さんだってお前を慕ってる。お前だからついてきてる。だから、何も心配する必要はないよ」

「タケルも?」

「もちろん」

俺はポンツとコウの頭を撫でる。心配そうな顔をしていたコウの表情がようやく元に戻った。

「ごめん、タケル。私ってば眠くてちよっとナイーブになってたのかも」

「確かにそうかもな。だから今日は大人しく寝とけ。俺は会議室で寝るから」
「別にこの部屋で寝てもいいんだよ？」

「それはりんが怒られそうだから遠慮しておきます」

そういうと、俺は寝袋を持って会議室へ足を運ぶ。鍵を閉め寝袋にくるまると、すぐに眠気が襲ってきた。

(コウはまだあの時の事を気にしてるのかな……)

あの時というのはフェアリーズストーリー2でコウがADをしていた時のこと。

(やっぱり本人にとっては悪い意味で忘れられないんだろう。だから俺やりんがコウを支えて……)

そこで俺の意識は過去の記憶と共にまどろみの中におちていった。

☆ ★ ☆

さて、次の日の朝の話はしたくないのだが一応しておこう。

「ふわあ……」

俺は寝袋を片手に、大あくびをしながら会議室を出る。すると、既に出社して来ていた涼風さんと鉢合わせた。

「あれっ?」

「あつ、興梠さん! おはようございます」

「おはよう。今日は随分早いな」

「いえ、昨日途中で終わっちゃったキャラデザを完成させようと思って」

「なるほど。本当にまじめだよ涼風さんは」

なんて話しながらオフィスの中へ。涼風さんは席に着くと気合を入れるように両手を握り締める。

「今日も一日頑張るぞい!」

「頑張るぞいって……」

そんな語尾を使う人、俺は某王国の大王様以外知らない。

すると、奥から「ははは、ぞいってな……んーんー!?」という声が聞こえてきた。

「あれっ? 八神さんも泊まってたんですか?」

「昨日はりんも一緒だったな」

様子を見に行くために俺と涼風さんは二人が寝ている場所まで歩いていく

「八神さん、どうしたんです……かあ!」

「っ!？」

変な声をあげた涼風さんに続いて覗き込んだ先には、とんでもない光景が広がっていた。

「……………」

「……………」

りんがコウを襲うようにして上に覆いかぶさっている。しかもお互いズボンは履いておらず、下はパンツ姿。

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「ご、誤解、誤解だから!」

手で顔を覆う涼風さんに、りんが弁明の言葉を口にしてている。パンツ姿で。

しかし、酷いショックを受けた俺の耳には言葉が入ってこないし、今の彼女を気にしている余裕もない。というか、視界が霞んで何も見えない。

そのまま崩れ落ちるようになって膝をついた。

「……………りん」

「た、タケルも今のは誤解……って、どうしてあなたは号泣してるのよ!?」

「コウを……しあわ……幸せにしろよ。……あとつ、結婚式には……よんでくれ」
「だから、違うって言ってるでしょ!!」

その後、俺がまともな精神状態に戻るまでそれなりに時間がかかった。

ひふみと一緒に飲むお酒はやっぱりおいしい

「らっしやいませ。何名様で？」

「えつと、二名なんですけど」

「かしこまりました。こちらのお部屋にどうぞ」

店員さんの指示に従い、俺たちは奥の個室へ。そのままいい感じの個室に案内され、俺と彼女はようやくと一息つく。

「こちらおしぼりとなります。ご注文はいかがいたしましたでしょうか？」

「えつと、俺は取り敢えずピーチサワーで。ひふみは？」

「……わ、私は……日本酒で」

ピーチサワーと日本酒。それと、適当に料理の注文を済ませる。2、3分後に注文したピーチサワーと日本酒が運ばれてきた。そのグラスを手に取ると、

「それじゃあ、今日もお仕事お疲れさま。乾杯」

「か、かんぱい……」

チンツとグラス通しがぶつかり、小気味のいい音を立てる。そのままグラスに注がれたピーチサワーを喉に流し込み、俺は「ああ」と声をあげた。

「やっぱり、仕事終わりの一杯は最高だな」

「そう、だね……」

既にグラスの半分以上を飲み干した俺に、ひふみもにつこりと微笑む。そんなひふみさんは今日もやっぱり可愛い。

さて、そろそろこの状況を説明しなくちゃいけないな。ここは会社近くにある居酒屋。そして、一緒に居るのは後輩の滝本ひふみ。以前から飲みに行く約束をしていたのだが、行くのならマスター前にしようということになったのだ。

更に今日は、みんなが待ち望んだ金曜日の夜。気兼ねなく飲めるのも金曜夜の強みだな。プレミアムフライデー？ 何それ美味しいの？

ちなみにここの居酒屋、お酒も料理もかなりおいしい。しかも、穴場的な場所にあるため人も少ない。それに加えて個室もある。見つけた時は俺、天才なんじゃないかと思つた。

「お待たせしました。塩キャベツと、焼き鳥の盛り合わせです」

いいタイミングで頼んだ料理が運ばれてくる。ここの焼き鳥もまた絶品なんだよな。ちなみに俺は皮が好き。ひふみはねぎま。なんか可愛い。

ところで、俺とひふみがこの店に来るのは今回が初めてではない。彼女が新人の時に来て以降、結構な頻度で俺とひふみは飲みに来ていた。というか、ひふみがこの店を気に入っていた。

他の店を進めても、断固として行こうとはしなかったし……。まあ、人もそんなに多くないし、個室もあるからね。まさに、彼女の為に作られた居酒屋と言っても過言ではないだろう。

「ところで、ひふみは涼風さんと仲良くなれたのか?」

焼き鳥の皮を食べつつ、俺はひふみに尋ねる。気になっていたのだ。ひふみが涼風さんと仲良くなれているのかということ。

たまに話しているのは見るけど、どの程度仲良くなっているのか知らないからな。いずれはひふみもキャラリーダーをやるだろうし、後輩とコミュニケーションを取っておくのはいいことだろう。

「……えつと、私は……少しづつ、って感じ……。かな。あ、青葉ちゃんの……。ほうから、話しかけてくれるから」

「あー、確かにそれは分かるかも。見てる限りだと涼風さん、コミュニケーションの塊みたいな子だ

からな」

最近では俺とも話してくれるようになってるし。最初、警戒心を抱かっていたのが嘘みたいだ。嬉しくて泣きそうです。

そんな涼風さんのだが、俺以外の人にも積極的に話しかけるなど、新人離れた能力を見せていた。入社したばかりのりんできえ、あそこまで積極的じゃなかったぞ。コウは言わずもがなである。

「それにしても、高卒であれだけできるのもすごいよな。あれだけ呑み込みが早くて仕事もできれば、ほんと即戦力だよ」

「村人を作るのも……早くなったから、もう直ぐ……村人以外のキャラデザ任せるって、コウちゃんも……言ってた」

もうキャラデザか。かなりどころか、近年まれに見る速さである。俺の新人時代とは雲泥の差があるな。

まあ、俺の同期には新人でメインキャラデザ任された天才がいるんだけど。

「涼風さんには相当期待してるんだな」

「う、うん……それに、青葉ちゃん。コウちゃんに……憧れて、イーグルジャンプに……入社したんだって」

「あー、確かにそれなら涼風さんのモチベーションも高いだろうな。憧れの人と同じ職

場で働いているわけだし」

月曜日に出社したとき、コウをいじってやろう。涼風さんは八神大先生に憧れて入社したんだよって感じに。

「ところで、ひふみには憧れの先輩っていないのか？」

「わ、わたし……？ 私は……秘密」

教えてくれなかった。だけど、いるにはいるらしい。

「逆に……タケル君には、いるの？ 憧れの先輩」

「憧れの先輩ってわけじゃないけど、尊敬してる人なら一応いるかな？」

「だ、だれ……？」

「秘密。言ったら、いじられる気しくないから」

俺の頭の中には猫を抱いて、ニヤニヤと笑みを浮かべるディレクターの姿が思い浮かぶ。

あの人に「実は尊敬してるんです」とか言ったら、定年退職するまでいじられるだろう。だから絶対と言ってやらない。まあ、今のご時世転職も普通になりつつあるので、定年退職までこの会社に居続けるかもわからないけど。

そして、情報というのはどこから漏れるか分からないので、例えひふみであっても絶対に言わない。

その後は一時間ちよつとひふみと宗次郎の話や、休日の過ごし方を話しているうちにお酒も進み、いつの間にか俺の意識はまどろみの中に消えていった。

☆ ★ ☆

(寝ちゃったみたい……)

目の前の机に、ピーチサワーの入ったグラスを持ちながら突つ伏すタケル君。今日も中々のハイペースで飲んでたから、仕方がないかも。

タケル君はそこまでお酒が強いわけではない。でもお酒が好きなので、いつもつい飲み過ぎてしまっていた。彼が飲み過ぎて眠ってしまうのもいつものこと。

だけど、ピーチサワーだけで酔うのもどうかと思う。しかし、タケル君は10分ほど眠ったのちに復活するのであまり困らない。これで眠ったままだと、タクシーとか呼ばなきゃいけないから……。

自他ともに認めるコミュ障の私にとって、タクシーを呼ぶことはなかなか勇気のあることである。

「んん〜……コウ、ズボンを履けて、あれだけ言っただろ……」
「ふふっ……」

眠つていてもコウちゃんに振り回されているみたい。眉を寄せて唸るタケル君に、思わず笑みがこぼれる。

だけど同時に……嫉妬してしまう。

彼の夢の中にまでコウちゃんが出てくることに。タケル君はコウちゃんのが好きだから仕方のないこと。でも、恋する乙女としてやっぱり複雑な気分になる。

(……夢の中くらい、コウちゃんじゃなくて私でもいいと思うのに)

私は目の前で眠るタケル君に向かって口を少しだけ尖らせた。だけど彼は気付くこともなく、幸せそうな顔で眠っている。その寝顔が少し可愛くて、かっこいいから……やっぱりタケル君はずるい。

彼に恋をしたのは新入社員の頃だった。

当時の私は今以上に引つ込み思案で、人見知りが酷くて、ミスばかりして先輩を困らせていた。

この時の先輩が、いま目の前で眠っているタケル君。彼は当時も企画班に属していたのだが、人が足りないということでキャラ班も兼任していたのである。そして、タケル

君はいつも私のミスをカバーしてくれた。

今でこそ、それなりに仕事ができるようになった私だが、それはタケル君のお蔭。タケル君がいなければ、今の私はいないと思う。

口数の少ない私に辛抱強く付き合ってくれ、面倒見の良い性格。

今は青葉ちゃんとのコミュニケーションに若干苦勞してみたいけど、基本的に後輩には好かれやすい。

ゆんちゃんとか、はじめちゃんが彼に懐いているのも納得できる。青葉ちゃんが彼の事を慕うのも時間の問題だと思う。りんちゃんだけは例外。

(だけど、りんちゃんだって昔ほどタケル君の事を嫌ってないと思うんだけどな)

私が入社した当初よりも、確実にタケルへの接し方はやわらかくなっている。

最初、二人の会話を見た時はほんと刺々しかったから。苦笑いであれ、笑顔を浮かべることなんてありえなかったし……。

りんちゃんの雰囲気が変わったのは、フェアリーズストーリー2でコウちゃんがADを降りた時くらいだった。ADは別の人に交代したけど、やっぱり現場は少しだけ混乱して、タケル君もりんちゃんも忙しそうにしていたのはよく覚えている。

(私が知らない時に、二人の間には何があったんだろう……)

りんちゃんとタケル君の間に何があったのかはよく分からない。だけどコウちゃん

を取り合う以外に、二人の間には大きな問題があったんだと思う。まあ、この話はタケル君や、りんちゃんの話してくれるまで考えないことにしよう。

(それにしても私が入社したときのタケル君って、相当忙しかったんだらうな)

キャラ班と企画班を兼任って、よく考えたら信じられない話である。特に当時は今ほど人数もいなかったの、より忙しかったはずなのだ。

しかし、忙しいのは今も同じだと思う。もうキャラ班ではないのに、よくキャラデザを手伝ってるし……。

多分彼は、生粋のお人好しなのだろう。タケル君が振られた仕事を断る姿を一度も見ることがない。この前、鼻歌を歌いながらバグを探していて驚いてしまった。き、企画の仕事は大丈夫なんだろうか？

「いつもお疲れ様、タケル君」

私は彼が眠っているのを改めて確認してからその頭を撫でる。

彼はワックスで髪を整えたりしていなかった。やわらかくてサラサラな髪感触の味わえる。

何でも、髪を整えるのはめんどくさく、寝ぐせさえついていなければ問題ないみたい。コウちゃんにお洒落しろってよく言ってるけど、タケル君も大概な気がする。

相変わらず夏はTシャツにジーパン。冬はパーカーにジーパンと、毎日同じような格

好だ。

本人にはいつてないけど、コウちゃんの服を気にしている暇があったら、自分の服にも気を遣ってほしい。せっかく素材はいいものを持っているんだから。髪を整えて、それなりの格好をしたら絶対にかっこいい——。

(……って、私っては何考えてるの！)

慌ててぶんぶんと首をふる。顔が熱い。すぐに余計な妄想をしてしまうのが私の悪い癖だ。落ち着きを取り戻すために日本酒を口に含む。

「ふう……」

やっぱり日本酒はおいしい。それに飲むと落ち着く。落ち着いた私はもう一度、タケル君に視線を移した。

(……タケル君はきつと、可愛い後輩程度にしか思っていないんだろうな)

彼が私を女の子として意識していないことはすぐに分かる。それに、タケル君はコウちゃんが大好きだし。

「少しは私のことも女の子としてみてください」

つんつん頬をつつくも、彼は「ううん……」と小さく呻くだけ。眠っている姿は小さな子供みたいだ。

タケル君の事を好きになった日のことは今でもよく覚えている。

私はその日、少しだけ大きなミスをした。今思えばそこまで大きなものではなかったのだが、小さなミスが重なっていた私はかなり落ち込んでしまったのだ。

そんな私を、タケル君がこの居酒屋にへと連れてきてくれたのである。

「何でも注文していいからな。今日は俺の奢りだ」

タケル君は笑顔だった。正直私は何かを食べる気分ではなかったのだが、奢ると言うてくれた先輩の手前でそんなことも言えず、適当に烏龍茶を注文。

その時もタケル君は笑顔で私に話しかけてくれて……逆に私は申し訳なさが増していた。きっと先輩は気を遣っている。

「すいません先輩。色々……」

気づくと私は先輩に向かって頭を下げていた。ミスばかりしている自分が情けなくて、先輩に迷惑をかけていることが申し訳なくて……。

すると、笑顔を見せていた先輩がふつと真面目な顔になる。そして、ピーチサワーを飲みながら先輩は話し出した。

「新入社員がミスをするのは当たり前だ。それをフオローするためには俺たちがいるんだ

よ」

「で、でも、ミスばかりして迷惑じゃないんですか?」

「ひふみの事を迷惑だなんて思っていない。俺だって、新入社員の頃はミスばかりして先輩に迷惑かけてたからな。それにひふみは真面目だ」

「まじめ……?」

「そう、真面目。俺だって、ミスして何も反省していないようなら怒ってるよ。だけどひふみはちゃんと反省して、次につなげようとする姿勢が見える。それなのにミスをするのは、先輩である俺の指導不足だ。だから、本当にごめん」

頭を下げる先輩に私は慌てて手をふる。

「あ、頭を、上げてください……先輩。せ、先輩は……何も悪くないです」

「いや、そんな事はない。俺も先輩になってまだまだ日が浅いとはいえ、うまく指示を出せずに混乱させちゃったりしてるからな」

しかし、先輩は頑として頭をあげようとしめない。先輩は優しいけど、変なところで意地っ張りだ。

そのまま一分ほど頭を下げた先輩はようやく顔を上げる。

「俺はさ、先輩としてはまだまだ半人前。勉強中なんだ。だけど、頼りになる先輩になれるよう努力してるつもり。頑張ってるつもりなんだ。だってさ……ちよつとでもひふみたち後輩に良い顔を見せたいんだよ」

人懐っこい笑顔で笑うタケル先輩。

これまで見たどんな顔とも違う。彼の見せた自然な笑顔に私の心は跳ね上がった。

「それに、ある人に言われたんだ。『上司の手柄は部下の手柄。部下の責任は上司の責任だよ』って。俺は、その人の言葉だけは忘れずに後輩と接しようと思ってるんだ」

そのままの笑顔で先輩は優しく私の頭を撫でる。

頭を撫でられたのは初めてだったけど、不思議と嫌じゃなかった。むしろ優しい手つき、優しい笑顔に心拍数が再び跳ね上がったくらい。

「……そ、それにしても真面目な話をしてるのにグラスの中はピーチサワーって、き、きまりませんね先輩」

こんなにドキドキしたのは初めてで……恥ずかしさを隠すように、私としては珍しく早口でまくし立てる。すると、

「……ビールは嫌いなんだよ。苦いから」

拗ねたように先輩がそっぽを向く。そんな子供のような言い訳をする先輩が可愛くて、私は思わず吹き出してしまった。

「あつ、おいひふみ！ 笑うんじゃねえよ！」

「す、すいません……ふふっ」

「また笑った!？」

あんなに笑ったのは多分、生まれて初めてだったと思う。しばらく笑いの止まらなかった私だが、5分後くらいにようやく収まった。

「ご、ごめんなさい、先輩……」

「ほんとだよ。いくらなんでも笑いすぎだ」

未だに拗ねたままの先輩がピーチサワーを手に、不満の言葉を口にする。

「だけど……ありがとうございます。すご……、元気が出ました」

「そりゃ、よかったよ」

「今日だって……私を、励ますために……連れてきてくれたんですよね?」

「さあ、それはどうだろうな」

分かりやすく視線を逸らす先輩。ずるいなあ、本当に。

「……先輩は、優しすぎです……」

先輩に聞こえない声で私は呟く。多分、自分の魅力に本人は全く気付いてないんだろうな。

「ん? 今何か言った?」

「い、いえ、何も言ってないです……」

「それならよかったよ。うしつ、ひふみの元気も出たことだし、今日はこれくらいでお開きにしようか」

「あつ……ま、待つてください、先輩……」

私は立ち上がった先輩の服の袖を摘む。彼に対してここまで積極的になれたのは、後にも先にもこの時だけだったと思う。

「どうかしたのか？」

「え、えつと……、その……。ま、まだ、元気が足りないので……その、ええつと……」
顔を真っ赤にしてアワアワしていると先輩がニツコリと微笑み、優しく頭を撫でてきた。

「これでよかったか？」

「あ、あう……」

よかったですけど、よかったですけど！ 思わず両手で顔を覆う。こんなに緩んだ顔、とても先輩には見せられない。でも、私はこの日の事を絶対に忘れないと思う。
彼に恋した、この日の事を。

あれ以来、私にとってタケル君は憧れの先輩であり、尊敬の対象であり、そして好きな人でもある。

ちなみに、タケル君の尊敬する人も何となく分かっている。

私が一度葉月さんに完成したキャラモデルを見せに言った時、

「うんうん。初めに比べたらだいぶ良くなったね。でも……大分興梶君に手伝ってもらっただろ？」

「は、はい……」

「全く、あまり干渉しすぎるなどと、あれほど言っておいたのに。これじゃあ、滝本君の實力が分からないじゃないか」

「す、すいません……」

「いや、滝本君は悪くないよ。むしろ悪いのはこの私さ。一応、興梶君は私の部下だからね。部下の責任は上司の責任だよ」

そう言った葉月さんは、タケル君と同じような顔で笑っていた。この時によく分かった。

葉月さんがいたからこそ、今のタケル君があるのだと。そして口ではうまく尊敬できないとタケル君は言ってるけど、心の中では葉月さんのすごく尊敬しているのだろう。詳しくは聞いてないけど、タケル君も入社当初、葉月さんに色々と助けてもらったに違

いない。

「うう〜ん？」

そこで眠っていたタケル君が目を覚ました。目がいともよりとろんとしているのが、少しだけ可愛い。

「あつ、ごめん。俺つてば、また寝てた？」

目をこすりながらタケル君が訊ねてくる。

「うん。……でも、少ししか……寝てないから、安心して」

もう少しだけ寝顔を見ていたかったというのは内緒。でも、いつも通り彼の寝顔を写真に収めてあるし、今日の飲み会も満足だ。

「それじゃあいい時間だし、そろそろ帰ろうか。駅まで送るよ」

「う、うん……ありがとう」

荷物をまとめて私たちはお店を出る。

ここから駅まで5分くらい。もう少しだけ距離が長ければなあと、毎回思ってしまう。タケル君とは乗る電車が違うから、本当に残念。

そして今日も話をしているうちにあつという間に駅についてしまった。

「それじゃあ、また月曜日な」

「ま、またね……」

私は控えめに手を振って自分の乗る電車のホームへと歩いていく。

(一緒に帰れないのはちよつと寂しいけど、今日も楽しかったな)

そんな彼女の見せた微笑みに、近くにいた数人の男性が見惚れてホームから落ちそうになったのは、また別の話。

恥ずかしい思い出、苦い思い出はなかなか忘れられない

「それじゃあ、次のメインキャラデザは新人の八神コウに任せることにするから。みんな、彼女をしつかりと手伝ってあげるんだよ」

みんなの前で八神コウと呼ばれた人物がペコツと頭を下げる。プロジェクトの画面には八神の描いたキャラが写っていた。そのキャラはどれも特徴的で魅力的で……新人離れしていると言わざるを得ない。

みんなの前で少し戸惑った彼女こそ世間一般的に言えば、才能の塊というのだろう。(ちっ……)

心の中だけで舌打ちをする。俺と同じ新人ながらメインキャラデザをつかみ取った彼女に俺はみつともなく嫉妬していた。

☆ ★ ☆

「おーいタケル？ そろそろ午後の仕事が始まるよ」

「……………」

背中を揺さぶられ目を開くと、コウが眠っていた俺の顔を覗き込むようにして見つめていた。

「あれっ？ もうそんな時間？」

俺は目をこすりながら体を起こす。

「もうそんな時間だよ！ それにしてもタケルがこの時間に寝るなんて珍しいね。疲れてる？」

「いや、そういうわけではないんだけど……ただ、少しだけ懐かしい夢を見てた気がする」

あくびを噛み殺しながらどんな夢を見ていたのかを思い出そうとする。しかし、夢の内容を思い出すことはなく、俺は午後の仕事へと取り組んでいくのだった。

もしかすると夢の内容は、少しだけ過去を遡った内容だったのかもしれない。

☆
★
☆

「うーむ……」

コウが難しい顔をして画面とにらめっこをしている。その横には同じく難しそうな顔をした涼風さん。

彼女は今、コウに頼まれていた村人のキャラデザを完成させ、見てもらっているところだった。

ちなみに俺も企画の仕事が終わっていないため難しい顔をしている。まあ、難しい顔というよりは絶望的な顔といったほうが正しいかもしれない。そろそろ締め切りが本格的にまずいのでいいかげん何とかしなくては……。

「OK！ これでお願いしていた村人の仕事は全部かな？」

「大変でした、ほんと……」

コウから無事に承諾を得られた涼風さんが、ホツとした様子で胸をなでおろしている。無事に終わったようで何よりです。俺の企画もあんな感じに終わらないかな？

「お疲れさん。じゃあ次は一体キャラデザとしてもらうから」

「えー……！！」

驚きの声を上げる涼風さんに、コウはキャラデザの情報を記した仕様書を手渡す。確かに新人のうちから村人のキャラデザを任せられ、更にその上のキャラデザまで任せられ

たら普通は驚くよな。

逆に言えば、それだけ涼風さんに実力がついてきたということなのだろう。

「涼風さん、次もキャラデザ頑張つてね」

「あ、はい！ 頑張ります！」

俺が声をかけると涼風さんは少しだけ戸惑いながらも、気合のこもった表情を浮かべてくれる。うんうん、これなら村人と同じようにいいものを作ってくれるはずだ。

「私たちも去年やらされたんだよね。チームが発足した頃だったからコンペで無理やりさ……」

はじめが頭の後ろで手を組みながら昔を懐かしむような声を上げる。

「コンペ？」

「どんなデザインがいいかみんなで持ち寄るんだよ。もちろん、いいデザインを出せれば採用されるんだけど……」

「はじめは何も思い浮かんでなくてパンクしとったな」

「言われてみるとその当時のはじめ、見るたびに机に突っ伏してたっけ」

「し、仕方ないじゃないですか！ 思いつかないものは思いつかないんだから!!」

頭から湯気を出し、もはや死に体だったのはいい思い出。あまりに酷かったので、俺なりにアドバイスはしてあげました。

「ちなみに青葉ちゃんはどんなキャラを描くん？」

「えつと……」

仕様書を見ながら涼風さんが説明する。しかし、涼風さんの口から説明されたのはどこかで聞いたことがある……というか、まんま涼風さんのことだった。

はじめとゆんも気が付いたのか、俺と同じように微妙な表情を浮かべている。更に、「主人公一向を次のダンジョンへ案内する途中に……盗賊に襲われて死んじゃうみたいですよ」

「難儀やなあ……」

コウの奴、完全に遊んでやがる……。キャラをまんま涼風さんにし、しかも殺すという離れ業。

涼風さんが自分をモデルにされていると気付いた時、いい笑顔でからかうんだろうな。というか、気付かない涼風さんも涼風さんだと思う。

でも自分の癖とか特徴とか、他人から指摘されてはじめて気づくことも多いので仕方のないことかもしれない。

「取り敢えず、涼風さんは肩ひじ張らずにいつも通り作ってくれば大丈夫だよ」

「そうですかね？」

「まあ、結局はコウがオツケを出すかどうかだけだね」

「が、頑張ります！」

そう言つて涼風さんは自分の席へと戻つていく。しかし、気持ちとは裏腹になかなか苦戦しているようで、

「頭についてるだろ〜？」

「わわっ!!？」

自分の頭についているツインテールですらわからなくなっているようだった。調子を見に来たコウに、ツインテールの結び目をぐりぐりとやられている。その姿は何だか可愛い。

俺もコウに頭をぐりぐりされたらいいアイデアが浮かぶかもしれない。

「調子はどう？」

「まだ全然です………」

「ちよつと見せて」

コウと一緒に涼風さんが描いていたキャラデザを見ると、確かに少しだけ迷走しているようだった。迷走といつてもそれなりにかけているんだけどね。

「最近の仕事でいっぱいいっぱいで絵もかいていませんでしたし、キャラデザをさせてもらえるつてわかつてたら………」

「それは言い訳！」

「そうですね、はい……」

言い訳といわれて涼風さんがつくりと肩を落とす。仕事の忙しさを言い訳に使わないあたり、ほんとコウは仕事に対してストイックだ。

言い訳ばかりしている現代人に聞かせてあげたい。あつ、それは自分のことですねうしません。

「八神さんも最初はコンペに参加したんですか?」

「そうそう。がむしやらに描いたなあ」

「そ、それでメインキャラデザを勝ち取ったんですよね?」

「うん!」

「ほんと、あの頃のコウは鬼神のように絵を描きまくってたからな。あつ、それは今も変わらないか」

「ちよつと、それって褒めてるの?」

「最大の褒め言葉だよ」

むつとした表情を浮かべるコウを「まあまあ」といつて宥める。時間を忘れて絵を描き続けるだなんて、本当にすごいやつにしかできないと思うからな。

「青葉の年の頃にはもうメインやってたんだな私。でも、青葉の場合は私という壁を越えなきゃいけないから覚悟するように」

「うっ……」

改めて考えると、涼風さんにとってはものすごく高い壁である。ちよつとやそつとで登れるような壁ではないだろう。

どうでもいいけど、某漫画に登場する壁が頭の中に浮かんでました。

「でもコウちゃん、それで先輩たちに目をつけられてよくいびられてたのよ」

「ちよ、ちよつとりん！」

会話を聞いていたらしいりんが俺たちの会話に混ざってくる。というか、突然現れたのでびつくりした。

会話を混ざるのは構わないけど、気配を消すのはやめていただきたい。それに今回はコウと二人で話してたわけじゃないんだし、気配を消す必要はないだろう……。

「え、どういうことですか？」

「だって突然入ってきた新人にメインを持っていかれたら面白くないじゃない？」

「あ、あれは私も生意気だったし……」

「それで毎日毎日私が愚痴を聞かされてたんだから」

昔の思い出を嬉しそうに話すりん。本人にその気はないかもしれないけど、聞かされる身としてはのろけ話を聞かされている気分だ。しかし、りんが幸せそうに微笑んでいるので今回はツッコむのをやめてあげよう。

「……でも、少しわかります」

『?』

何が分かったのだろうかと首を傾げる上司三人に涼風さんが口を開く。

「私、八神さんが同じ年でもうメインをやってたって知って、悔しいというか妬ましい気持ち少しあつて……」

彼女の口から漏れたのはコウに対する嫉妬の気持ち。俺は彼女から出てきた嫉妬の気持ちに少しだけ驚いていた。

大抵の奴はコウの才能を見ると前述のとおり妬むか、自分とは住む世界が違うのだと諦めてしまうやつが多い。

涼風さんも妬んでいると口では言っているが、先輩たちの嫉妬とは少しだけ違っている気がした。

「……つて、駄目ですね。私ったら何時までも子供っぽくて」

頭をかく涼風さんに俺は首を振る。

「そんなことないよ涼風さん。俺は素直に嫉妬できる涼風さんが凄いと思う。……コウもそう思うだろう?」

「うん。そうだね。私も青葉の立場でもきつと同じことを思うよ。だって私はこの仕事が好きなんだもん。青葉、さつき村人たちがマップに乗ってさ。サーバに上がってるか

ら見てみな」

「は、はいっ」

涼風さんの作った村人は既に俺も確認済みだ。正直、キャラデザの段階ではピンとこないのだが、マップに上がると細かい修正を入れた理由がよく分かると思う。

あのリメイクがあつたからこそ、キャラは一段と輝くのだ。それが例え村人であつても。

「あつー！」

PCの画面に映つた村人たちを見て涼風さんは驚きとも、感動ともとれる声を上げる。

「凄いです！ ゲームに乗るとこんな感じに見えるんですねー！」

「悔しいって気持ちも大切だけど、やっぱり楽しいって気持ちはこうして伝わると思うんだ。それが一番大事かなって」

「はいっ！」

涼風さんが目を輝かせて頷く。その素直で真っ直ぐな瞳があれば、先輩たちのように道を見誤ることもないだろう。少なくとも俺たちは彼女を道を間違えないように導いていく必要がある。

「でも忘れちゃいけないのが、今の画面は決して一人では作れないということ。私の仕

事は目立つ位置にあるけど、他の人の支えが無かったら絶対にゲームは作れない。青葉もこの事を忘れないようにね」

「な、なんだか今度は責任重大で緊張してきました」

コウの言葉に涼風さんの顔が少しだけ青くなる。新人ちゃんにあんまりプレッシャー掛けないで。

しかし、コウの言ったことは一見普通のことかもしれないけど、決して忘れてはいけないこと。

企画にしても企画だけでは、ストーリーだけではゲームにならない。ストーリーに花を添える絵があつて、プログラムがあつて、モーションがあつて、背景があつて……その他、大勢の人が関わって初めてゲームというコンテンツが誕生するのだ。

そのどれか一つが欠けてもゲームは完成しない。しかし、「すごい」、「おもしろい」といわれるのはほんの一握りの人間だけ。もちろんそれはゲームを買ってくれた人が評価してくれればこそだ。

そう考えるとある意味、この業界は凄く残酷な世界なのかもしれない。でも、涼風さんならそれを忘れることは決してないだろう。

そんな彼女は俺にとって少し眩しい存在だった。

「ところで、タケルさんも新人の頃はコンペに出たりしてたんですか？」

「……そりゃ、もちろんだよ。俺にとつては結構昔の話だけだな」

涼風さんから振られた質問に、俺は少しだけ間をおいて答える。脳裏には懐かしくて苦い思い出が流れ込んでいた。

多分、今の間に気付いたのはコウとりんくらいだろう。

「タケルさんは最初、キャラ班にいたんでしたっけ？」

「今でこそどこの班に所属してるのかよく分からないけど、元々はキャラデザをやりたくてこの会社に入ったんだよ」

「へー、そうやったんですね。でも、それならどうして今は企画をやってるんですか？」

タケルさんの腕ならそのままキャラ班に残っていてもよかつたのに」

「うーん、キャラ班から企画の仕事に映った経緯を話そうとすると、それはそれは壮大なスペクタクル映画みたいになるからな。それでもいいなら話してもいいけど」

「時間がかかりそうだから、話さなくて大丈夫だよ」

話し出そうとした俺を止めたのはコウだ。

本人は嘆息し苦笑いを浮かべているが、多分気を遣われたのだろう。俺は心の中だけで手を合わせる。

「ちなみに、私がメインになって八神さんの上司になったら、まず八神さん呼び捨てにしますね！」

さらにはじめがいい感じに話を逸らしてくれたので俺の過去はそれ以上掘り返されることはなかった。今回ばかりははじめの天然なところに救われた感じである。

しかしコウの事を呼び捨てにするといったはじめに、

「その時は会社やめるわー」

「うちもー」

「……………」

コウとゆんが止めると宣言し、ひふみは何も言わなかったが恐らく同じ事を想っているだろう。りんも苦笑いでこの状況を見守っている。

「あ、青葉ちゃんは…………？」

「…………じ、自信ないかも」

新入社員にまで離反されたらどうしようもない。そしてはじめは最後の砦とばかりに視線を向けてくる。

「た、タケルさ——」

「いや、俺もやめるよ」

「せめて最後まで言わせてくださいよ!!」

涙目のはじめが叫ぶ。しかし、涙目になったところで俺の決定が覆るわけではない。

横暴な上司は何時の時代だって信用も信頼もされないのである。

「うう……私も、悔しいです」

「ずっと落ち込んでればいいよ」

涙を流すはじめにコウはどこまでも辛辣だった。

☆ ★ ☆

「お疲れ様、タケル」

残って仕事を片付けていた俺の机にコトンと缶コーヒーが置かれる。見るとコウが席の傍に立っていた。

今日は珍しくりんもないため、社内に残っているのは二人だけ。

「サンキュなコウ。えつとお金は……」

「これくらいならいいって」

「そうか。じゃあいただきます」

一言お礼を言い、プルタブを引きコーヒを一口流し込む。ブラックコーヒー特有の苦みが口一杯に広がった。この苦みは嫌いじゃない。

缶コーヒーを飲みほした後、その空き缶を何となく両手で包む。そして、

「……今日は話題を逸らしてくれてありがとな」

「気にしなくていいよ。あの事に関しては何もう時効でしょ?」

そういつて笑うコウはあの時と同じ顔をしていた。

「気にしなくていいいつて言ってるくれることは本当に嬉しい。けど……先輩たちと一緒に
なつてコウの事をいびつてた身としては忘れたくても忘れられないんだ」

決してなかったことにはならない過去の過ち。若気の至りだといったら確かにそう
かもしれないし、違うかもしれない。

当時のいびつていた先輩は全員いなくなったため、知っているのは俺とコウとりん。
それに葉月さんくらいだ。

「コウは大したことないつて言うけど、」

「タケル!!」

いきなり俺の名前を呼んだと思ったら、両手で頬を挟まれた。

「ふお、ふおい!!（お、おいっ!!）」

「私がいいつて言ってるんだから、もうこの話はいいの! 確かにタケルは先輩と一緒に
なつていびつたことに間違いはないけど、タケルは私に謝ってくれた。それに誠意を
感じたから私も許したの。だから、この話でタケルが負い目を感じることはもうおしま

いにして！ いった？」

「ふあ、ふあい……」

あまりの剣幕に俺は頷くしかなかった。しかも頬を挟まれながら。男として情けないったらない。

それでもコウは俺が頷くと満足そうにニツコリと微笑む。

「それにさ、私だつて散々タケルやりんに迷惑をかけてきたじゃん？ だからさ、お互い様だよお互い様」

「……なんかそう考えると、一番感謝すべきはりんなのかもな。俺たちがちゃんとしないうとりんの奴にもっと心配かけちゃう」

「ふふつ、そうかもね」

そこで俺たちの会話は途切れる。俺は電源を落としたパソコンの画面を見つめ、コウは窓の外に視線を映している。

お互いが何を考えてるのは分からない。もしかすると苦い過去の記憶を思い出しているのかもしれない。

真つ黒に染まった画面を見ると、そのまま過去の思い出に吸い込まれて行きそうな錯覚に陥る。

俺は泥沼に沈んでいきそうな思考を何とか振り払う。

「……じゃ俺は残ってる仕事を終わらせるから」

「うん、がんばって」

最後にその言葉を交わした後、俺たちは自分の仕事へと戻っていくのだった。

☆ ★ ☆

ちなみにその翌日。

「ソフィアちゃんです!!」

あつ、結局昨日のキャラの名前、ソフィアちゃんにしたんだ。自分をモデルにしたキャラに自分で名前を付けるって考えてみるとものすごく恥ずかしい。

「へえ、ソフィアちゃんか」

「……あつ、これ私ですか!?!」

「えっ、今気づいたの?」

コウの言葉と心の中でのセリフが重なった。

きつと涼風さんの顔は真っ赤に染まっていることだろう。

「最悪です!! 八神さん、大っ嫌いです!!」

「怒らないでよソフィアちゃん」

「も~~~~!!」

涼風さんには申し訳ないけど、面白いなあと思ってしまう自分がいた。

意外な人に心配されるほど戸惑うことはない

「青葉の次の仕事はこのソフィアちゃんの3Dモデルの製作ね」

涼風さんがモデルとなったキャラであるソフィアちゃんが完成し、次なるコウの指示は3Dモデルの製作だった。

昔はキャラ班に所属してたから、俺もキャラデザが完了するたびによくやったものである。今でもたまにやるんだけどね。

「ソフィアちゃんはイベントにも登場するから少し豪華に作ること！」

「豪華？」

豪華という言葉に涼風さんが首を傾げる。

そんな涼風さんに重要度に合わせてキャラの密度を調整しているんだよとコウが説明すると、

「でも……死んじやうんですよね、ソフィアちゃん」

「そ、そこはどうしようもない……」

ソフィアちゃんが死ぬという事実には悲しげな声を出す涼風さん。気持ちには分からないくもない。自分が苦勞して作ったキャラだけに、死ぬのはやっぱり嫌なのだろう。もし

かすると、自分の好きだったゲーム・アニメのキャラが死ぬ感覚と同じかもしれない。そんなの俺だって悲しくなる。

一方コウは困惑気味。こればかりは仕方がないという感じだ。仕様書を作ったのはコウだしね。

「コウちゃん、そろそろ会議よ。後タケルも」

ある意味丁度良いタイミングで、りんから会議だと声がかかる。このまま話を続けていたら空気が重くなったかもしれないのでナイスタイミングである。

しかし、俺のついで感が否めない。まあいつも通りなので気にしないことにしよう。

「あつ、了解ー」「了解ー」

返事をして俺とコウは会議に必要な物を持って立ち上がる。

いつも通りファイルと筆箱をわきに抱えると、涼風さんがこちらをじつと見ていることに気付く。

「……………」

こちらをというよりは、俺たち三人の持っているものを見ている感じだ。

つられて俺も視線をコウとりんに移す。りんは相変わらずきつちりしており、逆にコウは紙を一枚とペンだけ。りんほどきつちりしろとも言わないが、もう少しちゃんとしてほしいものである。

ちなみに俺は二人の中間といえど何となくわかるだろう。

(私が目指すべきは誰なんだろう……)

涼風さんの視線がそう言っている気がした。そこで涼風さんと視線が合う。なぜかホツとされた。まるで『タケルさんは普通で安心しました』といわれているみたいである。

俺を参考にするのは自由だけど、出来たらりんを参考にしてほしかった。

「青葉？ どうしてそんなホツとした表情でタケルを見てるの？」

「それはコウの気のせいだよ。ほら、会議に遅れるから行くぞ」

不思議がるコウとりんと共に会議室へ向かう。

「今日の会議はどんなことを話し合うんだっけ？」

「もうゲームの製作も終盤でしょ？ だから完成までの日数とか、その他もろもろに問題がないのかを話し合うわ。……前回の会議終わりでちゃんと言ったはずだけど？」

「そ、そうだったっけ？」

視線を彷徨わせるコウに「全くもうっ！」とご立腹のりん。

「でも……ここまで順調にこれてるわけだし、今更問題も出てこないと思うから大丈夫だろう？」

「今のタケルの言葉って、なんだかフラグっぽくない？」

「フラグはへし折るために存在するんだ。というか、フラグフラグ言うとな本当に問題が出てきそうだからやめてくれ」

「まっ、流星に大丈夫だと思っただけね。なんてたって、りんが計画を立ててるわけだしー！」

「もう、コウちゃんったら」

なーんて話してたのがいけなかつたらしい。

「キャラ班の残りのキャラ数と残り日数があつてないね」

あちゃ。葉月さんからの指摘に俺たち三人、特にりんの顔が青くなる。

「……………」

「ああ、ほんとだ。こりや忙しくなるな」

配られた紙を持ったままりんはぶるぶる震え、コウもどこか遠い目をして呟いている。俺は計画表を見て色々と割り切った。仕事に予想外の事態は付き物だし、人生割り切りも大事である。

それにしても葉月さん、落ち着いてるなあ。やっぱり修羅場をくぐってきた人？
はわけが違う。

そんなこんなで会議が終わり、

「……………」というわけでごめんなさい！ 私の計算ミスなの。キャラ班のみんなにはお泊り

か、土日どちらかに来てもらうことになると思うけど……」

アートディレクターであるりんが顔の前で手を合わせ、みんなに頭を下げる。

「ちなみに会社命令の休日出勤は有給が増えるのでちよつとお得です」

コウさんや。確かに大事なこともかもしれないけど、今はそんな事を言ってる場合じゃないだろ……。

「んな悠長な……」

心の声を通じたのか、ゆんが呆れたような声を上げる。ナイスツツコミだゆん。もつと言ってやれ。

「ほんならうちは休日に来ます」

「私も……」

「俺は残業します」

「タケルさんって別にキヤラ班じゃないですよね？」

「まあ半分キヤラ班みたいなものだし、気にすんなって」

というわけで俺とゆん、そしてひふみが答え、残りは涼風さんだけ。

この流れだとはじめも休日出勤かお泊りと思うかもしれないが、彼女はモーション班なので関係なし。同じブースにいて勘違いされがちなので一応言っておきます。

「青葉は？」

「……有給って何ですか？」

「そこからかよっ！」

そこにいた全員が吉○新喜劇ばりにずっこけそうになった。ま、まあ確かに涼風さんは高卒だし知らなくても無理はないか。俺も就職当時は何となくでしか知らなかったし。

取り敢えず涼風さんに有給の説明をした後、改めて尋ねる。

「それじゃあ有給の意味も分かったところで涼風さんはどうする？」

「そうですね……えっとじゃあ私は——」

☆ ★ ☆

「買ってきました、寝袋！」

通販で買ったらしい寝袋を嬉しそうに掲げる涼風さん。その姿は年相応でちよつと可愛い。

「早速やる気だなあ。泊まりも休日出勤もなんて……」

「ほんとだよ。俺だったらどつちもなんて絶対に無理だ」

珍しくコウが少し呆れている通り、涼風さんは泊まりか休日出勤かの二択を、二択であるにも拘らずどちらも選択したのだ。彼女は新人ながら社員の鏡である。

俺だったら絶対にそんな選択はできない。その事を示す通り、俺は泊まりのみを選んでいた。休日に出勤なんてどうしようもないとき以外、もつてのほかである。撮りためてるアニメも見れないし、積み上げたゲームもできないからな。

「最初だけですよ。ソフィアちゃんには時間かけたいので！」

涼風さんが良い子すぎて涙が溢れてくる。きつとご両親の育て方が良かったんだろ
うな。

すると涼風さんが何やら紙袋を持って振り返る。

「ついでに着がえもあります！」

「楽しそうだけどこれ残業だからな？」

「あ、あはは……」

元気な涼風さんに俺は乾いた笑いしか出てこない。最近、残業が辛くなってきたのでその元気を少しでも分けてほしいものである。やっぱり若さって大事だな。

その後、コウが涼風さんに泊まる時の注意点を指示すると言ったので俺も同行する。

「夜中は自分の席の天井以外は電気を消すこと」

「はー」

涼風さんの返事を聞いて試しにコウが部屋の電気を消すと、部屋の中が真っ暗になった。

夜中の会社は人が少ないため、なかなか雰囲気がある。実はあまり暗いところが得意ではないため、夜の会社は少し苦手だったりする。静かで暗いのは本当に良くない。

「……………」

涼風さんも昼間との雰囲気の違いを感じているのか、真っ暗になったブースを見つめている。

「……………わっ!!」

「ひゃう!?!」「どわあっ!?!」

コウがいきなり大声をあげたため、悲鳴を上げる俺たち二人。多分コウとしては涼風さんを驚かせたんだろうけど、油断していたため俺まで驚いてしまった。

「あはははっ!」「二人とも驚きすぎ! 特にタケル! どわあつて何、どわあつて?」

あははっ、はーお腹痛い」

『……………』

ゲラゲラと笑い声をあげるコウを、俺と涼風さんは顔を赤くして彼女を睨みつける。しかし、二人揃って涙目なので迫力は全くないだろう。なんか分からんけどめっちゃくちゃ恥ずかしい。

そんな視線を知ってか知らずか、コウはひいひい言いながらお腹を押さえている。コウの笑いが何とか収まったところで、

「取り敢えず青葉は着がえを持ってきてるんなら、トイレで着替えて着たらどう？ いつまでもスーツじゃ落ち着かないでしょ。あつ、それとも先にシャワー浴びとく？」

「うーん、シャワーは後にして先に着がえてきます」

紙袋を持って涼風さんがオフィスを出ていく。

「コウ、あんまり涼風さんをからかっちゃだめぞ？」

「えー、あんなの軽いスキンシップだって。それにタケルの面白い反応も見れて一石二鳥だったし」

「頼むからさつきのは忘れてくれ。あれはいきなりだったから仕方ないんだよ」

暗いのはいいんだけど、いきなりびつくりさせられるのに弱いんです。きつと共感できてる人も多いはずだ。

「あのタケルの反応は脳内に永久保存しておきたい位だったから、簡単には忘れられな

いな〜」

「マジかよ……」

「ふふっ！ あつ、私もトイレ行ってくるね」

そう言つてコウもトイレへ。残された俺は取り敢えず企画の仕事を進めていると、顔を少し赤くした涼風さんが戻つてきた。

「どうかしたの涼風さん？」

「八神さんつて、サラツとカツコいいこと言いますよね」

「……本当にどうかしたの？」

どうやらトイレで『ラフな格好も可愛いじゃん』といわれたらしい。なにそれ、漫画の主人公かよ。

「ま、まあ、意外と子供っぽいところもサラツとカツコいいこと言うのも、コウのいいところだから」

「……興柵さんも大変ですね。八神さんのことですから、結構とんでもないことを平然と言いきうですし」

「それは言うな涼風さん。俺……だけじゃなくてりんも一番よくわかつてるから」

サラツと『タケルのこと、信頼してるよ』とか、『頼りにしてる』とか言うんだもん。りん相手でも大差はない。キュンっとしてしまうのも無理はないだろう。

ほんと、どんな主人公よりもコウのほうがよっぽど主人公っぽく見えるから勘弁してほしい。

「あれ？ 二人とも何話してるの？」

そこでタイミングよく？ コウがトイレから戻ってくる。

「……別に世間話をしてただけだよ。八神コウは漫画とかラノベの主人公みたいだなって。だよな、涼風さん？」

「そうですね。八神さんは鈍感ラノベ主人公みたいですわねって話してたんです」

「あれっ？ ほとんど同じことを言っているはずなのに青葉のほうが酷い事を言っているような……」

「まあまあ、話してた内容は本当にどうでもいいことだから仕事に戻ろうぜ。早く終わらせないと遅れを取り戻せないからな」

「そうですね。私も頑張りますっ！」

涼風さんが自分の席へと戻り、俺とコウも遅れている分の仕事に取り掛かり始める。次の企画の仕事もようやく終わりが見え始めたので、ここが踏ん張りどころだ。

そこから2〜3時間ほど作業をし、

「んんんんん」

何とかキリがいいところまで終わらすことができた。固まった身体をほぐすために

大きく伸びをすると、腰や肩からぼきぼきと小気味よい音が聞こえてくる。

(……さて、涼風さんの様子はどうかかな?)

彼女は初めての残業だし、もしかすると疲れてうとうとしているかもしれない。そう思い彼女の座るデスクに視線を移すと、机に突っ伏してガッツリ眠っている涼風さんの姿が目に入った。すやすやと、気持ちよさそうな寝息を立てている。

(気持ちよさそうに寝てて申し訳ないんだけど、あの姿勢だと身体痛めちゃうよな。取り敢えず起こさないと)

以前、残業をした時機に突っ伏す形で寝落ちしたのだが、次の日身体が痛くなり尚且つ疲れもあまりとれていなかった。

そんなわけで涼風さんの机まで歩いていくと、同じく様子を見に来たらしいコウと鉢合わせる。どうやら考えていることは同じだったらしい。

二人視線を合わせて苦笑いを浮かべた後、コウが涼風さんの肩を掴んで優しく揺らす。

「青葉、青葉っ!」

「……? ……はっ! ……どっ!?」

どうやら寝ぼけてるみたいだ。辺りを確認するために、きよろきよろと首を動かしている。

「会社だよ」

コウの言葉に「あつ……」と声をもらす。どうやら自分が残業していたことを思い出したらしい。

「寝袋あるんならそつちで寝な。身体痛めちゃうよ?」

「そ、そうでした……」

「私もシャワー浴びたら寝るから。ふわあ……」

大あくびをしながらコウがシャワー室へ。涼風さんもそれに倣ってシャワー室へ向かう。

残された俺は机の中からカロリーメイトを取り出して一口かじる。これがあれば残業も無事乗り切っていけそうだ。

カロリーメイトを食べ終え、再び仕事へと戻る。しばらくするとコウと涼風さんがシャワー室から戻ってきた。

「興梠さんはシャワー浴びないんですか?」

「俺はもう少し仕事を進めてから浴びることにするよ」

「タケルもほどほどにね」

「分かってる、分かってる」

コウに向かって手をひらひらと振った後、程ほどに仕事を進めていく。

ちなみにシャワーを浴び終えた涼風さんはなかなか個性的な寝袋にくるまって眠っていた。しかしどうにもうまく眠れなかったらしい。

その証拠に「八神さくん、寝れませくくん……」という涼風さんの声とコウの悲鳴らしき声が聞こえてきたからな。何かを話した後、涼風さんはブースから出ていったので恐らく会議室に向かったのだろう。

(それにしても、今やつてる部分はなかなか面倒だ——)

「まあだ仕事やつてる」

「うおっ!? びっくりした。というか起きてたのか」

いつの間にかコウが自分の肩越しに画面を覗き込んでいた。仕事に集中しすぎて全く気付いていなかったたので、少し驚いてしまう。

「本当は寝ようと思ったんだけどね。どっかの誰かさんがいつまでたっても仕事を終わらせないから眠れなかったの」

左肩に顎をのせ、ジトつとした視線を向けてくる。

「休日に来ないのはいいけど、夜中にずつと仕事をやってたら休日に出勤するのとあんまり変わらないんじゃない?」

「そ、それはそうだけど……今回はキリのいいところまで進めたら終わるつもりだったんだ」

「……タケルのことだから、キリのいいところまでやったら朝になってたんじゃない？」
「……………」

「凶星でしょ？」

何も言わない俺に、コウはやっぱりという表情で少しだけ微笑む。

「全く。タケルは昔から変わらないよね。一生懸命って言うか、一生懸命すぎるって言うか」

「別に、あと少しで終わる予定だったし」

心の中まで見透かされたのが悔しかったので子供のような嘘をつく。だけどそんな子供じみた嘘もコウは見抜いていたようで、

「……無理だけはしないでね。タケルのことは信頼してるけど、それだけがすごく心配」
コウの言葉に心当たりのあった俺は何も言い返せなかった。

悲し気な彼女の頬笑みが脳裏に残る。

「じゃ、今度こそ私は寝るから。もし仕事を進めるにしても30分以内ね」
「分かってるよ。心配してくれてありがとう」

再び自分の机に戻っていったコウを見送り、俺は視線をパソコンに戻す。

「さて……………」

俺が再び残った仕事を30分以内で片付けようとしたところで、スマホがブーブーと

振動する。

画面を確認して「うげっ……」と思わず声をもらす。なぜならスマホの画面には、

【遠山りん】

無視しようと思ったが、無視したらしたで後々うるさいので仕方なく電話にでる。

「……はい」

『あつ、やつと出た。全く、電話が来たらすぐに出なさいよね。社会人として常識じゃない』

「お前からの着信じゃなかったらすぐに出てたよ。それで何の用だ？　こんな時間に」

『コウちゃんに変なことしてないかと思って』

「するわけねえだろ……涼風さんだっているのに」

そんな事を聞くために電話をしてきたのかよ……。俺が呆れていると電話越しで『それよりも』という声が聞こえ、

『こんな時間にはこっちのセリフよ。まさか今も仕事をやってるの？』

「いや、さつきコウに止められた。無理すんなって」

『止められたって言うてるけど、どうせまたやろうとしてるんじゃない？』

「……………そんなことはな——」

『凶星みたいね』

言い訳も最後まで言わせてくれなかった。どうして俺の同期二人はこうも鋭いのだろうか？

りんはまだしも、コウに至っては普段の鈍感さが嘘のようだ。

「何でお前らは俺の考えてることが分かるんだ？」

『私たちが鋭いんじゃないくて、タケルが分かりやすすぎるのよ。分かったのなら早く寝なさい。コウちゃんは30分くらいならいいって言うかもしれないけど、私は許さないわ』

「どうしてコウの言ったことまで分かるんだよ……ほんと、りんはコウの事大好きだよな」

思ったことをそのまま口に出すと、電話越しでガタガタという音が聞こえる。恐らく顔を真っ赤にして動揺していることだろう。

『いい、いい、今はそんな事どうだっていいじゃない！ それに、そのセリフはそっくりそのままタケルに返すわよ!!』

「分かったから、電話越しに大声出すなって。耳が痛い」

『誰が原因だと思ってるのよ！ 全く、これだからタケルは……』

しかし俺への悪態はそこまでで、りんのトーンが次第に下がっていく。

『……別にタケルが無理する必要はないのに。今回だつて私のミスなんだから、あなたは手伝う必要なんてないのよ?』

「好きでやってるんだから気にすんなつて。それにミスに気付かなかつた俺たちにも原因はあるわけだし」

『そういうことじゃないの。フェアリーズストーリー2の時だつて、今だつて……』
一度言葉を止め、改めてりんが口を開く。

『心配してるつてわかりなさいよ』

彼女の言葉に普段の刺々しさは全く感じられなかった。

本当に心配しているようなりんの声色。始めて言われた心配しているという言葉。どんな言葉を返しているのか分からず俺は逡巡する。

その間りんは何も言わなかった。まるで俺の返事を待っているかのように。

「……………悪い」

結局、考えたわりにはこんな言葉しか出てこなかった。

『ほんとよ。なにが楽しくてタケルの心配なんか……はあ、慣れないことは言うもん

じゃないわね。そもそもタケルの心配なんて普通ならありえないわよ。電話の相手がコウちゃんなら良かったのに』

「いつも通りのりんで安心したよ……」

怒涛の言葉に俺は苦笑いを浮かべるしかない。まあ、こっちの方がりんっぽいし安心するっちゃ安心する。

『それじゃあ言いたいことも言ったし、私は寝るわね。間違ってもこれ以上仕事をしない』

「それはフリと受け取っていいのかな？」

『出社したら朝一でぶっ飛ばすわよ？』

りんさん迫真のガチトーン。俺は慌てて言葉を訂正する。

「嘘です、冗談です」

『全く……じゃあおやすみ』

「おやすみ」

りんとの通話が終了し、俺はスマホを耳から離して机の上に置く。目の前にはつけっぱなしにしていたパソコンの画面。

(よしっ)

俺はパソコンの電源を落とすとそのままシャワー室へ。

シャワーを浴び終えた後、自分のデスクの下から寝袋を取り出す。最後に天井の電気を消した俺は、寝袋にくるまり目を閉じたのだった。

ちなみに次の日、涼風さんが会議室からなかなか出てこなかったのはまた別のお話。

同期三人、とある休日のお話

「ぶんぶんぶん♪」

日曜日。普段なら仕事もなく、お昼ごろまで眠っているところなのだが今日は違う。朝は8時に起床し、朝食を済ませ、ついでに掃除もした。

そして今は鼻歌を歌いながら髪の毛をセットしている。なぜ俺がここまで上機嫌なのかというと、

「まさかコウの方から休日に出かけようと誘ってきてくれるとは。これはもう脈ありと考えていいのかもしれない」

今も言った通り、コウが休日に出かけようと誘ってきてくれたからだ。今までこんなことはなかっただけにどうしても顔がにやけてしまう。

(これまでではりんに一歩遅れを取る形だったが、そんな劣等感とも今日でおさらばだ。今日あったことを職場で散々りんに自慢してやろつと)

ルンルン気分で準備をしているうちにそろそろ出かける時間となったので、俺は鞆を

持って家を出る。すると、

『あつー!』

同じタイミングで家から出てきたりんと目が合った。

『……………』

しばし見つめ合う俺たち。どうでもいいけどまるでときめかない。

「……………ふ、ふふっ」

するとりんが不敵な笑みを浮かべる。

「あら、タケルじゃない。どうしたのそんな格好して。珍しく髪も整えてるみたいだけど?」

その挑戦的な物言いに負けじと、俺も彼女に笑顔を向けた。

「いやいや、これくらい普通だよ普通。まあ、この後ちよつと大事な用事があるから普段より少し気合を入れてるってこともあるけど。というか、気合が入ってるのはりんも同じじゃないのか?」

俺が指摘した通り、今日の彼女は普段よりも格段にお洒落になっていた。

いつもも見ている格好でも十分お洒落なのだが、今日は気合のいれようが違っている。悔しいけど今の彼女はモデル以上に可愛かった。

「偶然ね。私もこれから大事な用事があるの」

どうやら俺と同じく、彼女にもこれから大事な予定があるらしい。しかし、どれほど大事な予定であつてもコウと出かける約束をしている俺には敵わないだろう。

「まあいいや。こんなところで立ち話をしてると約束に遅れちゃうし、そろそろ行くな。りんも気を付けて」

「ふふつ、ありがとう。それじゃあねタケル」

珍しく挨拶をしてから俺たちは分かれる……はずだつたんだけどな。

「ん？ りんもこの電車なのか？」

「ええ、そうだけど……」

「偶然だな。……まあ同じ電車くらいよくあることだよな」

「よくあることよね」

しかし、俺とりんは降りる駅も同じで、

「ま、まあ、降りる駅も同じことくらいよくあることだよな」

「よ、よくあることよね……」

そのまま二人仲良く改札をくぐり、同じ出口に向かう。そして同じ方向に向かって歩いていく。

『……………』

途中からお互い目的地に着くまで一言も話さなくなつた。正直嫌な予感しかしない。

それでも俺とりんは頭の中で『偶然、偶然』と呟きながら歩き続ける。僅かに残った『相手が違う』という可能性にかけて。

「あつ、二人ともやつと来た！ おーいタケルく、りんく!!」

『……………』

しかし、現実とは非常なものである。元氣よく手を振るコウを見て、僅かな可能性が砕け散った。途中から諦めてたけどね!!

ただどの時ばかりはりんと居酒屋で強めのお酒をかわしたくなつたよ。

「? あれ、二人ともぼーつとしちゃつて。私の顔になんかついてる?」

『……………』

「……………って、いひやいいひやい!! ど、どうひいてふおふおをひつふあるの(どうして頬を引つ張るの)!!」

『コウ(ちゃん)が悪い』

「どうひいて!?!」

そのまま腹いせとばかりに、コウの頬をグニグニと引つ張り続ける俺とりん。取り敢えず気が済むまで引つ張り続け、ようやくコウを解放する。

「全く、二人のせいで酷い目にあつたよ……」

「それはこつちのセリフよ！ コウちゃんがこんなことをしなければ……」

赤くなつた頬をさするコウにりんが一喝を入れる。

「ていうか、どうしてコウは俺とりんを誘つたんだよ？」

一番聞きたかつたことをコウに尋ねる。ぶつちやけ、りんならともかく俺まで誘つた理由が分からない。

「えつと、もう直ぐマスターアップでしょ？ その前に同期三人、親睦を深めておこうと思つて！」

「親睦を深めるのなら、別に食事とかでもよかつたんじやないの？」

「食事をするだけじゃつまらないじゃん！」

「……それはいいとして、ここに来るまで間、三人で遊ぶと言わなかつた理由は？」

「サプライズ！」

「そんなサプライズはいらなかつたなあ……」

遠い目をして呟くも、コウは意味が分からないとばかりに首を傾げるだけ。俺だけじゃなくてりんも涙目だった。

「……まあ過ぎた事を気にしてもしょうがないわ。ところでコウちゃん、今日はどこに行く予定なの？」

「最近この駅の近くにショッピングモールができたでしょ？ 今日はその行ってみようと思ってるんだ」

「分かったわ。タケルも異論はないわよね？」

「ここまで来たら二人についてくまでだよ」

そんなわけでショッピングモールまでの道を三人で歩いていく。

「ところで二人は一緒に来たの？」

「た、たまたまよ。途中でたまたま一緒にになったの!!」

コウの質問にりんが慌てた様子で弁明している。間違ってもお隣さんだなんていうわけにもいかなないからな。それにしてもりんのやつ、必死過ぎである。

「そうだよコウ。たまたま一緒にになったんだ」

「ふーん、そうなんだ。てつきり一緒に来たのかと」

「こ、こんなやつと一緒にだなんてありえないわよ!!」

「否定するのは構わんけど、せめてもう少しオブラートに包んでくれ」

なんて話しているうちに目的地に到着する。

「それじゃあまずはどこから行こっか？」

「まずは無難に映画とかでいいんじゃないか。時間は結構あるわけだし」

俺の提案でまずは映画を見ることに。しかし、

「こ、コウちゃん！　今はこの映画が流行ってるみたいだけど。女同士の友情、そして恋愛模様を描いてるものなんだけど、それがかなりリアルだね」

とある一人が暴走していた。目が危ない人みたいになっている。

「オイコラ。自分の趣味を押し付けるんじゃない！」

「絶対に面白いから、ね？　コウちゃん、これを見ましょう」

「話を聞け、このど変態」

取り敢えずりんの頭に手刀を下ろして黙らせる。頭を押さえてしやがみ込んだりんを無視して、上映スケジュールを確認していく。

今の時間で上映していたのは魔法少女ムーンレンジャーと、りんが言ってた百合映画と、派手なアクションとCGが話題のロボット映画。それと女子高生がキュンキュンするような恋愛映画くらい。

「コウは何を見たい？　って言ってもまともなのがロボット映画と恋愛映画くらいしかないんだけど」

「うーん、やっぱりアクション系の映画かな。見た後にスカッとした気分になるし！」

「じゃあそれにしようか。おーい、りん。何時までも拗ねてないで行くぞ」

「別に拗ねてないわよ!!」

ぷりぷり怒るりんを宥めつつ、チケットとポップコーンなどを購入し館内へ。

「映画館で映画を見るのって結構久しぶりなんだよな」

「タケルは超がつくほどのインドアだからね。もつと外に出て遊んだら？」

「同じくインドアのコウに言われたくないよ」

軽口をたたき合いながら本編が始まるまでのスクリーンを眺める。

本編が始まるまでの間、ちよつとしたCMみたいなのが流れるのだが、この時間が結構好きだったりする。

「……………」

「りん、謝るから無言でわき腹をつねり続けるのはやめてくれ」

よつぽど百合映画を見たかったのか、りんさんの機嫌が先ほどから非常に悪い。しかしそれ以上に周りからの視線が痛い。それは俺たちの並び順にあった。

左からコウ、俺、りんとなっている。

コウはともかく、りんも忘れがちなのだがかなりの美女。そんな二人を左右に連れれば、少なからず嫉妬の視線を受けるのは当然だろう。

シヨツピングモールに入ってから感じていたが、館内でも変わらず視線を感じ続けている。特に俺とりんなんかはイチヤついているようにしか見えないので、嫉妬の視線はより強くなっていた。

ただし、コウとりんは全く気付いていない模様。

「ねえねえ、タケルのポップコーンもらってもいい？」

「いいけど、コウのだって滅茶苦茶余ってるじゃん」

「バナナキャラメル味を買ったんだけど、甘ったるくて……」

「だからオーソドックスな塩にしとけて言ったのに」

文句を言いつつも、コウに自分が買ったポップコーンを差し出す。ついでにキャラメルバナナ味を貰ったのだが、これ以上は十分なくらいに甘かった。

「……………」

「りんさんや、つねる力がどんどん強くなってきてるんだけど？」

コウにポップコーンをあげたり、機嫌の悪いりんを宥めたりしているうちに目的の映画が始まる。そして、

☆ ★ ☆

「いやー、面白かったね！」

「評判通りの面白さだったな〜」

CGもさることながら、ストーリーも中々でとても勉強になった。

「特にCG部分は圧巻の出来だったよね。今度はロボットもののゲームでも作ってみる？」

「作ってもいいけど、モーシヨンとか作画とか、かなり面倒じゃないか？」

「そこは、はじめも含めてみんなに頑張ってもらおうということぞ！」

「とんでもない激務になりそうだからやめておいた方がいいと思うぞ」

「というか、こんな所でも仕事の話をしている二人の方がどうかと思うわよ」

感想の言い合いから仕事の話に発展した俺たちを見て、りんが「はあ」とため息をついている。ちなみに今は少し遅めの昼食を食べている最中だった。

「だっどあの映画、りんも面白いしすごいと思ったでしょ？」

「ま、まあ、それはそうだけど……」

なんだかんだりんも映画を楽しんでいたらしい。映画の最中、チラツと彼女の方を向いたんだけど、コウと同じくらい目を輝かせてたからな。りんにもまだ子供っぽい部分があるのだと少しほっこりした。

「さて、この後はどうしようか？」

いち早く昼食を食べ終えたコウがコーヒーを飲みながら視線を向けてくる。

「うーん……あつ！ それなら服屋にでも行かないか？」

「別にいいけど、タケルって服を実際の店舗で買うようなタイプだったっけ？　店員が寄ってくるのを頭を下げて逃げちゃうようなタイプでしょ？」

「否定できないのが辛い……じゃなくて、誰も俺の服を買うだなんて言っていないだろ？」

「えっ？」

「……なるほど。タケルにしては名案ね」

りんは俺の企みが分かったようで悪い顔をしている。コウだけが意味が分からず「えっ？　……えっ!？」と困惑するばかり。

「確かこのショッピングモールには……あつ、やっぱりあった。タケル、ここのお店でいい？」

「……バッチリだよりん。それじゃあ早速その店に向かおうか。コウの気が変わらないうちにうちに」

「そうね。コウちゃんの気が変わらないうちに」

「ちよ、ちよつと！　何が何だかさっぱり分からないんだけど!？」

企みを話せばコウの奴が逃げかねないので、何も教えないまま目的地まで引つ張って行く。

しばらく歩いていくと目的の場所に到着する。

「い、い、い、い……男性ものじゃなくて女性用の服屋じゃん!？」

驚きの声を上げるコウ。このお店は俺もテレビで見たことがある。可愛い系の服からカジユアル系の服まで、女性の服なら基本的に何でもそろっているらしい。

俺には一生縁のないお店だと思ったのだが、まさかこの様な形で来ることになるだなんて。

「え、えつと、このお店に来たのはりんの服を選ぶためだよね？」

「そんなわけないでしょ。もちろん、コウちゃんの服を選ぶためよ。ねつ、タケル？」

「もちろん。普段から同じような服しか着ないコウに、新しい洋服を選んであげようと思つて」

笑顔を見せる俺とりんを見てコウの瞳が大きく見開かれた。

「いい、いい、いらぬいらぬ!! 絶対いらぬからね、新しい服なんて!!」

「さあーて、時間も無くなっちゃやしきつさで行こうか」

「そうね。さつさと行きましようか」

「ちよつと、どうしてこんな時ばかり息びつたりなのさー!!」

ギヤーギヤーうるさいコウを無理やり店の中へと引つ張っていく。

「よしつ、早速コウに似合う服を選んでいこう。俺的にはカジユアル系の格好も似あうと思うんだよね。コウって結構背も高いし、足も長いだろ。それこそショートパンツとか似合うんじゃないか？」

「うーん、タケルにしてはいいセンスしてると思うけど、コウちゃんにはやっぱりスカートとかワンピースが似合うわよ。コウちゃんって、ちゃんとすればすごくお嬢様っぽいから」

「うぐぐ……確かにコウのワンピース姿は捨てがたいかも」

「わ、私はいつも通りの格好でいい——」

『それはダメだ（よ）』

「だから、息びったりすぎるって!!」

その後は主にりんが主導となつて服を見繕つていく。俺も横でるんっ！　ときた洋服に関しては進言しているものの、りんのセンスには敵いそうもない。

まあ素材がいいからなに着させても似合うと思うんだけどね。そんな感じで服を選んでいき、コウに服を手渡した。

「こ、こんなに着るの……?」

「もちろんよ。むしろこれだけじゃ足りないくらいなんだから!」

「うへえ……」

コウは露骨に嫌そうな表情を浮かべるも、渋々更衣室の中へと入って行く。そして着がえを終えて出てきたコウは……ただの天使だった。

「……………」

彼女が着ていたのは、普段なら絶対に聞かないであろう花柄のワンピースだった。その上に白っぽいカーディガンを合わせている。

「……………似合っていないでしょ？」

頬を赤く染め、そつぽを向くコウ。一方、

『…………ふっ』

俺とりんは口から血を吹き出していた。その表情と言葉は反則だよ。血を拭きとつた後、俺とりんは同時に口を開く。

『可愛いつ！』

「っ!？」

コウの顔がより一層赤く染まる。なに着せてもとは思ったけど、やつぱり可愛かった。丈も膝より少し上くらいなため、彼女の白くてすらつとした足が惜しげもなく披露されている。

「やつぱり私の見立てに間違いはなかったわね。コウちゃんのいいところが余すところなく表現されてるわ」

「くっ、似合うとは思ってたけどどここまでとは……………さすがりんだよ」

「うふふ、褒めたところで何もでないわよ？」

「二人とも、私を放置しないで!!」

そのままコウの着せ替えショーは続いていき、結局2着分を購入することになった。もちろん俺とりんのお金で。

「うう……酷い目にあつたよ」

「俺は凄く楽しかったけどな」

「私は楽しくない！ こうなったら、タケルのも選ぶ！」

「えっ？ 俺の？」

「そう！ タケルだって私と同じように毎日似たような服しか着てこないでしょ？ だからだよ！」

恐らくコウとしては先ほどのお返しをしたいのだろう。しかし、りんが俺の服をコウと一緒にはいえ選ぶとは思えない。そう思っていたのだけど、

「まあコウちゃんの言う通り、いい機会かもね。今日は時間もあるし、行ってもいいわよ」

「よしっ、決定！ そうと決まれば次はメンズのお店にレッツゴー！」

反論する暇もなかった。コウの時ほど乗り気ではないとはいえ、りんが行ってもいいというなんて……。

今度は俺が引きずられるような形で引つ張られていく。そしてこれまたテレビでやっていて、男性用の服なら基本的に何でもそろっているお店に到着した。

「取り敢えずタケルは店内を適当にぶらついて。私は服を選んでくるから」

それだけ伝えるとコウはぴゅーと駆けて行ってしまふ。

「もうっ！ コウちゃんつてば、あんまり急ぐと転ぶわよ」

横のりんが呆れ顔で呟いている。その姿はさながらお母さんだ。

「……何か失礼なこと考えてるでしょ？」

「……別に」

考えを読まれたのか、半眼で睨まれる。何度も言うけど、りんの傍ではおちおち考え事もできない。

「まあいいわ。それじゃあ私も探してくるから」

「えっ！ 本当に服を選ぶつもりなのか？ てつきり冗談だと思つてただけだ」

「コウちゃんだけ選んで私が選ばないのも変でしょ？ だから仕方なくよ、仕方なく」

そういつてりんも服を選びに店内へと歩いて行ってしまった。

「……もうどうにでもなれ」

コウを着せ替え人形にしたことは事実なので、俺も同じ扱いを甘んじて受け入れよう。

そんなわけで俺も店内をぶらぶらし始める。普段はネットでしか服を買わないので、こうして実物が並んでいる姿を見るのは久しぶりだ。……つて、働いたら負けTシャツ

まで売ってるのかよ。何でも売ってるんだなこのお店。

「あつ、タケルいた！」

「コウ、選び終わったのか？」

「うんっ！ それじゃあ早速着てみてよ」

「分かった分かった」

コウから服を受け取り俺は更衣室へ。

（さて、コウはどんな服を……っこの服）

取り敢えず選んでもらった服を着て更衣室のカーテンを開ける。

「オイコラ、なんてものを持ってきたんだよ」

「あははっ！ タケルつてば、めっちゃ似合ってる」

俺が着ていたのは、先ほど目にした働いたら負けTシャツだった。コウは俺を見て大笑している。

「心配しないでタケル。それはコピー品じゃなくてちゃんとしたところから出されてる物みたいだから」

「ああ、それなら安心……っつて、違う違う。そういう問題じゃない！」

「他にも同じようなTシャツを入れといたからね！」

「そうなの？ ありがとう……じゃなくて!!」

「あははっ!! ナイスツッコミだよタケル!」

どうやらからかわれていただけらしい。目に涙まで浮かべるコウをジト目で見つめる。

「ごめんってタケル。それに普通の服もちゃんと入れといたからさ!」

「最初からそつちを着ればよかった」

面白Tシャツを除いて、コウの選んでくれた服はなかなかいいものだった。自分の線に触れたもの一つだけ選び、それ以外は元の場所に戻す。

「さて、残るはりんか……」

「タケル。選んだから来てみて頂戴」

「ああ、分かった……って、面白Tシャツのくだりはコウで既にやったから」

「あらそう?」

「言わなければりんもやるつもりだったのか……。今回は水際で止めれたからよかったけど。」

なんて思いながらりんの選んでくれた服を手に、もう一度試着室へ。そして選んでもらった服を着てから試着室から出る。

「どうでしょうか?」

「なんかタケルっぽくないね」

「それって褒め言葉？」

「もちろん、いい意味でタケルっぽくないって意味！」

りんを選んでもらった服はコウに好評みたいだ。

「……うーん、まあこんな所かしら？ 普段のTシャツ、ジーンズ姿よりはましだと思うわよ」

一方りんは顎に手を当ててふむふむと頷いている。褒めてるのか貶しているのかよく分からない。恐らく後者だとは思うけど。

「タケルって素材は悪くないんだから、もっとお洒落に気を使ったらどう？」

「それは盛大なブーメランだぞ」

そんなこんなで俺の服を買った後はりんの服も購入し、ちようどいい時間になったため、俺たちはそろそろ帰ることに。

「じゃあね、二人とも！ また会社で〜」

待ち合わせた場所から手を振りながら帰っていくコウを見送り、俺とりんは行きと同様に同じ電車へと乗り込む。

電車の中で適当に会話を交わし、最寄駅で降りた俺たちはマンションまでの道のりを

歩いていく。

その途中、

「あつ、俺はコンビニで晩ご飯を買ってくから、りんは先に帰ってくれて大丈夫だぞ」
家の冷蔵庫に何も入っていないなかつたことを思い出し、マンションの近くにあるコンビニ
に寄ろうとする。

しかし、コンビニに行くと言った俺を見て、りんの目がスツと細められた。

「な、なんだよ？」

「タケル、まさかとは思うけどこの一週間ずっとコンビニだったりするの？」

「男の一人暮らしなんだし、それが普通だろ？　むしろ自炊するときの方が珍しいよ。

妹が来た時くらいしかまともにキッチン使わないし」

「はあ……ねえ、流石にお米とインスタントの味噌汁くらい家にあるわよね？」

「それくらいはあるけど、どうかしたのか？」

「なら問題ないわね。じゃあ行くわよ」

「えっ？　ちよ、おいっ！」

どういいうわけかりんが俺の右腕をがっちりと掴み、スタスタとマンションへ歩き始める。
る。

「りん！　コンビニは……」

「いいから!」

有無を言わさない口調に、俺は渋々彼女の後についていく。そしてマンションの自室前についたところで「ちよつと待ってて」と言われ、訳が分からないままその場に立ち尽くす。

(一体何だつていうんだよ?)

若干イライラしつつりんを待っていると、数分ほどで彼女は家から出てきた。そして、

「……はい、これ」

タッパーのようなものを俺に差し出してきた。なんじゃこれ? と俺が首を傾げているとりんが少し赤い顔のまま続ける。

「……たまたま作り過ぎてたサラダと肉じゃが。お米は自分で炊いて食べなさい」

どうやら、俺に肉じゃがとサラダをおすそ分けしてくれるらしい。ただ、頭の理解が全く追いついていなかった。

「へっ? も、もしかしてくれるのか?」

「あげなきやこうして持つてきてないわよ。……それで、いるのいらなの?」

顔をそっほに向けながらもタッパーを持つ手はそのまま。むしろ、グイグイ押し付けてくる。

「あつ、も、貰います貰います」

慌ててタッパーを受け取ると、りんの表情が少しだけやわらかくなる。

「全く……はじめから素直に受け取りなさいよね」

そう言ってるりは俺の胸を人差し指でとんつ、と優しく押す。

「この前も言ったけど、健康には十分気をつけなさい。身体は大事な資産なんだからね？ それにタケルがいなくなると……みんな困るんだから。もちろん、私も」

不覚にもその言葉に、仕草に、俺の顔が熱をもった。

「お、おう……これからは気を付ける」

「……じゃ、私はこれで。今日はお疲れ様」

それだけ告げるとりんはそそくさと部屋の中へ戻っていった。

ただ、部屋に戻る前に見えたりんの耳は真っ赤に染まっていたため、多分恥ずかしくなったのだろう。

彼女が戻っていった部屋の扉を少しだけ見つけてから俺も自分の部屋へと帰る。それから米を炊き、りんからもらった肉じゃがを温めて食べてたのだが、

「……めっちゃうまいな」

思わず眩いてしまうほど、りんの料理は美味しかった。

同期の一人はやっぱりお母さん

ジリリッ!!

「うーん……?」

朝、けたたましい目覚ましの音に、コウは夢の中から引つ張り出された。今日は午前中に会議がある。しかし、頭の中は夢と現実の間をうろろう。

寝ぼけ眼のまま目覚ましへと手を伸ばし、うるさいと言わんばかりに目覚ましの動きを止める。

「あと五分……」

もう一度夢の世界へと旅立とうとするコウ。しかし、そんな事は彼女のお母さん? が許さなかった。

ブーブーブー

「……………」

目覚ましを止めたと思ったら、今度は携帯電話が枕元で鳴りはじめ。こっちは動きを止めたところで何度もかかってくるし、電源を切ったら会社で何を言われるか分からない。

仕方なく、コウは寝ぼけ眼を擦りながら電話に出る。

「おはよう。……ちようど今起きたところ」

電話越しで『今起きたの?』と苦言が聞こえてくるのもいつも通り。そのままりんと短い会話終え、シャワーを浴び終えてもう一度携帯を確認すると、今度はもう一人の同期からメールが届いていた。

『今日は会議があるけど起きてるか?』

「……二人は私の両親かよ」

口ではそう言いつつ、コウの口元はにやけていた。なんだかんだ心配されているのが嬉しいのである。

メールを返した後はいつも通りパンとコーヒーで朝食を済ませ、

「よしっ……もうちよつと寝ちやお」

ソファのクッションに顔を埋め、三度夢の世界へと旅立とうとする。しかしそうは問屋が卸さない。

ブーブーブー

「……………」

まるでコウの行動を見ていたかのようになりだすスマホ。コウはズボンに手を伸ばしつつ、スマホの画面をスライドさせる。

「……………はいはい寝てないよ。会議でしょ？ 覚えてるって。だいたい、何で午前中にやるかな〜」

お母さん？ からの電話にぶつぶつ文句を言いながら答える。そして電話を切り、家を出ようとしたまさにそのタイミングで再びメールが届いた。

『まさかと思うがもう一回寝ようとしてないよな？』

「……………ふふっ、してないって」

心配性な同期二人に思わず笑みがこぼれる。今日の朝はいつもより少しだけ気分のよいコウだった。

☆ ★ ☆

「あ、暑い……………」

改札を出て開口一番、俺はじりじりと照り付ける太陽を見ながら恨みがましい声を上げる。

今年は空梅雨で、あつという間に夏がやってきた感じだ。そして何を隠そうインドアの俺は夏が苦手だ。汗がべたべたして気持ち悪いし、食欲はなくなるし……。夏なんて来なければいいのにと毎年思っている。

「あつ！ おはようございます、タケルさん！」

そんな中、後方から名前を呼ぶ声に振り向くと、自転車に乗ったはじめが横にきた。ノースリーブのシャツを着ており、夏らしい格好となっている。

「おう、おはよう」

「うわあ、朝からなんて顔してるんですか？」

「暑いからに決まってるだろ……」

「そういえばタケルさん、夏は毎年死にかけたゾンビみたいな顔してますもんね！」

「いやいや、流石にそんな顔は……してるか」

「自覚あるのなら何とかしてくださいよ……」

はじめは呆れているが、俺だつて好きでゾンビのような顔になっているわけではない。これも全て夏が暑いからいけないのだ。

夏がもつと涼しかったら……我ながら無茶苦茶なことを言っている自覚があります。

「それよりはじめは平気そうだな」

「はいっ！ 私、夏は好きですから！」

にっこりと微笑むはじめ。まあ、はじめは見るからに夏が好きそうだからな。髪も短いし、スポーツも好きらしいから納得できる。イーグルジャンプ内で彼女ほど滴る汗が似合う女の子はいないだろう。

ただし、いかんせん肌色の面積が多いため、男としては目のやりどころに困る。せめて肩くらいは隠してください。そのまま二人話しながら駐輪場まで向かう。

「わっ！」

はじめの後ろからペットボトルがゆつと出てきて、そのまま彼女のほっぺたにびとっ、とくつつく。

「冷たっ!？」

結構冷たかったらしく、はじめは驚きの声をあげる。何事かと振り向くと、大成功とといった表情を浮かべる涼風さんと目が合った。どうやら彼女の仕業らしい。

「おはようございます、タケルさんにはじめさん！ 冷たかったですか？」

「おはよう涼風さん」

「お、おはよう青葉ちゃん。そのペットボトル、凍らせたの？」

「はいっ！ 最近暑くなってきたので。ところではじめさんは自転車通勤なんですか

「？」

はじめの自転車を見て涼風さんが首を傾げる。

「うん、そうだよ。家はここから5駅くらいの距離なんだけどね」

「ええ!?! 私だったら電車にする距離ですよ」

俺も全く同じ感想をはじめに言った気がする。だって、5駅ってなかなかの距離だからね。体力のない俺なら、途中で休憩を要するほどの距離だ。

「でもこの仕事は座りっぱなしだし、少しは運動しないとその学生服が着られなくなっちゃうよ?」

「スーツですよ!!」

顔を真っ赤にして涼風さんが叫ぶ。

「まっ、運動不足はタケルさんにも言えますけどね」

「それは言わないでくれ……」

余計なことを言ったはじめにげんなりする俺。最近、ジムに通おうか真面目に迷ってるんだから。それからは最近太ったとか、自転車がと話しているうちに、いつものオフィスに到着する。

「はあ、会社は涼しい〜」

「確かに……けど、少しだけ寒いな」

「ですよね。上着着てくればよかったです」

会社に入って涼しいと一息つく涼風さんとは対照的に、俺とはじめはぶるつと身体を震わせる。

「はじめさんはその格好だと寒いですよね。興梠さんですか?」

「暑いのが苦手なくせに冷え性なんだよ。だから夏のオフィスでは長袖が欠かせないんだ」

そう言いつつ鞆の中から長袖のシャツを取り出す。家でもクーラー付けながら長袖長ズボンだし、寝るときは絶対にクーラーを消してるからな。

「おはようさん、はじめに青葉ちゃん。タケルさんもおはようございます」

既に出社していたゆんは長袖を着ている。

「おはようございます、ゆんさん! あつ、ゆんさんはまだ長袖なんですわね!」

「へ? そ、そそそ、そうや! うちはまだ大丈夫やし!」

「?」

長袖を指摘され慌てるゆん。それを見た涼風さんは不思議そうに首を傾げている。

「確かにまだ長袖なんだな。ゆんって冷え性だったっけ?」

「い、いや、ままま、まあそんなところですよ!」

「へえ、そうだったんだ。お互い大変だな」

「あはは……そうですね」

「だけど、去年まで冷え性なんていつてたっけ？」

「冷え性なんや!!」

「あつ、はい……」

ゆんの圧力にはじめが口を噤む。まあ、彼女にも何らかの事情があるんだろう。これ以上の追及は野暮つてもんだ。

「それにしてもはじめさん。隣駅から歩くだけで痩せますかね？」

「な、なんや、ダイエツトの話？」

「そうなんですよ。腕の肉がぶよぶよしちゃって」

ぶよぶよと言った瞬間、ゆんが「うぐっ!？」とうめき声をあげる。今のリアクションでゆんがなぜ長袖を着ていたのか、何となく理解できた。

しかし、その事を俺が言うのとセクハラになりかねないので黙っておく。だけど見た感じ、涼風さんもゆんも別に太ってないけどな。むしろ痩せすぎなまである。

「まつ、二人ともダイエツトをするならほどほどにな。無理なダイエツトは体に負担が大きいから」

「そうですね。私もほどほどにしておきます」

「う、うちはダイエツトなんて必要ないですからね！」

必死なゆんはおいといて、俺は自分の席へ。そして改めて長袖のシャツを羽織る。

「タケルは今日もいつも通りの長袖だね」

既に出社していたコウから声がかかる。ちなみに彼女の格好はいつも通り。

「もつとクーラーの温度をあげていいんなら長袖も着ないんだけどな。でも上げるのは嫌だろ?」

「あんまり上げると、液晶の熱で大変なことになつちゃうからね。それに私は冷え性でもないし」

「羨ましい限りだよ」

そこで会話を切り上げ、俺も今日の仕事に取り掛かる。最初のうちは順調に仕事を進めていたのだが、しばらくすると、

(なんかさつきより暑くなってる様な……)

いつもなら長袖を着て丁度いい位なのに、今は長袖がいらなくらいの室温になっている。誰かが温度をあげたのかな?

いずれにせよ、このまま長袖を着ていると汗でベトベトになってしまったため、俺は羽織っていた上着を脱ぎ、椅子の背もたれ部分にかける。

よしっ、これで仕事に集中できる……と思っただけだな。

(……あれ、また寒くなってきた)

今度は上着を羽織らないといけないくらい室温になってきた。

どうしてこうも室温が変わるんだろう、と首を傾げながらシャツを羽織る。しかし、(ま、また暑くなってきた……)

俺だけなのかと疑問に思い、りんへと視線を移すと彼女も怪訝そうな表情を浮かべていた。どうやら異変を感じているのは俺だけじゃないらしい。

「なあ、さつきからクーラーおかしくないか？」

上着を脱ぎつつりんに見せる。

「タケルも気付いてた？ うーん、故障かしら？」

「だけど、空調は最近点検したばかりだろ？」

「そうなのよね。だから故障はありえないとおもうんだけど……」

二人して首を傾げていると、再び室温が下がり始めた。これは絶対におかしい。そう思っコウの席に視線を移すと、彼女の席はもぬけの殻だった。

「……温度を下げてるのってコウじゃね？ 席にもいないし、さつき液晶の熱がとか言ってたし」

「確かにそうかもしれないわね。コウちゃん、暑いのがあんまり好きじゃないから」

「となると、誰か温度をあげてるやつがいるってわけか」

「ちよつと見に行ってみましようか」

俺たちは席を立つと、空調のボタンが見える場所まで移動する。するとそこでは、

「ま、まさか、さつきから温度上げてたのってゆん？」

「や、八神さん!!? ちゃ、ちやいますよ!」

「でも、今だつて結構高めにあげてなかつた？」

揉めるコウとゆんの姿があつた。ぶつちやけ温度をあげてるのははじめだと思つていたため、ちよつと驚いている。

「こ、これは、えつと、その……」

コウの質問に、ゆんは顔を真っ赤にして冷や汗まで流している。寒いから温度をあげているんじゃないのか？

「温度をあげてたのがゆんちゃんだったなんて……取り敢えずこれ以上温度を上げ下げされたらかなわないから注意してくるわね」

そう言つてりんが動き出すほんの少し前に、『待つてください!』という声と共にはじめが二人の間に入ってきた。思わぬ乱入にりんが二の足を踏む。

「さつきまで温度をあげてたのは私ですよ」

『はじめ!!』

そんな中、ドヤ顔で自分が温度をあげていた犯人であると自白するはじめ。あんな間抜けな犯人見たことない。一体何を言い始めるんだあいつは……。

「ふふつ、八神さんこれではつきりしたじやないですか」

「何がはつきりしたんだよ？」

「ゆんも高温を求めているということですよ。つまり、2対1でこの会社の温度は高温に決定なんです！」

はじめが無茶苦茶な理論を展開させる。隣のりんはこめかみをびくびくさせていた。噴火する一歩手前である。

「どうかしたんですか？」「タケル君。どうか……したの？」

騒いでいる声が聞こえてきたのか、涼風さんとひふみがこちらにやってきた。

俺が事情を説明すると「なるほど。だから温度が上がったり下がったりしてたんですね！」と納得した様子だった。

「三人でこの会社の温度を決めるっておかしいでしょ？」

「じゃあ、八神さんが勝手に決めるのもおかしいじやないですか！」

「ふ、二人ともうちはただ……」

説明している間もコウとはじめは言い争いをやめない。そんな二人の間でゆんがよろおろとしている。

これはそろそろ止めないと。そう思っていたら、

「いらっしゃい！」

りんが三人の元で怒りの表情を浮かべていた。

「さつきから上げたり下げたりしてたのはあなた達だったのね！」

やっぱり美人は怒ると迫力あるなあど呑気なことを考える。まあ、俺は怒られてないし蚊帳の外だしね。

「だって液タブが……」

「上着が……」

「……………」

視線を逸らしつつ子供のようない訳をするコウとはじめ。一方、何を言っても無駄だと悟ったのかゆんは黙って俯いている。

しかし、その表情が心なしかホツとしているのは気のせいだろうか？

「譲り合って仲良くできないの？ それができないなら、今後あなた達には空調を調整するのを禁止します」

『は、はい…………』

りんは怒られコウとはじめはシユンと肩を落とす。ゆんはやっぱりホツとしているようだった。何でだろう？

「遠山さんってビシツとしてカツコイイですね！ 憧れちゃいます」
「……そこ？」

涼風さんに珍しくひふみがツツコミを入れていた。

「やっぱり、りんはお母さんみたいだな。迫力といい、叱り方といい」
「それは……少しだけ、分かるかも」

俺の眩きには納得してくれたみたいだった。

「タケル、あなたも怒りたいの？」

「……………」

どうして聞こえてるんですかねえ。

人とは変わることによって成長していくものである

「はあ、休日出勤するのはやっぱりなれないな……」

とある土曜日。俺は大きく伸びをしながら、イーグルジャンプまでの道のりをのろのろと歩いていった。

以前休日出勤はもつてのほかとか言ってた気がするのだが、ちよつと進めたい仕事があつたので今回土曜日であるにも関わらず、出勤しているというわけである。

まあその代わりに今週はほとんど残業せずに帰っていたので、休日出勤できるくらいの体力は残っていた。

「ふう、やっと着いた」

社員証をかざしてオフィス内に入る。すると、

「キャラクターデザイナー、青葉」

コウの席で涼風さんが得意げな笑顔を浮かべていた。その一部始終を見ていたらしいひふみが驚きのあまり鞆を落とし、涼風さんが「ぎゃー!!」と悲鳴を上げる。

もしかすると、彼女は仕事のし過ぎで疲れているのかもしれない。

「いや、あのちよつとした出来心というか何というか。八神さんの気持ちを味わってみたかっただけですの!」

顔を真っ赤にして慌てる涼風さん。そんな彼女を見て俺はホツとする。

どうやらコウに憧れての行動だったらしい。頭がおかしくなったわけではないみたいなので安心した。

「あ……青葉ちゃん。えつと……ね」

「?」

ひふみが顔を真っ赤にしながら何かを伝えようとしている。

「……ふぁいと」

胸の前で控えめに拳を握るひふみ。恐らく、キャラクターデザイナーになることを応援しているのだろう。それにしても、ひふみの「ふぁいと」は控えめに言っても可愛い。

「あ、ありがとうございますっ!」

ただし、涼風さんにはうまく伝わっていない模様。

「おはよう二人とも」

いつまでも二人の事を見ていたら覗きと勘違いされかねないので、見ていない体を装って二人に声をかける。

「あつ、興梠さん！ おはようございます」

「お、おはよう……タケル君」

「二人揃ってコウの席で何やってんだ？」

「へえっ!? い、いや、ベベベ別に、何もしてませんよ！ キャラクターデザイナーの気分なんて味わってませんからね!」

うーん、その言い方はほぼ答えなんだよなあ。慌てる涼風さんに思わず笑みがこぼれる。

「ど、どうして笑うんですか!」

「いや、涼風さんは素直で良い子だなんて。ひふみもそう思うだろう?」

「う、うん……青葉ちゃんは、素直で可愛いよ……」

「もー!!」

ひふみにもからかわれて顔を真っ赤にする涼風さん。さて、いじるのはこの辺りまでにしよう。これ以上は後輩からの信頼を失いかけないし。

「……それにしても、今日は珍しくコウはいないんだな」

コウの机に視線を移す。今日も泊まってるもんだと思っただけで、ちよつと意

外だった。もう自分の家より会社で寝泊まりしてる方が多いと思ってたし。

「確かにそうですね。……というか、八神さんの机ついても散らかってますよね」

涼風さんの言う通り、コウの机には飲み終えた缶やらキャラデザの紙やら色々なものが散乱している。

「コウは片付けるの苦手だからな。流石にゴミとかは捨ててるけど」

「だ、だいたい……りんちゃんも、片付けてるよ……」

彼女の言う通り、あまりに汚くなってくるとりんが「全く、普段から片付けないとだめでしょ?」と言いながら片付けていた。完全にコウの保護者と化している。

ちなみに俺の机が散らかっていると、「机が汚いわよ」と冷たい視線を向けられる。もちろん片付けてくれない。

「遠山さんって八神さんのお母さんみたいですね」

「あながち間違ってるよ。でも、その事を本人に言うのと怒られるから注意な」

前回の空調騒ぎの時に怒られたし……。まあ、怒られるのは俺だけで涼風さんの場合は苦笑いで終わるかも。

以前はじめが、『遠山さんってたまに八神さんのお母さんみたいですよね!』って言った時は複雑な表情を浮かべてただけだったからな。

「そういえば前から気になってたんですけど、この紙って……?」

涼風さんがチラチラと、コウの席に置いてあった大量の紙束に視線を向ける。俺も詳しくは知らないけど、多分だけコウが描いたキャラデザの紙だろう。

そこでひふみが両手で目を覆う。

「……み、見てないから」

「いや、そんな風に言わなくても、別に涼風さんは悪いことをするわけじゃないから。

……しないよね？ 破つたりしないよね？」

「しませんよ!! ただ、その紙を少し見てみたくて」

「ああ、見るくらいなら大丈夫だと思っぞ」

「ですよね！ じゃ、じゃあ少しだけ……」

ぺらぺらと紙をめくっていく涼風さん。その表情は真剣そのものだ。

「うわっ、これ全部キャラデザの絵なんだ」

コウの描いたキャラデザの絵を見て、涼風さんが感嘆の声を上げる。確かにこれだけキャラデザの絵があれば驚くのも無理はないだろう。

「……微妙な違いだけど、八神さんも結構ボツ出してるんですね」

「コウちゃん……、頭抱えていること、多いよ」

「へえ……八神さんって没を出すイメージがなかったのちよつと意外です」

「コウも人間だつてことだよ」

涼風さんの言葉に俺は苦笑いで答える。

コウは様々な媒体で天才と称されているが、彼女だつてもちろん人間。没だつて出す。ただ、没のレベルも非常に高く、俺なら採用してしまふようなキャラデザもある。要するに八神コウは天才がゆえにストイックで、ストイックに努力できるからこそ天才なのだ。

「遠山さんの机は綺麗ですね……あつ」

りんの席に飾られていた写真立てを見て涼風さんが声を上げる。

そこには、若かりし頃のコウとりんが一緒になつて写つていた。フェアリーズストーリーが発売された当時の写真だろう。

しばらく眺めていた涼風さんだったが、とあることに気付く。

「……あれ、でも興梠さんが写っていないような？」

「二応一緒に写ってるんだけど、だいぶ端の方についてみきれてるんだよ」

まあ、りんの事だからもし写つていたとしたら消去したと思うけど。それこそ極秘文書の如く黒塗りで。

「それに、昔はコウやりんと仲良くなかつたからな」

「えっ!? 遠山さんはともかく、八神さんともですか?」

「コウちゃん……、無口だったから」

「あつ、確かに八神さんの雰囲気は違いますもんね」

「コウの雰囲気もそうだけど、俺の性格にも問題があつたしな」

本当に一年目の俺には目も当てられない。この美術部には問題があるくらい問題があつたからな。

今思い出しても頭を引っ叩きたくなる程である。その場を転げまわりたいくらい恥ずかしい。

「なんか興柊さんの性格に問題があるつても意外ですね。ずっとこの感じだと思つてたんですけど」

「あの時の俺はまだまだ若かつたつてことだよ」

「どんな感じだつたんですか？」

「それは黒歴史だから勘弁してくれ」

「むう……ひふみ先輩は知ってますか？」

「……多分、私が入社する前の話。私が入社したときはもう、今のタケル君だつたから。……それに、聞いても教えてくれないし」

むすつ、とした顔を俺に向けてくるひふみ。正直、その表情が可愛すぎてぼろつと口に出しそうになつたのは内緒。あざとすぎませんかねえ。

当時の俺を知ってるのはコウとりん。それに葉月さんだけだしな。コウとりんは聞

かれても言わないだろうし、葉月さんには「絶対に言わないで下さい」とくぎを刺してあるから大丈夫……だと思おう。

未だに過去のネタでいじってくるのはやめてほしい限りだけど。

「それにしても八神さんが無口だったなんて、あんまり想像できませんね」

「今のコウを見てればそう思うだろうな」

「私も、席が隣の頃があっただけど、話しかけて……こないから、いい人だな……と
思ってたのに……。ある日突然……」

当時のひふみは、いきなり話しかけられてビクツとしたことを思い出す。まあコウも部下を持つようになって、いつまでも無口なままでいられなくなっただけからな。

「な、なんか私もよく話しかけちゃってごめんなさい……。でも最初の頃に比べるとひふみ先輩も喋ってくれるようになりましたね!」

「え? あ、青葉ちゃんは……ちよつとだけ、話しやすい……から」
「へっ!! な、なんだか照れちゃいますね……」

顔を赤くして頬をかく涼風さん。ひふみが話しやすいということとは、よつぽど涼風さんはコミュニケーション能力に優れているのだろう。

「だけど、それは興柊先輩にも言えるんじゃないですか? ほらっ、ひふみ先輩は興柊先輩とは笑顔で話してますし」

「っ!? え、笑顔で……話してた!」

「はいっ! 私もあんな笑顔でひふみ先輩に話してほしいです!」

「ええっ!? そ、それは、ちよつと……うう……」

涼風さんは笑って話してるけど、どういうわけはひふみの顔は真っ赤に染まってる。今、涼風さんはひふみの事を褒めてるはずだよな?

「青葉ちゃん、その時の笑顔……、忘れて」

「お金っ!」

諭吉さんを財布から取り出して、涼風さんに手渡すひふみ。笑顔を見られていたのがよっぽど恥ずかしかったらしい。

「だ、だって……」

「さっきも言いましたけど、ひふみ先輩の笑顔をも可愛かったですよ! ねっ、興梠さん

?!」

「えっ?」

予想外の流れ弾に俺は間拔けな声をもらす。このタイミングで俺に話ふるの? 絶対に振る相手を間違えてると思うけど、俺以外に誰も来ていないので仕方がない。

「……タケル、何を言っても間違いのような気がするので答えたくない。」

「……タケル、君は……、どう……思うの?」

なぜか期待を込めた瞳を向けてくるひふみさん。やめて！ そんな目で俺を見つめないで！ 余計に答えずらくなっちゃうから。

『……………』

しかし、黙っている間にも二人からの『答え待ってます』という視線は強くなる。何時までも黙っているとその視線がより一層強くなりそうだったので、俺は頭をかきながら答える。

「そりゃ、俺だってひふみの笑顔は魅力的だと思っけど……」

流石に可愛いというのは気が引けたので、魅力的という言葉に変換しておく。

「興柊さんってば、うまく言葉を選びましたね？」

「涼風さん、俺をいじめないでくれ」

新入社員に翻弄される入社して約8年の社員がいるらしい。一方ひふみは、

「……………ふふっ、そっか。…………魅力的…………か。おかしく…………ないんだ」

俺の返事に満足してくれたようで、ニマニマと口元を緩ませていた。胸をホツとなでおろす俺。

「青葉ちゃん、ひふみちゃん、おはよう。後タケルも」

そのタイミングで同じく休日出勤のりんが声をかけてきた。毎回の事だけど、俺のついで感が酷い。

「みんな早いわね。三人で何を話してたの？」

「ちよつと昔の八神さんの事とか色々です！」

「昔のコウちゃん？」

「はいっ！ 今とはちよつと違っていて、興梠さんとひふみ先輩に言われたので」

「ああ、確かに昔は無口でギラギラしてて近づきにくい雰囲気はあったけど……それがかつこよかつたわね！」

「そ、そういうことじゃなく……」

急に惚気はじめたりんに、涼風さんが困惑の声を上げる。彼女の周りだけ花が咲いているようだ。

ひふみはいつも通りの事だと知っているので苦笑い。俺はげんなりしていた。

「昔から実力は凄くて誰よりも頑張ってたんだけど、コミユニケーションが苦手だったのは確かだね。正直だったから、思ったことをそのまま口に出しちゃって先輩ともめたことも多かったし……」

「……そうだな。コウは正直だもんな」

今でこそコウが正直に何かを言っていると理解できているのだが、その事が分からなかった新人時代は少し違った。

『その絵、没にしちゃうの？ 私がいいと思うけど』

コウは思った事を言っただけ。しかし、コウの圧倒的才能を知っていた俺には、皮肉めいた言葉に変換されて脳内に届いていた。

『あんたの絵にしてはいいと思うよ』

そう言われたみたいに。

今思えば曲解もいいところなのだが、当時の俺はそう考えてしまったのだ。ほんと、若いって恐ろしい。

「でも、そのままだと指揮する立場になれないから、コウちゃんも自分なりに頑張ってるの。まだちよつと空回りしちゃうところもあるんだけどね」

「いや、八神さんは普通に頑張ってる、すごいと思いますけど?」

「頑張ってる可愛いでしょ? ふふっ!」

「……………」

まあた惚気でしたよ、この人。そこはコウを褒めるところだろうに。ニマニマする上司

を見て涼風さんが微妙な表情を浮かべると、俺の耳元に顔を寄せてくる。

（八神さんの事になると遠山さんも空回りしてますよね？）

（それは言つてあげないでくれ涼風さん。本人も無自覚だから）

コウの事になると冷静さを失うのはどうにかしてほしい。涼風さんも困ってるから。

「でも他のみんなもそうだけど、コウちゃんと仲良くしてくれてありがとう。私も助かつてるわ」

「い、いや、私も意識して仲良くなってるわけじゃないですよ！」

「それでもよ。コウちゃんが誰かと仲良くしてる姿を見るのはやっぱり嬉しいから」

「そ、そんな事は……だけど、八神さんも結構気を遣つてくれていたんですね。じゃあ私も、八神さんに合わせて子供っぽくふるまうべきかな？」

「青葉ちゃんはそのままでいいのよ!!」

余計な気をまわそうとした涼風さんをりんが慌てて止める。やっぱり良い子だし、大人だよ涼風さんは。外見は子供っぽいけど。

「……興梠さん。今失礼なことを考えてました？」

ジトつとした目で睨まれる。俺が悪いのか、涼風さんが鋭いのか知らないけど、彼女に対しても考え事はできそうにない。どうして女性の方は、そんなに勘が鋭いんですかね。

「タケル君は……すぐに、顔に出るから……」

ひふみさん、あなたもです。

「タケルが分かりやすいのはいいとして、今のコウちゃんだって素だと思わね。明るく振る舞うのが恥ずかしくて、照れ隠しでああしてるのかもね」

「なるほど……そうだったんですね」

「確かに、コウは作画以外は不器用だし。そこが可愛いところでもあるんだけど」

「興梠さんも空回りしてますよ……」

「タケル君も……コウちゃんと同じで……、正直、だから」

「今の言葉はコウちゃんに報告ね」

「やめて下さい、お願いですから」

俺が頭を下げ、三人から笑い声が漏れたところで涼風さんが改めて口を開く。

「お話聞いていると私は今の八神さんでよかったな……って、そう思います」

「それは良かったわ」

涼風さんの言葉にりんが嬉しそうに微笑む。彼女にとっても今の言葉は自分の事のように嬉しいはずだ。

変わる前でも、変わった後でも、コウの一番の理解者であるりんだからこそ。

ガタッ

『?』

そこでひふみが勢いよく椅子を引いて立ち上がった。何事かと思ったら、顔真っ赤にして口を開く。

「わ……私も、い……めちえん、……したい、……けど」

そこまでいってひふみがガクツと肩を落とす。どうやら自信が無くなったらしい。

「わ……！ 私は今ひふみ先輩が好きですよ!」

ナイスフォローだよ涼風さん。ほんとこの子には頭が下がる。

そんな話をしているうちに就業時間となったので、俺たちは今日の仕事に取り掛かるのだった。

☆ ★ ☆

その日の夜。 出社してきたコウからとあることを言われた。

「ねえタケル。 さつき青葉から『私、応援してます!』って言われたんだけど、私ってそんなに心配されているのかな?」

「……多分涼風さんの勘違いだと思うから気にしなくて大丈夫だよ」

オタクは基本的に語りたい

「お疲れ様です。あなたが涼風さん？」

今日も今日とて企画の仕事をしていた俺の耳に珍しい声が届く。珍しいって言っても普段から顔を合わせてるし、このブースに来ることが珍しいという意味だ。

それにしても彼女が涼風さんを探してくるなんて……涼風さんが作ったキャラにエラーが出たのかもしれない。

少しだけ心配になった俺は涼風さんのブースを覗き込む。

「プログラムチームの者なのですが、あなたのNPCからエラーが出ていました」

「えっ……す、すいません」

「調べたら単純ミスばかりなのですが……それが何体もあつて困っているんです」

覗き込んだ先では厳しい表情を涼風さんに向けてうみこさんの姿があつた。

阿波根うみこ。沖縄出身で、日焼けした肌と茶髪がトレードマーク。性格は真面目で

手を抜けない性格。自分にも他人にも厳しいせいかわ、ミスをするとう厳しく指摘しまいがちである。

顔が美人なのも相まって、怒った時の迫力はりんりに匹敵するものがある。今、涼風さんに指摘している様子からその事は何となくわかるだろう。ただし、根は優しい人なので厳しく叱責した後には「厳しくし過ぎました……」と分かりやすく落ち込んでいます。それがなんか可愛い。

ちなみに阿波根というのは沖縄県特有の名字なのだが、本人はその名前を呼ばれたくないらしく『あはごん』と呼ぶとエアガンで額をうたれるので注意。

一応ひふみより後の入社（他社からの転職）であり、俺の方が先輩にあたるのだが、呼び捨てで呼ぶのはちよつと気に引けたため毎回「さん」をつけている。

「これは重要NPCですか？」

うみこさんが涼風さんのパソコンを覗き込む。その画面には、涼風さんが村人以外で初めて作った重要NPC（ソフィアちゃん）が映っていた。

「あ、はい。今完成したところで」

「……すごく可愛いですね」

「ありがとうございます！」

「でも、これもエラーが出ています。すごく困るんですけど？」

あげてから落とすパターン。うみこさんの指摘に涼風さんの表情が再び固まる。

「ここに「error」とその内容が書いてあるでしょう？」

「あつ、ほんとだ。今はじめて気づきました」

「……………」

初めて見たといった涼風さんに、うみこさんが怪訝そうな表情を浮かべる。そういえば涼風さんに「error」の事一切教えてなかったような……。コウが教えてるものだ思ってたんだけど。

「今までは誰も注意してくれなかったんですか？」

「八神さんは特に何も……………」

「ちつ、あいつ……………」

うみこさん、その表情で舌打ちなんてしないで！ 涼風さん、めっちゃ怯えてるから。

「些細なエラーが大きなエラーに繋がることもあるんですよ？」

「ご、ごめんなさい。すぐに直しますので……」

「当然です。はあ……相変わらずグラフィッカーは見た目にしか気にしないから」

ため息をつき始めたうみこさんの横で涼風さんが目に見えて落ち込んでいる。このままだと二人とも余計に落ち込みそうなので、うみこさんに声をかける。

「お疲れ、うみこさん」

「お疲れ様です、タケルさん」

「話を聞いてただけど、ごめんなうみこさん。俺たちの教育不足のせいでデバック班に迷惑をかけたみたいで」

「いえ、あなたは気にしないで下さい。悪いのは直属の上司であるコウさんですから」

「それでもだよ。涼風さんは一応俺の後輩でもあるわけだし」

「はあ……相変わらずタケルさんはコウさんに甘いですね」

「そんな事はないよ。涼風さんもごめんな」

「あつ、いえ、そんな事は……」

へこんでいる涼風さんを見て言いすぎたと気付いたのか、「こほんっ」とうみこさんが咳払いをする。

「ま、まあ、直していただければそれで構いません。これがリストです。修正できたらご連絡を」

「分かりました。えっと、うみこさんでよろしいですか？」

「はい。これからもよろしくおね——」

「あつ、アハゴンだ！」

せつかくいい感じにまとまりそうだったのに、余計な声が割り込んできた。「アハゴン」と呼ばれた瞬間、うみこさんはどこから取り出したのかエアガンを取り出し、躊躇なく引き金を引いた。

ぱんっ！

「あうっ！」

声の主であるコウが撃たれて額を押さえている。エアガンじゃなかったら即死だっただろう。

一方、状況を理解できない涼風さんと近くでいきなりエアガンを発砲されたひふみは驚いていた。

「名字で呼ぶなといつも言っているでしょう？」

「だってアハゴンって名前、見た目とあってるよ」

「あつてません!!」

「いたっ、いたっ！ ゴーグルない人撃つな」

「ちよっ!! うみこさん、連発しないで下さい。な、流れ弾が……いたっ!!」

流れ弾をくらってコウと二人、額を押さえる。どうして俺まで……。

「アハゴンさんって言う苗字なんですか？」

「阿波根と書きます。沖縄出身なので……でも涼風さんもタケルさんを見習って「うみこ」と呼んでください。いいですね？」

「は、はい……」

うみこさんからの圧力に涼風さんが冷や汗を流しながら頷く。その後、うみこさんは元のブースに帰っていったが、涼風さんはやはり落ち込んでいる。

「落ち込むなって。あれでもいい人だからアハゴン」

「はい」

さて、こっちはコウに任せて俺はうみこさんの様子でも見に行くか。想像通りならブースを出てすぐのところまで落ち込んでいるはずだし。

俺がブースを出ると案の定、「言いすぎました……」と呟くうみこさんの姿が。

「落ち込むくらいならもう少し優しく指摘してあげてくださいよ」

胸に手を当て、見るからに落ち込んでいるうみこさんに声をかける。

「……タケルさん。すいません、涼風さんを落ち込ませてしまったみたいで」

「それについてはコウもフォローしてたし、問題ないですよ。元はと言えば、涼風さんにきちんと指導してなかった俺たちが悪いんですから」

「でも、涼風さん結構怯えてましたし、絶対嫌われました……」

「いやいや、そんなことないですよ。涼風さんもうみこさんの指摘はその通りだと思っ
ているはずで——」

「……反省しているお猿さんみたいでしたね。そういえば」

「何の話ですか……」

俺のフォローを帰してください。というか、何がどうなって反省してるお猿さんの話
になつたんだよ。

「……つて、何を考えているんですか私はっ!」

「ほんとですよ」

「だけど、ほんとにお猿さんならおもちゃか餌付けをしてあげれば機嫌も直りますよね
?」

「話を聞いてください、うみこさん」

「何かないでしょうか……」

「もしもーし?」

そこでハツとうみこさんが我に返り、顔を少しだけ赤く染めてこちらを睨んできた。

「……聞きましたね?」

「いや聞きましたとかそういう問題じゃなくて、うみこさんが勝手に呟いてたんですよ」

「これはもうエアガンの餌食になってもらうほかありません」

「なんて理不尽な……」

「……冗談ですよ」

「冗談ならそのエアガンをしまつて下さい」

うみこさんの冗談は少しだけ分かりづらい。真顔で冗談言うタイプの人だからな。今のは冗談というよりは照れ隠しだと思うけど。

「まあいいや。俺、やり残してる仕事があるんでブースに戻りますね」

「分かりました。涼風さんには修正の確認ができ次第、もう一度声をかけると言っておいてください」

「了解です」

うみこさんからの伝言を伝えに戻ると、そこにはいつもの四人に混ざってなぜか葉月さんが一緒にお茶を飲んでいた。

涼風さんが「またこの人は忽然と現れるなあ……」という顔をしている。

「おや、興梠君じゃないか」

「どうして葉月さんがこんなところにいるんですか？」

「どうしてって、私がここに理由は必要かい？」

「そりゃわが社のディレクターがこんなところにいれば驚きますよ。というか、仕事はいいんですか？ またうみこさんに怒られますよ」

ちなみに仕事をしない葉月さんを連れ戻すのはうみこさんの役目である。首根っこを掴まれて連行されている姿がたまに目撃されてるからな。

「大丈夫だよ。うみこ君は怒っているように見えて、実はあまり怒ってないから」

「……俺は怒られても知りませんからね。あと、涼風さん。うみこさんが修正の確認ができたらもう一度こっちに来るって」

「あ、はい。分かりました」

涼風さんに伝言を伝えると、俺は自分の席に戻りやり残していた仕事を再開させる。そしてそろそろ就業時間も終わりという時間。

「涼風さん、お疲れ様です」

涼風さんの作成したキャラデザの修正を確認したらそういううみこさんが、再び俺たちのブースにやってきた。

「アハ……うみこさんお疲れ様です」

「早速修正していただいてありがとうございます。ばっちりです」

「ほんとですか？ よかった……」

うみこさんの言葉を聞いて安心した様子
の涼風さん。俺も席を立ってうみこさんの
元へと向かう。

「お疲れ様、うみこさん。修正作業の確認、
ありがとうございます」

「いえ。確認するだけなので大したことでは
ありませんよ。それよりもですね……」

そこでうみこさんが涼風さんの方へと向
きなおる。

「先ほどは少し言いすぎてしまったのでお詫
びを」

「へっ?」

少しだけ顔を赤くするうみこさん。どう
やらうみこさんは修正確認の報告だけで
はなく、先ほど強く言いすぎた件を謝り
にきたらしい。

涼風さんは涼風さんで「ほんとに気にし
てたんだな……」という顔をしている。

「私の宝物の一つなんです、ぜひ受け取
っていただけると嬉しいです」

「えっ!? そんな……悪いのは私ですし、
申し訳ないです!」

「いえ、数個持っているものなので気にしないで下さい」

そう言うってうみこさんが差し出したのは……なんだあれ？ 涼風さんも似たような表情で彼女の差し出したものを見つめている。もしかすると、彼女の趣味であるミリタリーやサバゲー関連のものかもしれない。

「ああ、これは散弾銃の空の薬莖です。本物なんですよこれ、すごいでしょう？ 沖縄のアメリカの兵隊さんに頂いたもので、貴重って程でもないんですが、火薬の香りも少し残っていて興奮してしまいます」

「は、はあ……」

涼風さんが怒涛のマシンガントークについていけないようで、完全に戸惑っていた。そもそも薬莖が何なのか、分かっている気がする。

まあそういう俺も、弾を打った時に出てくる殻みたいなものでしょ？ くらいの知識しかない。俺は別にミリオタでもなければ、サバゲーを趣味としてやっているわけでもないからな。涼風さんには後でウイキペディアを開いて確認してもらおう。

「うみこさん、一旦落ち着いてください。涼風さんがポカンとしてるので」

「……あつ、失礼しました。私ったら……取り敢えずどうぞ」

「い、いえ……」

渡された葉莢を涼風さんは興味深そうに眺めている。

「ちなみに、私のデスクには他にも色々あるので、興味があれば是非いらしてください。といっても本物の銃は持ってないですが」

「持ってたら犯罪ですよ」

もつともなことを涼風さんがツツコむ。日本で銃なんかを持ち歩いていたら銃刀法違反で捕まるからな。

「ともかくありがとうございます。大切にしますね。うみこさんってミリタリー好きなんですね」

涼風さんの言葉にうみこさんの瞳が僅かに輝いた……気がした。なんだろう、少しだ

けまずい予感がする。

「う、うみこさん。涼風さんは疲れていると思うので今日はこの辺で——」

「そうだ、今度サバゲーに参加しませんか？ 楽しいですよ？」

俺の制止空しく喋り出すうみこさん。

「え？ いや、私運動神経なさすぎなのでちよつと……」

「うーん、確かに体力は使いますね。銃も軽くはないですし……ならFPSゲームなんてどうでしょう？」

どうやら涼風さんはうみこさんに気に入られてしまったらしい。

俺は退散しようかな……そう思い離脱しようとしたんだけど、ズボンの端を涼風さんに掴まれていることに気付く。視線を向けると、

(こ、興梠さんがいなくなったら困ります!!)

目だけでそう、訴えられた気がした。俺は仕方なくこの場に残ることを決意する。

「え、FPSゲームというのは……」

「一人称視点の銃撃戦ゲームと考えてください」

うみこさん、めっちゃグイグイ来るな……。ちなみに俺の頭の中では『FPSは遊びじゃないんだよ!』と叫ぶ干物妹が浮かんでいます。

「FPSって、ゲームがものすごくうまくないといけないんじゃないんじや?」

「いやいや、重要なのは操作よりも立ち位置なので慣れなんです。対人相手の1キルの快感を知ってしまうともうたまりませんよ。それに対人が嫌ならCO-OPと呼ばれる協力プレイなんかもあります。うまく連携できた時が気持ちいいんです。とはいえ最初はどうまい人のプレイを後ろから見習うのが基本ですが——」

「うみこさん、うみこさん! もう結構ですから。お腹一杯ですから!」

目の前で意気揚々と話すうみこさんに俺はとあることを思い出していた。

うみこさんと出会ったばかりの頃、彼女の机を見て『銃とかおいてありますけど、こ

『ういうのが好きなんですか?』と言ったことがある。そう聞いた瞬間、今みたいなことになった。

あの時に、もうこんなことにならないようにと誓ったはずなのにこの有様である。俺はまた同じような過ちを……。

その後うみこさんの話は、初心者でも始められるサバゲー談義、上級者向けのサバゲー談義、バカでもわかるミリタリー談義と続いた。

もちろん、涼風さんはうみこさんが話に夢中になっている間に帰らせました。

バイトの取り扱いは意外と大変

「あ、もしもしあおうちー？ 夏休み遊びにいこーよー」

『……………』

「凄いんだよ大学。夏休みが二か月もあるんだってー。いいでしょー」

『……………こつち、夏休みないみたい……………』

「あ、ごめん……………」

『開発終盤で忙しくてさ、夏休みがゲームが完成した後に貰えるんだって。……………あつごめん。昼休み終わっちゃう。またね』

「……………あおうち、大丈夫なのかな？」

☆ ★ ☆

さて、世間では大学生が夏休みだぜひゃっほー！ とか言ってる季節に突入しているわけだが、我がイーグルジャンプにそんな暇はなく、開発終盤ということも相まって目

まぐるしい日々が続いていた。

ちなみに先日、健康診断が行われたのだが特に異常は見当たらなかった。

しかし、その健康診断を担当した看護師が新人だったらしく、どうにもおぼつかない手つきで採血されたもんだから、ものすごく冷や冷やしたのは内緒。

あと、りんが「血を見て気分が悪くなったコウちゃんを膝枕してあげたのよ！ いいでしょ？」と言つてドヤ顔されたのが腹立ちました。

男が女と一緒に健康診断できるわけないだろういい加減にしろ。……めっちゃ羨ましかったです。

そんな事はどうでもいいとして、うみこさんが何やら書類を見ていることに気付く。

「うみこさん、何見てるんですか？」

「ああ、これですか？ 明日からデバッグのバイトが来るので、その確認をしまして」

「そう言えばもうそんな季節でしたね。どうです、良い子はいましたか？」

「まだ作業をしていないので何とも言えませんが、きつと大丈夫ですよ」

「優秀な子がいたら、その場で採用できるなら採用しちゃいたいくらいですよ。ただでさえ近年は人手不足が深刻ですから」

「まあ、その辺は葉月さんが何とかしてくれると思いますよ。あんなんでも、人を見る目

だけは確かですから」

酷い言われようである。まあ、普段から仕様変更などでうみこさんに迷惑をかけているわけだから仕方がない。

ただ、人を見る目が確かなのは納得するしかない。現にコウといい、涼風さんといい、目の前にいるうみこさんといい、優秀な人たちがイーグルジャンプには多いわけだしな。

というわけで次の日。先ほどからちらほらとバイトの子たちが入ってくるのを横目に、俺は仕事を進めていた。

多少なりとも気にはなるけど、今は気にしているほどの余裕もない。それに、アルバイトの相手はうみこさんがうまくやってくれるだろう。

既にバイト開始の時間になっているため、今頃うみこさんが会社の事や仕事の内容を説明しているはずだ。

「ポンポンポンつなご」

なんていう、うみこさんの叱責が聞こえてきた。それにしてもびようんぴよんって……今って仕事内容とかの説明中だよね？　もしかしてこっちの事が気になった一人がピョンピョンはねてたとか？

いや、流石にバイト初日にそれはないだろう。それよりも、自分の仕事に集中だ。

「そうそう、この辺のバランスが悪いから……」

「はい」

コウの席では涼風さんがアドバイスを受けている。今日も真面目で感心感心――。

「っ!？」

そのタイミングで、どういうわけか涼風さんがサッとコウの椅子の陰に隠れる。えっ、どうしたの一体？　コウもびっくりした様子で涼風さんを見つめている。

「どしたの？」

「えっ？　い、いや、その……」

気まずそうな涼風さんの視線を目で追うと、

「これ、レアもの!!」

そこには目を輝かせて、はじめの机の上にあるおもちゃを覗き込む女の子の姿が……。

だ、誰だろう？ 見たことない子だし、恐らく今日からデバッグのバイトに入ってくる子なんだろうけど。

「や、八神さん、新入社員かなんか入ったんですか？」

「え？ 聞いてないけど……あつ！ りん、デバッグのバイトって今日からだっけ？」

「そうよ。うみこちゃんが担当だったかしら」

「なるほど……」

それを聞いて涼風さんが頭を抱えている。うん、あの女の子は確実に涼風さんの知り合いだ。

コウは「だからどうしたんだよ？」と言ってるから、あの子には気付いていないのだから。

そもそも、バイトの子が勝手に抜け出してきちや駄目だろ……。絶対うみこさんに怒られるって。

「桜さん、こんなところで何してるんですか？」

「っ!？」

ほら言わんこつちやない。うみこさんが半眼で桜さんと呼ばれた女の子を見つめている。

「え、いや、あの……」

一方、桜さんの方はたじたじになっていた。まあ、うみこさんに睨まれたら誰だってそうなるよね。俺だって怖いもん、今のうみこさん。

「社内を勝手にうろろと……やはりあなた企業スパイですね。ちよつと来なさい」

「あっ!？」

いやいやうみこさん、あんた急に何を言ってるんですか？ そんな小さい女の子がスパイなわけないじゃないですか。

しかし、スパイと勘違いされた桜さんは腕を掴まれ涙目だ。こりや、助けないとややこしいことになるかも。

まさにそのタイミングで、

「あおつちだすげで〜!!」

桜さんは涼風さんに助けを求めたのだった。というか、やっぱり涼風さんの知り合いだったんですね。

☆
★
☆

「……なるほど、涼風さんのお友達でしたか」

「ごめんなさい……」

「私からもごめんなさい……」

一度ブースを出て事情をきくと、やはり二人は友達同士だったらしい。今は二人揃ってしよんぼり首を垂れている。

大声を出したのはスパイだと疑われて、逮捕されるからと思ったからだそうだ。これに関してはこちらとだけ桜さんに同情した。

まあ、それにしただってバイト初日にブース内を勝手にうろうろは普通出来ないと思うけど。結構肝が据わった子なのかもしれない。それかただ単純におバカさんなのか。後者じゃないと信じたい。

「だいたい、スパイなんているわけないじゃん」

スパイかもしれないといったうみこさんに、コウがツツコミを入れる。

「そうですか？ 私も最初、スパイとして入社したんですよ？」

『うそ!?!』

「冗談です」

『……………』

コウと一緒にびつくりした俺は「はあ……」とため息をつく。

うみこさん、真顔で冗談はやめて下さい。本気でそうだったのかと勘違いしますから。

「えっと、それじゃあ私の上司を紹介しとくね。まずは今回のADの遠山さん」

「遠山りんです。よろしくね桜さん」

「よ、よろしくお願いします」

柔和な笑顔で挨拶をするりん。毎回思うけど、俺にも少しはその笑顔を見せてください。

「ADといってもアシスタントディレクターじゃなくて……」

涼風さんがドヤ顔を浮かべたところで、

「それくらい分かかってるって。アートディレクターでしょ？」

その顔が真っ赤になった。今のは恥ずかしい。多分、桜さんが間違えるとも思っただのだろう。

「えっと気を取り直して、こちらは興梧さん。企画班の人なんだけど、キャラ班の仕事を手伝ってくれたり、バグも探したり、とにかく頼りになる人だよ」

「興梧タケルです。基本的にキャラ班のブースにいることが多いから、もし何かあったらここにきてくれ」

「はい、よろしくお願いします。ところで、興梧さん以外に男の人をあまり見かけないんですけど？」

「それは言わないでくれ……」

今度、本格的に男性社員の採用を葉月さんに頼もう。あらぬ誤解を招かれても困るからな。

「最後に、こちらがキャラクターデザイナーの八神コウさん」

「えっ、八神コウ!? あのフェアリーズのキャラデザの!?!」

桜さんがコウを見てびっくりしたような声を上げる。そのまま近寄り、興奮気味にコウを見上げる。

「わー! 本物の八神コウだー!!」

「っ!?!」

コウはコウで顔を赤くして焦っていた。基本的に人見知りだから褒められると恥ずかしいのだろう。

ちなみに、その横ではうみこさんが険しい表情を浮かべていた。多分、噴火する一歩手前だ。

「桜さん」

「うみこめんなさい……」

案の定、低い声を出したうみこさんに桜さんは顔を青くして謝る。怒られるのはコウの事を呼び捨てにした時点で分かってました。

取り敢えず、彼女の取り扱いにうみこさんは苦勞しそうである。

……正直、結構いいコンビになるんじゃないかね？　と思っただけど、うみこさんに怒られそうだから黙っておこう。

「後は他にもいるんだけど……」

「いえ、他の方は後で構いません。これではいつまでたつても桜さんが仕事に取り組みませんから」

そう言えば桜さんはデバッグのバイトで来てたんだっけ。普通に溶け込んでたからすつかり忘れてたよ。

うみこさんが桜さんを連れて元のブースに戻ってから、俺たちも仕事を再開する。なんだか嵐のような時間だった。さて、遅れた分を取り戻さないと。

その後は集中して仕事に取り組み、あつという間にお昼休みとなった。大きく伸びをしていると、涼風さんが桜さんにひふみやはじめ、ゆんを紹介している姿が目に入る。

「こちらの三人が、さつき紹介できなかつた先輩方です」

「あの……桜ねねです……。よろしくお願いします」

先ほどと違い、借りてきた猫のような態度の桜さん。涼風さんの後ろに隠れる様な体勢になっている。

もしかすると、意外と人見知りするほうなのかもしれない。さつきが例外だっただけで。

「なんか、さつきは騒がしかったのに大人しい子やな。青葉ちゃんの後輩なん？」
「がーん！」

ゆんの『後輩』という言葉に、桜さんがショックを受けたような顔になる。俺としてはどっちもどっちのような気がするんだけど……。

これは涼風さんに怒られそうだ。

「ほら、ねねっちの方が子供に見えるじゃん」

「同い年だし!!」

勝ち誇ったような表情を浮かべる涼風さん。一方先輩三人は『どつちも子供に見える……』みたいな顔をしていた。

そんな三人を横目に俺はカップラーメンを片手に社員食堂へ。お湯を入れ、三分間待ち、完成したラーメン（カップヌードルビック シーフード味）をすすする。

「うーん、普段はあんまり食べないけどシーフードもなかなかうまいな」

そのまますすると啜っていると、

「まあた、カップ麺を食べてる。そんなものばかり食べてると、病気になるよ?」

そう言って目の前に座ってきたのは葉月さんだった。なんだかデジャヴを感じる。

でも、もずくは一緒ではなかった。あのさわり心地抜群の身体に触れないのは残念だ。

「なんか最近、みんなにそう言われるんでカップラーメンを食べるのは一週間に三回にしますよ」

「それでも十分すぎるくらいだよ。早く健康的で美味しいお弁当を作ってくれるお嫁さんを探したらどうだい？」

「そんな人がすぐに見つかれば苦労しません」

「遠山君なんてピッタリだと思うけど？」

「だから、どうしてりんが出てくるんですか……りんと俺は相性最悪ですって」

「そうかな？ 最近の君たちを見てみると、そうは思えないんだけど？」

「ニヤツと悪い笑みを浮かべる葉月さん。こうなってしまうと分が悪い。俺はラーメンをすすりつつ目を逸らす。

「……葉月さんの思い込みじゃないですか？」

「絶対に思い込みなんかじゃないと思うんだけどなあ。君たちの間に流れる空気は、昔ほどとげとげはしていない。これは興梠君も感じているんじゃないのかな？」

「……………」

思い当たる節がないわけではなかったの、素直に言い返せなかった。酔っぱらった彼女を部屋まで送った次の日。

残り物の肉じゃがを貰った時。

そして電話越しではあるのだが、俺の体調を心配していた時。

いずれも、俺とりんの間に流れていた空気は温かいものだった。それについては否定のしようがない。

「……確かにそうかもしれないですね。あくまで昔と比べての話ですけど」

「相変わらず君も素直じゃないね。……素直じゃないことに関しては遠山君も同様かもしれないけど。まあ、君たちが認めないのならそれでいいけどね。私はそんなもどかしい二人を見ているのが楽しいわけだからさ。それに丁度、企業スパイの子も来たみたいだし」

葉月さんが獲物を見つけたとばかりに立ち上がる。

「企業スパイの子発見」

「へえっ!?!」

そうやって葉月さんが食堂にやってきた桜さんの肩を抱く。

桜さんは突然の事に困惑の表情を浮かべ、涼風さんは「またか……」と少しだけ呆れていた。

「もしスパイがこんなに可愛かったらどんな秘密も漏らしてしまうね」

やってることはただのおっさんである。セクハラで訴えられればいいのに。

その後は社員証の写真と言い張って写真をとったりなど、やりたい放題だった。桜さんに変な会社だと思われてなきやいいけど。

「いやー、やっぱり可愛いは正義だね」

俺の前に戻ってきた葉月さんはほくほく顔だ。

「ほんと、程ほどにしてくださいよ。桜さんもごめんね。うちの上司が」

「い、いえ、全然大丈夫ですけど……これが普通の光景なんですか？」

「違うから！」
全力で否定しておいた。

わざとじゃないことも、大事にされるとなかなか言い出せなくなる

「この隙間にはめて、あとは剣を振り続けてればソフィアちゃんやられないんだ！」

「おお!! ソフィアちゃん生還ルート」

「でも、いつまでも終わらないんだけどねー」

「……何やってるんだい二人とも？」

デバッグのバイトが入ってから、また幾日か経過したある日。桜さんと涼風さんがパソコンを覗き込んで何やら話していたので、気になってのぞいてみたら……死ぬはずのソフィアちゃんが救われていた。

なんか主人公がめっちゃ剣をふっている。ヒロインを守る主人公の鑑だ。

「あつ、興梠さん。お疲れ様です」

「お疲れ様ですー！」

桜さんもすっかり職場に馴染んだようで、俺に向かってニッコリと微笑んでくれる。最初はどうなることかと思ってたけど、桜さんは思っていた以上の力を発揮し仕事に取り組んでくれていた。

「お疲れ。ところでこれは一体？」

「これですか？ 多分、バグかなんかだと思うんですけど、これだとソフィアちゃんがやられないですよ」

「でもその代償にここから進めなくなりそうです！」

完全にバグですわ分かりません。

確かにこれなら涼風さんの作ったソフィアちゃんはやられないけど、これは報告必須だな。

「あらっ？ 三人で何見てるの？」

「あっ！ 遠山さん、見てください」

たまたま近くを通りかかったりんを、涼風さんが呼び止める。俺と同じように画面を

覗き込み、りんは苦笑いを浮かべた。

「これはこれでいいかもしれないけど、不具合だから報告ね」
「ですよね……」

やっぱり不具合なので報告ということになった。うーん、ここにきて不具合だと先行きが心配になってくる。明日にはβ版を提出しなきゃいけないのに。

こりや、今日は徹夜になるかもしれないな。

「それはそうと青葉ちゃん、まだ就業時間だしあまり席を外してはダメよ?」

「あつ……ごめんなさい」

「桜さんも気持ちは分かるけどあまり誘わないようにね」

「は、はい」

やんわりとりんが二人を注意する。やっぱり彼女はイーグルジャンプのお母さんだ。

「……タケルも、余計なこと考えている暇があったら仕事に戻って頂戴」

「……はい」

人の思考を読む力も相変わらずだ。どうしてわかるんですかねえ。

「りんさん、ちよつといいですか？ 背景データで伺いたいことがあつて。あとディレクターも呼んでました」

「あつ、今行きます！」

この時期だけあつてAD（アートディレクター）のりんはせわしく動き回っている。うみこさんからの呼びかけにりんがそちらに向かおうとして、

「りんー、大変!!」

「えっ、なに!？」

コウの慌てたような声に、りんもびつくりしたように立ち止まる。

結構焦ってるみたいだけど、なにか重大な問題でも発生したのだろうか？

「私のプリンがないんだけど……冷蔵庫に入れといたのに」
「何かと思っただじやない!!」

重大な問題、それはプリンが無くなったということでした。声のトーンと問題の大きさが釣り合っていない。

もちろんりんはコウを一喝した後、取り付く島もなくうみこさんの後についていった。

「コウ、プリンくらいでわーわー騒ぐなよ」

「プリンくらいとは失礼な！ 楽しみにしてたんだよ!？」

「だったらまた買いに行けばいいじゃねえか……」

多分、誰かが間違えて食べたんだろうけど、そんなのでいちいち騒がれてたらきりが
ない。

最悪、仕事終わりにでも買ってきてあげよう。……別にコウの好感度稼ぎとかじゃないです。

「それにしても遠山さん、忙しそうですね」

「開発終盤ってこともあるけど、明日β版の提出だからね」

「ベータ版？」

聞き慣れない言葉に涼風さんが首を傾げる。確かに高卒一年目の涼風さんにとっては、聞きなれない言葉なのかもしれない。

俺も初めはなんのこつちやとハテナマークを浮かべていたからな。

「親会社に提出するサンプルだよ。報告した予定通りのところまでプレイ出来て、クオリティも目標値に達してるか判断されるの」

「まあ目標値と言っても、ほぼ完成状態が理想なんだけどな」

「なるほど。だから慌ただしく動いてるんですね」

「その通り！ しかもこれが通らないと、ゲームは発売できません！」

「ええっ!？」

驚きの声を上げる涼風さん。まあ、これも子会社の宿命ということとで親会社の言うこと（納期）には逆らえないというわけだ。

それに、β版が間に合わないとなると各方面に迷惑をかけることだけではなく、会社全体の利益にも関わってくるので、何としてもこの期限だけは守らなければならぬ。

「だけど、これまでは概ね予定通りにできてきているから多分、大丈夫だと思うよ」

「そうは言ってるけど、青葉はまだ残りの村人が遅れているから忙しんだぞ〜?」

「わ、分かっていますよ!」

「それじゃあ、仕事に戻るか。桜さんも、頼んだよ」

「……………」

「桜さん?」

「っ!? は、はいっ!!」

少し反応が鈍かったような気がするけど、疲れているのかな? 心なしか顔色もよくな
い気がするけど…………。

「大丈夫? もし疲れているのなら少しくらいなら休んでも——」

「だ、だだ、大丈夫ですよ! ぜんっぜん問題ないですから!」

「お、おう…………。それならいいけど、もし体調がすぐれなくなったら遠慮なく言ってね」

本当に大丈夫なのだろうか？　しかし、俺にも自分の仕事があるので取り敢えず大丈夫と言った桜さんを信用することに。

その後は自分の仕事を片付けていると、疲れた様子のりんが肩を揉みながら帰ってきた。

「ふう……」

「お疲れ。どうだ、進行具合は？」

「なんとか及第点つてところかしら」

「あんまり無理するなよ」

「タケルに心配されてるようじゃ、私もまだまだだね」

減らず口がたたけるといふことは、まだ大丈夫という証拠だろう。このタイミングでりに倒れられると大変なことになるのでよかった良かった。

「りんく、青葉の遅れを少し補てんしておいたから確認しといて」

「ありがとう、いつも助かるわ。……そうだ、プリンは見つかったの？」

「ぜんぜん」

結局、コウのプリンは分ならずじまいだ。コウも半分諦め気味である。

「盗難だなんて、この会社も物騒になったわね」

「いやいや、そこまで深刻じゃないでしょ」「プリン一つで大げさすぎだつて」

俺とコウが同時にツツコミを入れる。財布やスマホならともかく、プリン一つで物騒とはこれ如何に。

「ダメよ二人とも！ β版が終わったらもうラストスパートだし、チームが一致団結するためにも放っておけないわ！」

「だから、プリン一つで大げさだつてさつきから言ってるだろ？」

「タケルは黙ってる」

「……………」

いつになく厳しい言い方に俺は口を噤む。さつきも言ったけど、プリンが一つなく

なっただけの話だよね？

「えー、でもどうするの？」

「私に考えがあるわ」

そう言つて何やら自分のパソコンを操作するりん。しばらくすると、メールボックスに一通のメールが届く。

内容を確認して、

「だから、大事にし過ぎだつて」

「それに、こんな小学生みたいな方法で自首してくるわけないでしょ？」

「え、そうかしら？」

りんつてたまに抜けてるところあるよな。今のメールを見てそう思う。

そもそも、このメールを犯人？ が読んだところで「後でこっそり入れておけばいいや」とか考えそうさ。焦つて自首してくるやつなんて一人もいないだろう。

「八神さん、チェックお願いします」

そこで涼風さんがコウのデスクまでやってくる。

「ところでメールを見ましたけど、そんなに大切なプリンだったんですか？」

「いや、コンビニの百円くらいだよ」

「えっ？ それだけの為に全社員に一斉メールを？」

「ほらっ、大事になっちゃったじゃん！」

「ははは……」

涼風さんとコウの反応に苦笑いを浮かべるりん。

「まあいいや。それじゃあチェックしちゃうから」

「はい、お願いします」

コウがキャラデザのチェックを始めたので、俺も自分の席に戻る。その時、

「あおつちまで悪者にされちゃう!!」

なんか壁の後ろから桜さんの声が聞こえてきたような？

りんも気付いたのか、声の主の元へ。俺の気になったのでその後が続く。

「あら、ねねちゃん」

「はわっ!?!」

「どうかしたの？ さつき青葉ちゃんまで悪者につて聞こえてきたんだけど?」

「こ、声に出たっ!?! ……あ、あのっ」

どうにも歯切れ悪い桜さん。それと手には、何やらカップのようなものが握られている。

あれはもしかして……。

「な、なんでもありません!!」

走って逃げていった桜さんをりんはポカンと見つめる。

「どうして逃げるのかしらっ？」

「……………」

今ので色々察した俺は、自分の席に行くふりをしてこっそり桜さんの後を追う。すると桜さんは、自分の席でカップを見つめながら頭を抱えていた。

そのカップには「ゴウ」と名前が書かれている。

「ど、どうしよう……………」

これは謝りに行こうとしたらりんどのメールが届き、謝るに謝れなくなってしまった。桜さんの表情からはそんなことが読み取れる。

涼風さんが悪者という発言の意味は分からないけど、多分自分がプリンを食べたことで涼風さんに迷惑をかけてしまうとも思ったのだろう。

(「これじゃあ桜さんも仕事に集中できないよな……………よしっ」)

俺は軽く芝居をうったために咳払いをする。そして、

「それにしても、コウのプリンは一体どこにいったんだろうな」

「っ!？」

桜さんにも聞こえるよう、少し大きめの声で呟いた。

「でも、あんなメールを送ったら正直に言にくいよな。犯人の人はわざとじゃなく、間違えて食べちゃったのかもしれないだし」

「……………」

気配を殺して俺の言葉を聞いているのが何となくわかる。

この伝え方はあまりよくないかもしれないけど、桜さんが罪悪感を抱えながら仕事に取り組むよりよっぽどましだろう。

「だから俺は正直に名乗り出なくても代わりのプリンを買って、一言『ごめんなさい』って書いた紙を添えて、冷蔵庫に入れてもらえばそれでいいと思うんだけど……まあ、こ

の件は忘れて仕事に戻ろう」

そこまで言い終えると、俺は今度こそ自分の机に戻る。この後の事は桜さん次第。うみこさんは素行に多少問題があるとは言ってたけど、根はとつても良い子なのできつと大丈夫だ。

よし、これで俺も集中して仕事に取り組めるぞ！　なんて息巻いたのがいけなかったらしい。

「ふ、不具合だ……」

『……………』

その日の深夜。コウからの報告に、俺とりんは絶望的な表情になる。

βディスクに焼く直前での不具合の発見。焼く直前に見つかったというのは不幸中の幸いだろう。これでβ版を出していたら目も当てられなかったからな。

しかし、徹夜が決定したということは全く持つて笑えない。正直、身体は悲鳴をあげている。

この場面から逃げ出したい。

でも逃げられない。

「が、頑張ろつか……」

「……うん」「……おう」

その後、俺たちは死に物狂いで不具合の対応をした。

☆ ★ ☆

「八神さんたち、すごく眠そうですね。何かあったんですか?」

「βディスクに焼く直前に不具合が見つかってさ。朝まで対応してたから」

次の日。俺たちのやつれた顔を見て涼風さんが驚いている。

それもそのはずで、コウは目の下にクマを作っており、流石のりんも疲れを隠しきれない。俺は言うまでもなく顔が死んでいる。

「でも、すっかりできたからこれで審査も大丈夫だと思うわ」

「焼く直前に見つかったのが救いだっただよ」

「大変でしたね。あつ、八神さんには遅れを補ってんしてもらっちゃったのでこれ食べてください」

「おお！　ありがとう！」

涼風さんが取り出したのは昨日、行方不明になったプリン。どうやら昨日のお礼として新しいのを買ってきたらしい。

「結局、犯人は見つかつたんですか？」

「分からないまま。まあ、別にもういいよ」

「でも本人は反省してるんじゃないかしら？」

「そうかなー？」

……
そこでりんが冷蔵庫の扉に手をかける。さて、昨日の眩きが聞こえていればきつと

「あらっ?」

何かに気付いた様子のりん。表情も心なしかやわらかいものに変わった気がする。

「コウちゃん、これ」

「あっ!」

取り出したのはなくなつたはずのプリン。しかも蓋の上には「八神コウさま 食べちゃつてごめんなさい!」という一言が。

「まさか、帰ってくるなんて……まありんのお陰だし、あげるよ。私は青葉のがあるから」

「うん、ありがとう」

「でも謝りに来ないなんて、いけないことだと思います!」

真面目な涼風さんの言葉に桜さんがピクツと反応している。しかし、そんな彼女に優

しくフォローを入れたのはりんだった。

「……実はね、昨日こっそり謝りに来てたのよ」

「っ!？」

「うそ!？」

「えっ、誰ですか？」

「ふふっ、内緒♪」

「私、被害者だよ一応!」

しかし、りんは名前を言うことなく笑顔ではぐらかす。こりや、りんも犯人は誰だか分かってるな。

もしかすると、昨日いきなり逃げた時点で気付いていたのかもしれない。

「だから青葉ちゃんも犯人の事を責めないで挙げてね。……ねねちゃんも、ね?」
「……はい、きつと反省してると思います」

悔しいけどなんだかんだりんは優しい。桜さんにとってフォローをしてくれたりん

は女神に見えていることだろう。

「ねねっち、なんだか随分おとなしいね？」

「えっ！ いや別にそんな事……ただ、あおっちはいい先輩に囲まれてるんだなって」
「そうでしょ！」

桜さんはいいことを言ってくれる。いい先輩に俺が含まれているのかはともかくとして、やっぱり良い子だった。

この子は優秀だし、うみこさん辺りがスカウトしてくれないかな。

「それにしても食べたなら眠くなってきた……」

「そうね、私も……」

「今日は早退していいかな？」

「だめよ。定時まで我慢よ」

「定時まで耐えらえる気がしないんだけど……」

ぶつぶつ文句を言ってたけど、三人とも定時まで何とか頑張りました。

☆
★
☆

「あ、あのつ、興梠さん！」

「ん？ どしたの桜さん？」

仕事後、俺は桜さんに呼び止められ足を止める。

「これっ、今日のお礼です!!」

差し出されたのは今日、冷蔵庫の中に入っていたものと同じプリン。俺は彼女の律儀な姿に思わず微笑む。

「……別に、俺は何もやってないんだけど？」

「い、いいから受け取ってください！」

強引にプリンを差し出してくる桜さん。そして、改めてペコツと頭を下げると、

「その……ありがとうございます」

一言だけ告げると、足早にその場を去っていったのだった。

「……やっぱり良い子だったな」

これは本格的にうみこさんに提言したほうがいいかも。そう考える俺だった。

風邪をひくと不安になるのは誰でも一緒

「ケホツ、ケホツ……」

β版直前の不具合や、プリン事件など、様々なことを乗り越え数日が経過した。

そして今も現在進行形で忙しいのだが、今朝からりんの体調が思わしくない。先ほどの様に咳が頻繁に出ており、顔も赤く少しだけ辛そうに見える。

最近はず忙しい日々が続いていたので、その影響もあるかもしれない。

「風邪？　大丈夫？　風邪なら帰った方がいいよ。みんなに移したら大変でしょ」

コウも流石に心配になったのか、りんに声をかける。

「大丈夫よ咳くらいだし。それにこんなに忙しいのに休めないよ……」

りんはコウの心配に大丈夫だと手を振る。しかし、それがやせ我慢なのは誰の目から

見ても明白だ。

忙しいのは確かだが、ここで無理をしてりんが長期間休まれるほうがよっぽどロスである。その事はコウも十分承知していたようで、

「帰ろう。駄目だよ休まない」と

強引にりんの手を取るコウ。少し怖い顔のコウにりんはため息をついた。

「……分かったわよ。でも、一人で帰れるからコウちゃんは仕事してて」

「駄目。帰っても働く気でしょ？」

流石、伊達に入社時代から一緒に居ない。りんの性格を見抜いていたコウは、一人で帰らせようとはしなかった。

「……わかる？」

「わかるよ。ずっと一緒に居るんだから」

「でもまだ仕事が残ってるし、私だけならまだしもコウちゃんまで抜けるわけには……」

「そんなの残ってる俺たちで進められるところまで進めとくから、まずは風邪を治してくれ」

「まだ少し逡巡している彼女を、無理やりにも帰らせるべく俺は声をかける。それに、俺には奥の手もあるからな。」

「……それだと、またタケルに負担をかけることになっちゃうじゃない」

「別に、俺は体調バツチりだから問題ないよ。……それに、せっかくコウに看病してもらえるチャンスなんだから、存分に甘えてこい」

「っ!？」

ニヤツと笑みを浮かべた俺に、りんの顔が明らかに風邪じゃないレベルで赤くなつた。

「べ、べべべ、別にコウちゃんに看病してもらわなくなつて私は……」

「はいはい、反論は風邪が治つてからたくさん聞いてやるよ」

「ん？ 二人とも何話してるの？」

「こ、コウちゃんには関係ないから!!」

ただ、そこでりんはようやく折れてくれたので今日は早退することになった。早退までの流れはあれだが、悪化されるよりはよっぽどいい。

「私、りんを家まで連れて帰るから後よろしくね」

手を繋いで帰っていくりとコウ。パツと見、付き合っている彼氏彼女にしか見えなかったのが若干ジエラシーがわきました。

全く、敵に塩を送るなんて柄にもないことをしてしまっただけ。まあ、今回は本気で体調が悪そうだったので仕方がない。

「……タケルも無理しないようにね?」

「おう、任せとけ」

心配してくれたコウに、ジエラシーはなくなりました。二人を見送り、この後やる予定だった仕事の内容を確認しておく。

「うおつ、結構あるな……こりや今日も忙しくなりそうだ」

あいつは体調が悪い中、こんなに仕事をこなそうとしてたのか……。帰らせて正解だった。責任感が強すぎるというのも困りものである。

しかし、これだけ仕事があると涼風さんたちを見ている暇もあまりなさそうだな。その為、俺は一度席を立ちひふみの席へ。

「ひふみ、ちよつといいか？」

「な……、何かなタケル君？」

「いや、ちよつと予想以上に仕事が多くてな。涼風さんたちを見ている暇があまりないかもしれないんだ。大丈夫だとは思うけど、何かあつた時は頼むな」

「えっ……あつ、うん」

少しだけ自信なさげに頷くひふみ。彼女は一番上の先輩になることは慣れていないので、もしかすると緊張しているのかもしれない。

でも、今後はひふみもリーダーをやる機会があるかもしれないから、ここは心を鬼に

して我慢だ。

「……………」

不安げな表情のひふみに決心が揺らぎかけるも、俺は何とかしてデスクへと戻る。

（えっと、取り敢えずこの仕事から終わらせていくか）

目について比較的簡単に進められそうなものから順に進めていく。その中でうみこさんに確認が必要な物があつたので彼女のデスクへ。

その途中、桜さんのデスクの横を通つたのでチラッと中を覗いてみると、

「よし！ はいてる！ 問題なし！」

「ちよつと待ちなさい……………」

ゲームに登場するキャラクターのパンツが見えた。何してんの桜さん？ ついでにうみこさんもいたので、探しに行く手間が省けて良かった。

「お疲れ様ですうみこさん、それに桜さんも」

「お疲れ様ですタケルさん」

「お疲れ様です」

二人に挨拶をしてから、まず一番気になっていたことを尋ねる。

「桜さん、これは一体？」

「これですか？ いやー、はいてないキャラがいたら大変だなんて」

「まあ、確かにはいてなかったら大変かもしれないけど……このゲームって下着が見えることってあるんですか？」

「ありませんよ。下着が見えることは想定していないのでバグです」

やっぱりバグだったか。このゲームでパンツが見えるって結構あり得ないしね。

「なので桜さん、これはバグとして報告してください」

「いや、それは仕様だよ。裏のね」

「葉月さん、急に現れるのはやめて下さい……」

突然現れた、我らディレクターに俺はため息をつく。この人は神出鬼没だから怖い。というか、仕事をしないとまたうみこさんに怒られますよ？

「こんな仕様、私は初耳ですけど？」

「だって、仕様に描いてしまったらつまらないだろう？ 偶然見えるパンツ……そこにロマンがあるのさ。ねっ、興梠君？」

「どうして俺に振るんですか？ ノーコメントでお願いします」

確かに、とってしまっただ俺の本音は心の奥底にしまっておく。しかし、男としてこれではしょうがない。

見せられたものと、偶然見えてしまったものでは興奮も段違いだからな。……俺は一体何を語っているのだろう。

「それに、キャラ班が厚意で作ってくれたパンツを見せないまま終わらすなんてもったいないと思わないかい？」

「た、確かに！」

妙に説得力のある言葉に、桜さんが納得してしまっている。悔しいけど、俺も納得してしまった。

「はあ、分かりました……。それならショーツのチラ見せは、仕様と追加しておいてください。誤解を招きませぬ」

ため息とともにうみこさんが仕方なく了承する。パンツとは言わずショーツというのがなんともうみこさんらしい。

「ショーツのチラ見せだとショーチラ？　なんかパツとしない……」

「うみこ君は照れてるだけだから、ツッコんではいけないよ」

「意外と硬派なんですね！」

うみこさんに対して失礼な言葉のオンパレード。こりやまた撃たれるぞ（エアガンで）。

「うるさいですね！」

案の定、どこからか取り出したエアガンで足元を乱射される二人。自業自得である。

「……余計な時間を使ってしまった。ところで、興梠さんはどうしてこのデスクに？」

「あつ、そうです。肝心の事を忘れてました。実はりんが体調不良で早退したので、代わりに彼女の仕事で肩代わりできるところは肩代わりしてるんですよ。それでうみこさんに確認が必要なところがありました……」

無事確認もとれたので俺は自分の席へ戻る。

その後はまだまだ残っている仕事を片付けていると、「あくもう、うるさいな！ 音だすなや！」というゆんの声が聞こえてきたので、ひふみたち四人がいるブースへ。

「おーい、どうかしたのか？」

「あつ、タケルさん。はじめが八神さんたちいないからって、おもちゃを振り回してたん

ですよー！」

「おもちゃっ？」

みると、確かにはじめの足元には玩具のビームサーベルと魔法少女が持っていていそうな杖が転がっている。

「コウとりんがいないからって、まだ就業時間内だし遊ぶなよ」

「ご、ごめんなさい……」

はじめがシユンと頭を下げたところで、そう言えばと涼風さんが声を上げる。

「遠山さんの為に八神さんが早退するだなんて驚きました！」

「確かに。あんなに男らしい八神さん初めてやな」

「そもそも八神さんって、病気で『気合で何とかしろ』って感じの人かと思ってたよ」

病気でも気合で何とかかって、とんだブラック企業だな。うちはホワイトなので病気になっただけで休ませてくれます。

俺も何回か休んだことがあるし。取ろうと思えば有休もとれるからね。

「厳しそうだけど優しいところがありますよね」

「あつ、でもここは漫画とかアニメみたいに、タケルさんが遠山さんを送っていけばよかつたんじゃないですか？」

「ラノベ主人公じやあるまいし、絶対に嫌だよ。そもそも俺が送るって言ったらりんのやつ、絶対に帰らなかつたと思うよ」

家は隣同士だから楽なんだけど。しかし、そんな事を言うわけにもいかないので黙っておく。

「まあそんなわけでまだまだ忙しいと思うけど、みんな最後までよろしくな」
『はいっ！』

ただ、席に帰った俺は少しだけりんの事が頭に引っかかっていた。

(徹夜にならなかつたらお見舞いでも買って帰るか)

しかし、仕事の量が予想以上に多く俺は12時を回ってもパソコンとにらめっこ状態が続いていた。

「ふう〜。今日は徹夜だな〜」

眉間を摘んでマッサージをしていると、

「お疲れ様ですタケルさん」

コトツとデスクの上に缶コーヒーが置かれる。

「あつ、お疲れ様ですうみこさん。すいません、今お金を……」

「いいですよ缶コーヒー一つくらい。それにしても随分疲れてるみたいですけど、大丈夫ですか?」

余程疲れた顔をしていたのか、うみこさんが心配そうな表情で覗き込んでくる。

それにしても缶コーヒーを机に置く仕草といい、お金はいらないう言葉といい、へたな男性よりイケメンだ。

「いや、ちよつと目が疲れただけですから」

「……それならいいですけど、気を付けてくださいね？ りんさんだけでなくあなたにまで抜けられると、チームにとってダメージが大きすぎますから」

そこで「さらに」と続け、

「どうにもあなたはりんさん以上に無理をする性格だと、とあるディレクターからお聞きしているのです」

「……一体、どこのディレクターですかねそんな事言うのは」

全く、葉月さんは余計なことを……。

「ともかく無理は禁物ですよ、タケルさん。……その、私もあなたに無理はしてほしくないですから」

「えっ？ あつ、はい。ありがとうございます」

少しだけ照れくさそうに頬をかくうみこさん。一方、俺はそんな直球に心配されるとは思つてなかつたので間抜けな反応になってしまう。

「……じゃ、じゃあ、私はこれで」

そそくさと退散していくうみこさんに思わずクスツと笑みがこぼれてしまった。

その後は残っている仕事を片付けていると、夜中の三時になっていた。流星にそろそろ限界だったので、俺はシャワーを浴びにシャワー室へ。

涼風さんたちは四人で深夜銭湯にむかい、そのまま直帰するようだ。

「ああ、ようやくさっぱりした」

シャワーを浴び終えた俺は誰もいないことをいいことに、おつきさんくさい声を上げる。

いつもなら徹夜をしてもコウがいるので、誰もいない会社つてのも新鮮だ。いつもの

場所から寝袋を取り出し、机の下に潜り込む。

(……りんのやつ、大丈夫かな? コウに風邪がうつってなきやいいけど)

あつという間に眠気が襲ってきた俺は、心配もそこそこに夢の世界へ旅立っていったのだった。

☆ ★ ☆

「えく! 八神さんと遠山さん、おやすみなんですか?」

「遠山君の風邪が八神君にうつったみたいだね」

「……………」

マジっすか。俺は葉月さんからの報告にげんなりとした表情を浮かべる。

昨日、うつってなきやいいとは思ったけど、まさか本当に風邪がうつってしまったと

は……。

「ま、あの二人は働き過ぎなくらいだし、たまにはゆつくり休めばいいんだよ。そして、私たちも病気になるないように栄養付けないとね！」

そう言つて葉月さんが取り出したのはシュークリーム。栄養というよりは普通の差し入れだな。

みんながシュークリームに舌鼓をうつ中、

「あつ、そうそう。興梠君は今日は少し早めに帰ること」

「分かりました……つて、はい？」

聞き間違いだと思つたけど、どうにも葉月さんは本気で言っているらしい。

「だから、今日は早めに上がるこつて言つたんだよ」

「いやいや、何ですか？ 二人がいらないからこそ、俺が頑張らないと」

「確かに頑張つてほしいのは山々だが、いかんせん君は頑張り過ぎ。昨日だつて、徹夜で

作業してたのだろう?」

「ま、まあ、そうですけど……」

「最近だつてオーバーワーク気味だつただろ? そう言うわけで興梠君は今日、早く帰るからみんなフォローは任せたよ」

納得のいかないうちに早く帰宅することが決定してしまった。そんなわけであつという間に帰宅時間になつてしまい、俺は現在帰りの電車に揺られている。

「はあ……」

あの後、一応葉月さんに抗議をしたのだが、

『君はまた、フェアリーズストーリー2の様に無理して体調を崩す気かい?』

その言葉を言われてはもう反撃はできなかつた。

最寄り駅についたので俺は改札口をくぐり、マンション近くにあるスーパーへ。いつもならコンビニに寄るところなのだが、今日はとある目的でスーパーに寄つたのだ。目

的とはもちろん、りんへのお見舞いである。

適当にりんごやレトルトのお粥などを見繕い、改めてマンションへ向かう。一度、鞆などを自分の部屋に戻すと、

ピンポーン

りんの部屋のインターホンを押す。

(うーん、もしかしてると寝てるかもだから迷惑だったかな?)

しかし、心配は杞憂だったようでガチャという音と共にまだ少し顔の赤いりんが顔を出した。

「……なに?」

「お見舞いだよ。それで、大丈夫か?」

「……あなたに心配されなくても平気よ。でも、お見舞いはありがと。もう、大丈夫だから」

俺からスーパーの袋を受け取ったりんだったのだが、

「あつ……」

「お、おいっ！」

ふらついて倒れそうになったりんの右手を掴んで、濟んでのところで引つ張り上げる。

「……はあ、……はあ」

息が荒く、汗も酷い。平気と言った割には、かなり無理をしていたみたいだ。

「全然平気じゃねえじゃんか。……部屋はなるべく見ないようにするから今は許せよ」

ため息をつくとき、俺はりに肩を貸して部屋の中に歩き出す。ひとまず彼女をベッドに座らせ、俺は一度キツチンへ。

コップに水を入れて戻ると、相変わらずりんは荒い息のままベッドに腰掛けたままだった。

「りん、水持ってきたから。薬は？」

「……もう飲んだわ。昨日、コウちゃんが買ってきてくれたから。……悪いわね、色々」
「気にすんなって。どうせ家は隣同士なんだから」

りんが水を飲んでいる間に俺は、スーパーの袋から買ってきておいた冷えピタを取り出す。

「ありがとう」

「おう。それじゃあベッドに寝てくれ。冷えピタも貼ってやるから」

ベッドに寝転んだりんのおでこにかかる髪を左右に分け、タオルで軽く拭ってから冷えピタを張る。

普段なら文句の一つでも飛んできそうな光景だが、よほど身体がしんどいのかりんはされるがままになっていた。

「アイスノン（保冷枕）も持ってきたけど、頭の下に敷こうか？」
「……お願い」

俺の家で冷やしてあったアイスノンにタオルを巻きつけ、りんの頭の下に敷く。

「どうだ？ 寝苦しいとかはないか？」

「うん、大丈夫。……タケルって、随分看病に手慣れてるのね」

「妹が風邪をひいた時、よく看病してたからな」

それもずいぶん昔の事である。俺が一人暮らしをはじめてからほとんどない。

その後は買ってきておいたゼリーやポカリなどを冷蔵庫にしまい、改めて彼女のベッドの横に腰を下ろす。

「……全く、そんなにしんどいなら無理して出てこなくてもよかったのに。どうせ俺だったんだからさ」

「……別に、ただの気まぐれよ」

不思議な気まぐれもあったものだ。

そこでお互いに黙ってしまい、これ以上居座つてもりんが休めないと思ひ俺は立ち上がる。

「それじゃ、俺は帰るから。何かあつたら連絡して——」

「ま、待つて、もうちよつとだけ……」

懇願するような声に思わず振り返ると、りんが上体を少しだけ起こして左手を伸ばし、俺の事を見つめていた。

しかし、すぐにハツとした表情になるとベッドに潜り反対側を向いてしまう。

「…………ごめんなさい。今のは何でもなかったわ。だから大丈夫。聞かなかつたことにして。…………今日はありがと」

もう気にしなくてもいいと言わんばかりの言葉。しかし、待つてと言つた彼女の表情はとても不安げだった。

(……あー、もう！)

俺は思わず頭をかく。そんな顔されて「はい、わかりました」なんて言えるわけねえじゃんか。

「分かった。それじゃあ帰るな」

帰るといった瞬間、りんの身体がピクツと反応したが、彼女は何も言わず布団にくるまっている。

「だけど、りんの体調がすごく心配だから、荷物を置いてきたらまた戻ってきたいと思ってる。まあ、もちろん、お前次第だけどな」

なんかどうしても俺が看病をしてあげたいみたいで顔が熱くなる。

俺の言葉にりんはしばらく黙っていたのだが、おもむろにこちら側を向く。そして、

「……もう、仕方ないからタケルに看病してもらおうことにするわね」

クスツと微笑んだりんは、熱のせいもあって妖艶に見えた。思わず心臓が高鳴ってしまい、俺はそっぽを向く。

「はいはい、ありがとうございます。じゃあ、一回自分の部屋に戻ってまた来るから」
「うん、待ってるわね」

心臓の高鳴りに戸惑いつつ、俺は自分の部屋へと戻るのだった。

☆ ★ ☆

「ん……？」

夜中。昼間もずっと眠っていた私は変な時間に目が覚めてしまった。時計を確認す

ると、午前3時を指している。

(大分身体が軽くなってるわね)

これなら会社に出社しても大丈夫そうだ。そこで視線を床に巡らすと、

「すう……すう……」

身体を丸めたタケルが寝息を立てていた。

一瞬、どうしてタケルが!?! と思った私だが、眠る前の事を思い出し猛烈に顔が熱くなった。

(私ってばタケルになんてことを……)

なぜ自分でもあんなことを口走ったのか、よく分からない。ただ、分かるのはタケルが帰るといった瞬間、すごく寂しくなったのだ。

25歳にもなって恥ずかしい話なのだが、昨日はコウちゃんがずっと一緒に居てくれ

た影響もあって、今日はずっと寂しかったのである。

風邪を引いたのも結構久しぶりということもあって、気付いた時には彼を呼び止める言葉を口に出していた。

「……何もかけないと、私に見たいに風邪ひいちゃうわよ？」

眠るタケルに呟きつつ、私は薄い掛け布団を彼の身体にかける。

戻ってきた後、タケルは私が眠るまでの間とりとめのない会話に付き合ってくれた。別に何か特別な会話をしたわけでもない。職場で話すような、そんな程度の会話である。

「どうせ俺だったんだからさ……か」

これはタケルが自虐気味に言った言葉だ。あの時は気まぐれとか言ったけど、本当は違う。

「……嬉しかったのよ」

寝ているタケルの頬に手を伸ばし、優しく撫でる。

彼の顔を見た瞬間、すごく安心している自分がいて戸惑った。

私とタケルは、言ってみれば犬猿の仲だったはず。……いや、その言い方も今となつては少し違うのかもしれない。

「あの時ほど、嫌いじゃないの」

コウちゃんの事を先輩と一緒にいじめていた時は大嫌いだった。でも、フェアリーズストーリー2以降、彼に対する評価は少しずつ変わってきた。

だからもう昔ほど彼を嫌っているということはない。むしろ……、

「……まだ熱があるみたいね」

ありえないことを考えてしまい、私は思わず苦笑いを浮かべた。私が好きなのはコウちゃんなんだから、そんな事あるわけがない。

そのままもう一度ベッドに……戻る前に私はもう一度彼の頬を撫でる。

「今日はありがとう、タケル」

その日は少しだけいい夢を見れた気がした。

差し入れは親睦を深めるための一番簡単な手段かもしれない

「ん？ おい、お前ら何やってんだよ？ まだ仕事は終わってないだろ？」

それはあまりに突然だった。

「……もう無理だよ。あいつに付いて行くのは」

「はっ？ 急に何を言ってる……」

理解ができない。いや、俺自身がその言葉を理解しなくなっただけかもしれない。

「周りが見えてないんじゃないの？ いずれにせよ、もう限界なのよ」

そういつて仲間が一人、また一人と離れていった。

「興柁先輩……ごめんなさい。私もう、無理です。やっぱり私が八神さんのようになるには無理があつたみたいです」

「ちよ、ちよつと待て！ 今はそう思うかもしれないけど、〇〇はまだこれから——」
「もう決めたことですから。今までお世話になりました。それから、最後に迷惑をかけてごめんなさい」

入社一年目の子が半年でやめていった。泣き笑いのような表情を見せながら。

「タケル、りん……ごめん」

今までにない、痛々しい表情を見せる彼女は今でも俺の脳裏に焼き付いていて——

「はっ!？」

飛び起きた俺はきよろきよろと周りを確認し、自分の部屋だということに気付く。夢……着ていたTシャツが汗でぐっしよりと濡れている。

「……着替えるか」

久しぶりに嫌な夢を見た。

☆ ★ ☆

りんが風邪を引いたり、ついでにコウも風邪を引いたりと色々あったが、何とかフェアリーズストーリーの製作は進んでいった。もちろん、俺は彼女たちの風邪がうつることなくその間も働いている。

そして、今日は世間的には休みの会社も多い土曜日。しかし、そんな事は関係なく俺は出社していた。

「はあ、土曜出社は久しぶりでもないのに世間が休みだと、途端に身体が重くなってくるな……」

「そんなしけた顔してどうしたの？」

声のした方に目を向けると、たった今電車に乗ってきたらしいコウと目があつた。朝からコウに会えたのは嬉しいけど、今日が土曜日じゃなければもつと嬉しかった気がする。

それはいいとして、昨日はきちんと家に帰っていたみたいだ。そんな彼女にため息をつきながら話しかける。

「いや、世間が休みだと仕事にもなかなか気合が入らなくなるなつて思つてたんだよ」
「全く、もう直ぐマスター前なんだからしつかりしてよね？」

「流石に、仕事が始まればエンジンかかるから」

「頼んだよ？ 完成したら休みもとれるからさ！」

「一週間くらい、休みが欲しいところだな」

「多分、それは無理！」

「分かつてた事だけど、改めて聞くと悲しい」

たわいのない会話をしている間も電車は進んでいく。

「そういえば、そろそろ疲れが溜まってくる頃だし、涼風さんには気を遣ってあげないかな」

「あー、私も新人の頃、この時期なかなか疲れが抜けなくて苦労したっけ」

「涼風さんの体調が崩れても大変だからな。コウとりんも風邪ひいて寝込んだわけだし」

「あの時はほんと参ったよ。りんの風邪がうつつちやつて、タケルにも散々迷惑かけちゃったわけだし」

「葉月さんは二人とも働き過ぎだから、丁度いいって言ってたけどな」

最寄り駅について改札をくぐると、見慣れたツインテールが目に入ってきた。多分、涼風さんだろう。

しかし、疲れているのか手で瞳を擦っている。やはり取りきれない疲れが、ここにきて顕在化しているみたいだ。

そして、その先には仲睦まじい様子で歩く親子の姿が……。

「本来はあれがあるべき休みの姿なんだけどな……って、コウがいない?」

視線を前に向けると、涼風さんの目を両手で塞ぐコウの姿が。

「ダメだ、見ると心を痛めるぞ！」

「あわわっ!?!」

何してんだあいつ……。心の痛めるといった言葉には大きく賛同できるけどさ。ひとまず駆け足で二人の元へ。

「何ですかいきなり……」

「ほんと、突然何してんだよ？」

「いやー、青葉の心を痛めない様に目を塞いであげたんだよ！」

「それならもつといい方法があっただろ……」

「ほんとですよ！　すごくびっくりしたんですから！」

「元気がなさそうに見えたからつい」

てへへ、と頭をかくコウにジト目を向ける涼風さん。うん、それが普通の反応だと思う。

「まあ、確かに最近では忙しくてなかなか疲れもとれないですけど……」

「本当なら、休ませてあげたいところなんだけどな。まあ、マスターアップまで我慢つてところだな」

「無事、何事もなく完成すればいいんだけどね」

「おい、余計なフラグを立てるんじゃない」

「あははっ！」

コウにツツコミを入れたところで、

「ただいま、ドーナツ全品半額中です」

声のした方に視線を向けると、ドーナツの販売をしているお店が目に入る。

あそこは確か、ドーナツが美味しいと有名で、ちよこちよこ差し入れとして会社に置いてあることが多い。俺も小腹が空いたときとか買ってるし。

「あの、ドーナツ屋さん美味しいらしいですよ」

「へえ〜」

「へえ〜って、たまに差し入れで置いてあるじゃねえか」

「そうだっけ？ あんまりお店とか気にせず食べてたから覚えてないや」

いかにもコウっぽい理由だ。呆れるを通り越して笑ってしまふ。

「どうせ、みんな出社してるだろうし、差し入れに買っていこうか」

「コウにしちや、気が利いてるじゃん」

「たまにはね。それじゃあ——」

「いいですね！ 早速並んできます!!」

言い終える前に涼風さんが、ドーナツ屋さんに向かつて走っていった。それをポカんととした表情で見つめる俺たち。

(全然元気じゃん……)

恐らく、俺とコウの心の中は一致していただろう。ただ呆れると同時に、少しほつと

した俺たちだった。

☆ ★ ☆

「なんだ、まだひふみんしか来てないのか」

オフィスについたのだが、入社していたのはひふみだけで他の人はまだいないようだった。

「おはよう」

「ひふみ先輩、おはようございます」

「お、おはよう……」

それぞれが挨拶を済ませたところで、俺たちは机の上に置かれたある箱に気付く。

「つて、これ！」

「っ!？」

涼風さんが大きな声を出したので、ビクツとしてしまうひふみ。可愛い（語彙力不足）。

そんなことはいいとして、机の上に置かれていたのは先ほど買ったドーナツの箱そのものだった。差し入れをしたのはいいが、その差し入れが見事、被ってしまったようだ。

まあ、会社の最寄り駅で半額セール中なら買っちゃうよね？ みんなも疲れてることだし。

「ドーナツ、被っちゃいましたね……」

「四箱も……まあ企画やプログラマーに配るんだなこれは」

「土日じゃなきゃねっちも食べられたのに……ところでなんでアルバイトは土日に来ちゃ駄目なんですか？」

「あー、会社にもよるけど青葉より高い給料になっちゃう場合があるからね」

「ま、まさか正社員ってお給料を安くするための——」

「涼風さん、それ以上はいけない」

「そうだね。青葉もそれ以上は考えないように」

大人にも会社にも、色々な事情があるって事だけ覚えておいてくれればいいです。会社の闇に触れるのにはまだ早い。

「それじゃあ、私は他の班にドーナツを配ってくるから。タケルたちはプログラマー班に持っていつてくれる？ 多分、あはごんたちがいると思うから」

「了解。じゃあいこっか涼風さん」

「はい！ あつ、その前に……」

涼風さんはポケットからスマホを取り出し、ドーナツをパシヤリ。

「ねねっちに飯テロしちゃお！」

「……涼風さんって意外とSっ気があるよね？」

「そうですか？ まあ、悔しがるねねっちを想像するのは楽しかったですけど」

「絶対にSだこの子」

確かに、写真を見て悔しがる桜さんの姿は容易に想像がつくけどさ。ベッドで「ずるいずるい!!」って転がりまわってそう。なんか可愛い。

「あ、青葉ちゃんって……仲良くなると、いじわるになっちゃうほう?」
「へっ?」

俺たちの会話を聞いていたひふみから、質問の声が上がった。突然の質問に涼風さんは素っ頓狂な声を上げる。

「や、やだなー。そんなわけないじゃないですか。ねねっただけですよ」

「そ、そうなんだ……」

「実は他の人にも同じようなことをしたりして」

「し、しませんよ!!」

涼風さんの意外な一面を知れたところで、ひふみが「うううう……」頭を抱えていることに気付く。

何を考えてるのか知らないけど、恐らくSっ気満載の涼風さんを見て、自分がいじめ

られやしないかと不安になっているのだろう。

涼風さんはそんなことしない子だから。そんな事をするのは桜さんだけにだから……多分。

「まあいいや。取り敢えず配りにいこつか。ひふみも来る？」

「う、うん！」

というわけで三人そろってプログラマー班へ。

「あのく……って」

「っ!!」

「……プログラマー班は酷いな」

プログラマー班の元ヘッドーナツを配りにきた俺たちの目の前には生き地獄……とまではないかないけど、中々に酷い光景が。

どよくん、という効果音が目に見える。夏草や兵どもが夢の跡……流星にそこまでは言い過ぎか。

生氣のない顔して仕事をしているか、ぶっ倒れてるだけなんだけど。……いや、それも問題だらけか。

取り敢えず、激務だつてことが伝わればいいです。飄々と仕事をしているのはうみこさんだけである。あの人だけサイボーグかよ。

「あなたも、色々な仕事に首を突っ込んでいる時点で十分サイボーグな気がしますが？」
「ちやつかり心を読まないで下さい。それにしても……酷いですね」

「まあ……一番酷いタイミングでいらつしやいましたし」

「酷いなんてもんじゃないですよ」

「み、皆さん、お疲れなんですネ」

「でも楽しいですよ。戦場みたいで」

「ははは……」

その戦場が敗戦後みたいなんです。後、新人の女の子をドン引かせないで下さい。
。

「予想よりバグの報告が多くて、てんてこまいなんです。桜さんも細かく報告を入れて

「くれています」

「へえ、そうなんですか。ねねっち、頑張ってるんですね」

「桜さんが大学生じゃなかったら採用したいくらいだよ。俺は企画班だけど、旧作を知らないと分からないような報告まで入れてくれるから、助かってるんだ」

「まあ、彼女の問題は素行ですけどね」

「そ、それは……気を付けるように言っておきます」

涼風さんが苦笑いを浮かべる。うん、まあ、彼女の素行についてはいずれ何とかなるだろう（適當）。

「ところで、どうして三人はプログラマー班へ？」

「あつ、すっかり目的を忘れてた」

「これ、差し入れです。私と八神さんと滝本さんから」

「これはどうも。後でみんなでいただきます。滝本さんもありがとうございます」

「い、いえっ……、そんな……っ」

「一方的に貰うわけにもいきませんのでお礼を……」

「(そこ)そと机の引き出しを漁り取り出したのは、

「どうぞ。40mmグレネードの空薬莖です。ペン立てにもなりますよ」

「えっ!? あ、うー……」

「何でそんなものが、机の引き出しから出てくるんですか……」

常人の机からそんな物は出てこないし、常人は40mmグレネードの空薬莖をペン立てにしたりしない。

しかし、ひふみは良い子なので、貰った空薬莖を両手で包み込み頬笑みを浮かべる。

「あ、ありがとうございます……た、大切にします……」

「……………」

そんな彼女を見て、うみこさんが何か期待するような眼差しを向ける。い、嫌な予感が……。

「そうだ。今度サバゲーでもどうでしょう?」

「えっ?」

「えっ!」

「安心してください、私がしっかりとサポートを……」

「涼風さん、それにひふみも。そろそろ仕事が始まるから自分の席に戻ったらどうだ?

「ウも待つてるかもしれないし」

「そ、そうですね。確かに今日は、仕事が盛沢山だった気がしますから。ひふみ先輩も行きましょう!!」

「えっ!? う、うん……」

涼風さんが強引にひふみを引っ張って自分の班へと戻っていく。その際、

(ありがとうございます、興梠さん)

(いいってことよ)

俺達だけが分かるアイコンタクトを入れていった。涼風さんも一度、サバゲーマニアのうみこさんに遭遇しているので、分かってくれたみたいである。

二人を見送ったうみこさんは少し残念そうだ。

「うーん、残念ですね。せつかく仲間が増えると思っただんですが」

「あ、あはは……」

「……それでは、次の休みはタケルさんにお付き合ってもらいましょうか」

「こんなボンコツでよければですけど。あと、程ほどにしてくださいね？ 以前、割とき

つかった気がするので」

「それなりに善処します」

「ちゃんと善処してください」

「冗談ですよ」

そこで俺は改めてプログラマー班を見渡す。

「今日、プログラマー班に入りますでしょうか？ 幸い、企画もキャラ班も余裕がありますから」

「本来ならば断わるべきところで何ですが、今日はそのお言葉に甘えてもいいですか？」
「分かりました。コウにも事情を伝えてきますね」

俺はコウのいるデスクへと戻る。……なんか、ドーナツの箱が増えている気がするけど無視しよう。

「コウ。今日、プログラマー班を手伝ってもいいか？ ちよつと人手が足りてないみたいだからさ」

「うん、こつちは余裕があるから全然大丈夫だよ。むしろ手伝ってあげて」

「了解した」

「悪いね。なんか便利屋みたいに使っちゃって」

「いいってことよ」

コウの了解を得られた俺はプログラマー班へと戻り、そのまま空いていた席に腰掛けた。多分、桜さんがいつも使ってる席だろう。

パソコンを起動させ準備をしていると、横に座るうみこさんが話しかけてきた。

「あなたくらいですよ。楽しそうにバグを探す人は」

「えっ？ そんないつも楽しそうな顔してますか？ ゲーム感覚でやっているのは否定

しませんけど」

「他の人に言ったら引かれそうですね。まあ、戦力が増えたので何も問題はないですけど。……桜さんがいればもつと良かったのですが」

「……うみこさんって実は桜さんのこと、かなり認めてますよね？　というか、割と好きですよね？」

「……無駄口をたたかないで下さい」

話しかけてきたのはうみこさんなのですが……まあ、耳が少し赤く染まっていたので恥ずかしがっているだけなのだろう。

これ以上、ツツコむと怒られそうなので俺は目の前の仕事に集中することにした。

☆ ★ ☆

タケルが嬉々としてバグ探しを開始した頃。

「たまに、タケルさんがどこの所属なのか分からなくなります」

「あ、あはは……タケルについては、オールラウンダーだと思ってくれた方がいいかもね。器用貧乏かもしれないけど」

「それ、タケルさんに言ったら怒られますよ。でも、やっぱり珍しいですよね。どうして、タケルさんはあんな色々できるんですか?」

「……まあ、その辺は色々あったからね。マスターアップ後の時間ある時に聞いてみよ。面白い話が聞けるかもしれないからさ」

「面白い話、ですか?」

「うん、面白い話。それじゃあ私たちも自分たちの仕事をはじめようか」

青葉の疑問を他所に、コウは自分のデスクに戻りパソコンを起動させる。脳裏をよぎったのは苦しい出。

その思い出を振り払うかのように彼女もまた仕事へ戻っていくのだった。

名刺の渡し方は教えてもらうまで意外と分からないものである

「そういえば、明日は東京ゲーム展の企業日（ビジネスデイ）だっけ？」
「そうよ。それがどうかしたの？」

とある水曜日の帰り道。俺はりと共に、自宅まで帰っている最中だった。

言っておくけど、別にこいつと帰りたくて一緒に帰っているわけではない。たまたま帰宅時間が一緒になってしまい、時間差をつけて帰るのも変なので仕方なく、一緒に帰っているというわけである。

遅くなつて次の日眠たいのも嫌だし。

「いや、今回は誰が行くのかなつて」

「コウちゃんは、『ひふみん達四人を行かせればいいんじゃない？』つて言ってたわよ。特に、青葉ちゃんにとつてはいい刺激になるんじゃないかしら？」

「確かにそうかもな。一年目の涼風さんは、得るものが一番多そうだし」

俺も一年目の時に、参加させてもらった時は感動した記憶がある。高校の時に行ったことがあったけど、滅茶苦茶混んでたからまともに回れなかったし。

「本当なら、俺も行きたいところだったんだけどな」

「タケルは駄目に決まってるじゃない。マスターアップも近いんだから」
「分かってるって。例えばの話だよ」

「全く……タケルはそういうところで不真面目なんだから」
「うるせい」

今日も今日とて、憎まれ口をたたかれながら帰り道を歩く。

「だけど、私たちが参加したときからもう7年も経つのね」

「確かに。そう思うと月日が経つのは早いもんだな」

「色々あったわね」

「色々あったな」

脳裏に当時の状況がフラッシュバックし、思わずノスタルジーに浸ってしまう。色々というのは、言葉通り色々。

正直、俺にとつては黒歴史ばかりだ。情けない話だけど。

「……ねえ、タケル」

俺の名前を呼ぶ声。感傷に浸っていたせいか、彼女が立ち止まっていたのに気付いていなかったらしい。

「ん？…なんだよ？」

振り返ると、何か言いたげな表情で俺を見つめるりんの姿が。

『……………』

一瞬の沈黙。目があつた時間は恐らく5秒にも満たなかつただろう。

彼女の方からふっと視線を逸らす。

「……ううん、何でもない」

「何でもないって……何か言いたげな顔で黙られると、余計に気になるんだが？」

「気にしなくていいわよ。本当に何でもないことだから。タケルの間抜け顔を見たらどうでもよくなっちゃって」

「酷すぎるだろ。流石の俺でも泣くぞ？」

「ふふつ、冗談よ冗談。ほら、もうマンションについたから」

視線を前に戻すと、俺たちの住むマンションが視界に入ってくる。話している間に、随分近くまで歩いて来ていたらしい。

恐らく、これ以上追及しても彼女は口を開いてくれないだろう。

その後はお互い黙ったまま部屋の前まで歩いていく。

「それじゃまた明日」

「おう。また明日」

そう言って部屋の前で別れる俺達。部屋の中に入った俺は荷物を置き、シャワーを浴

びる。

(また明日か……)

シャワーを浴びながら思い出していたのは、先ほどかけられた彼女からの言葉。昔の俺たちなら絶対にありえない言葉だ。

(……ちつとはましになったのかな)

何がましになったのか……その事をあえて言う必要もないだろう。

☆ ★ ☆

そして、東京ゲーム展当日。

「東京ゲーム展？」

「そう、東京ゲーム展！ 青葉たちに行ってもらおうかなと思ってさ！」

昨日、りと話した通りコウが涼風さんたちに東京ゲーム展について説明をしていた。

「青葉ちゃんたちつてことは、今年も私たちが参加してもいいつてことですか!？」

「うん。青葉はもちろん、はじめ達が参加しても、まだまだ学べることは多いだろうしね」

「ですけど、マスター前なのにええんですか？」

ゆんの心配は最もである。開発も終盤戦に突入しており、一日の遅れが命取りになりかねない状況だ。

しかし、それを差し引いても今日のゲーム展に行く意味は大きい。

「まあ、マスター前で大分厳しいんだけど、その分の遅れは大目に見るからさ」

「これは仕事以上に意味のあることだから、大丈夫よ三人とも」

「仮に遅れたとしてもコウが何とかしてくれるよ」

「……そんなこと言ってる、タケルに仕事の大半を押し付けるからね？」

「いめんささい」

コウにジト目を向けられ、速攻で謝罪の言葉を述べる。俺はコウのようなハイスペックではないので、あの量の仕事を押し付けられたらパンクしてしまいます。

「まつ、というわけだからさ。3人で楽しんできなよ。もちろん、何かを感じ取って帰ってくることを忘れずにね！」

そこまで話したところで、涼風さんが「そういえば」と首を傾げる。

「……でも今日って木曜ですよ？ 普段のゲーム展って土日じゃやってる様なイメージですけど……」

「木金は企業日（ビジネスデイ）ってあって、業界関係者だけが行ける日なんだ」

「知名度は圧倒的に一般日の方が上だからなく。でも一般日と違って企業日はすいてるんだよ」

テレビなどでは会場が人でごった返すような映像が流れたりもしているが、企業日はあそこまでの事にはならない。まあ、この業界にいる特権つてやつだな。

これに慣れちやうと、とても一般の日に行こうとは思えなくなる。

「そんな日があつたんですね！」

「うん。そして本日ようやく、フェアリーズストーリー3のタイトルがメディアに発表されます」

ドヤ顔を浮かべるコウ。彼女がドヤる気持ちも分からなくはない。

ここまで苦労を重ねてきたうえでのメディア発表なので、感慨深いものもある。開発をこれまで頑張つてきて本当によかった——。

「あつ、それゲーム雑誌のリーク画像がネットに出てましたよ！」

涼風さんの言葉に、感慨深さが一瞬で吹き飛んだ。リーク画像許すまじ。

「……うん、知ってる」

「あ、あはは……」

コウもりんも思わず苦笑いだ。ほんと、どうして発表前に漏れてしまうのだろうか？
出すなら出すで、せめて発表直後とかにしてくれないかな。

現場にいる人間としてはショックが何倍も違うんだし。出てしまったものは仕方ないんだけどさ！

「それで青葉には、チケットだけじゃなくてこれも渡しておこうと思って」

コウが取り出したのは涼風さんの名刺だ。そういえばまだ渡してなかったね。名刺を受け取った涼風さんは感激に瞳を輝かせ、

「これでようやく、社員として認められたってことですね！」

「必要になるまで刷らなかつただけだから」

思わず昭和のコントばりにずっとこけそうになった。涼風さんって、たまに抜けてる気

がするのは気のせいじゃないだろう。

涼風さんは正社員だし、名刺がないからって社員と認められないわけがないんだけどな。

「じゃあ青葉ちゃん、名刺交換しようか」

「あつ、是非！」

得意げな表情で名刺を取り出すはじめ。自信満々なのはいいけど、果たしてちゃんとできるのだろうか？ コウがきちんと教えていけばいいんだけど……。

先輩として情けない話だけど、俺は名刺交換を教えた記憶はないし。いやでも、はじめも二年目だし流石に大丈夫でしょ。……大丈夫だよね？

「じゃあ、えつと……………」

「……………」

あつ、ダメそう。なんかもの凄い間が空いてる。後、冷や汗が凄い。

ハラハラとしながら、彼女の名刺交換を見守っていると、

「……篠田はじめです!!」

バツと、すごい勢いで名刺を差し出すはじめ。これは勢いだけで何とかしようとしているのがよく分かる。

これは反省をしなければいけない。もちろん、名刺交換を教えなかった俺たちが。

「あつ、えつと……」

一方、名刺を渡された涼風さんは、どうしたものかとおろおろしている。まあ、彼女は一年目だし、分からないのも当然か。

俺も最初は、無茶苦茶な名刺交換してたし。そのまま見守っていると、涼風さんは何を思ったのか自分の名刺を一度机の上に置くと、

「いただきますー!」

両手ではじめから名刺を受け取った。きつと、両手で受け取らないと失礼だと思っ

たんだろうな。

はじめははじめで、ホツとした表情を浮かべてるし……。やっぱり分かってなかったか。

「後輩に間違えたこと教えないでよ」

冷静にツッコむコウ。しかし、そんな彼女に後ろからゆんの声がかかる。

「そういえば、私も知らへんです」

「えっ、なんで……」

首を傾げるコウに、俺はそつと耳打ちする。

（多分だけど、教えてなかったんじゃないか？ 少なくとも俺は教えた記憶ないし）

（あ、確かに。というか、私が教え忘れてただけだと思う）

（やっぱり……こりや、りんも含めて後で反省会だな）

（ま、まあ、この機会にちゃんと教えてあげればいいでしょ！）

そういつてコウは「こほんっ」とわざとらしく咳払いをし、

「それじゃあこの機会に上司として、社会人のマナーを教えてあげよつかな！」

「ほんとは、忘れてただけなんじゃないですか？」

「うるさいよ！」

見事、凶星をつかれていた。コウの顔が若干赤く染まる。

「まあいいや。それじゃあサクツと名刺交換の仕方を教えちゃうから。私と同じように自己紹介して差し出してね」

「分かりました！」

元気よく返事をする涼風さん。その姿を見てコウはニッコリと微笑むと、彼女へ向かって名刺を差し出す。

「株式会社イーグルジャンプの八神コウと申します」

「え、えっと、株式会社イーグルジャンプの涼風青葉と申します」

「よろしくお願いいたします」

「よ、よろしくお願いいたします」

コウと名刺を交換し、「できました！」と目を輝かせる。うん、これで名刺を交換する機会があつても大丈夫だろう。

名刺交換自体、慣れみたいなどころもあるしな。

「名刺交換のやり方も教えたし、早速3人でゲーム展へ行つてきな。私たちはマスター前で余裕がなくて行けないけど、せめて私たちの分まで楽しんできなよ」

「そうそう、遠慮なくな。ひふみはもう行つてはるはずだから、現地で合流になると思うけど」

何をするのか知らないけど、ひふみにしては随分と張り切つていたからな。気になつてるゲームの発表でもあるのかもしれない。

ほんと、俺もマスター前じゃなければ有給を取つても言つただけけど……。

「分かりました。それじゃあ、八神さんたちの分まで楽しんでくることにしますね！」

「うん。それとさつきも言った通り、学んでくることも忘れずにね。……はじめが若干心配だけど」

「どういう意味ですか!？」

「言葉通りだよ」

「酷い!!」

「確かに。はじめは遊んでばっかいそうやもんね〜」

「ゆんまで!!」

あははっ、と笑い声が広がる。はじめには悪いけどゆんの言う通り、全力で遊んでいゑる姿が容易に想像できる。しかも、滅茶苦茶目立ってそうなのがまた面白い。

「あつ! あおっち、ゲーム展行くの!？」

「ねねっち……ってなにしてるの?」

声のした方が目を向けると、そこにはなぜかパソコンを運ぶ桜さんの姿が。その後ろにはうみこさんの姿も。……また何かやらかしたのか。

「うみこさん、彼女は何をしてるんですか？」

「あまりにも落ち着きがないので、私の隣でデバッグをしてもらうことにしました」
「そ、それはそれは……」

自業自得というべきか、因果応報というべきか……いずれにせよ、これまでよりは集中できる環境になっただろう。

うみこさんが横にいると、嫌でも背筋が伸びるしな。

「それじゃあ、桜さんはこの後もデバッグを？」

「もちろんです。今は時間がいくらあっても足りませんから」

「えっ!? う、うみこさん、私もゲーム展へ行き——」

「だめです。バイトの分のチケットはありません」

桜さんの希望を速攻で打ち砕くうみこさん。

行かせてあげたいのは山々なんだけど、アルバイトの分までチケットを用意するときがなくなっちゃうしね。

「なので、桜さんはお留守番です」

「ええー、そんなあ!!」

「私も忙しくていけないんだから我慢してください」

「うわーん! あおっぢ〜!!」

残酷に言い放ったうみこさんに泣き言は通用せず、そのままずると引きずられていく桜さん。……後でプリンでも差し入れてあげよう。

そんな彼女を見送った後、改めてコウが口を開く。

「……あんまりのろのろしていると遅くなっちゃうから。ほらっ、行った行った」

「は、はい。分かりました」

というわけで、若手三人がゲーム展へ。

「それじゃあ残った私は引き続き、開発を進めていこうか。マスターアップは近いわけだしね!」

残った俺たちはそのまま仕事へと戻っていくのだった。

☆ ★ ☆

そしてゲーム展に行ってきた三人が戻ってきたのだが、

「おかえり〜。どうだった」

「あの……頑張ります」

「えっ?」

「さ、働いで!」

「ゲーム展行った分の遅れを取り戻さない」と

「う、うん。お願いね」

今までにないくらいやる気に満ち溢れた表情で、自分の仕事へ取り組み始める三人。これまで真面目に取り組んでいたんだけど、明らかにやる気の満ち溢れ方が違う。

涼風さんやはじめはともかく、ゆんも分かりやすく気合が入っている。それを見ていた俺たちは顔を見合わせ、

「ほんと、分かりやすいね」

「だな」

「いいことじゃない。マスター前にあのやる気は頼もしいわよ」

確実に何かを得て帰って来てくれた三人に思わず笑みを浮かべたのだった。

「ところでひふみんは？」

「あつ……」

ひふみさんはゲーム展を存分に楽しんでいました。

慣れない言葉は時として人の感情をごちゃごちゃにするものである

さて、いよいよマスターアップ直前の日となっていた。この日に至る直前に、涼風さんと桜さんが若干グクシヤクしてしまったりといったことがあったものの、今では普段通りの関係に戻っている。

些細な口喧嘩が原因とはいえ、いつまでもグクシヤクしたままだとお互いに影響が出ていたかもしれないからな。すぐに仲直りできたみたいで本当によかった。

……仲直りした直後に桜さんが、うみこさんのパソコンのコンセントを足で引っこ抜いたことは黙っておいてあげよう。彼女の名誉のためにもな。

「八神さーん。エラー報告のあった個所の修正終わりました」

なんてことを考えていると、涼風さんがコウの机に顔を出す。どうやら指示されたところの修正が終わったらしい。

「お疲れ。じゃあ後はデバッグしてて」

「分かりました。それにしても……なんだか明日がマスターアップって感じがしませんね。平和というか、いつも通りというか……」

「平和が一番だよ。何もなければそれに越したことはないんだし」

「タケルの言う通り。それに、今回はりんがスケジュール管理をしてくれたからね。だからある意味、平和なのは当然だよ」

「ふふっ、嬉しいこと言ってくれたありがと。でも、これだけ平和だと何か事件が起こる前触れみたいよね」

笑いながら物騒なことを言うりん。冗談でも余計なことを言わないでくれ。いわゆるフラグってやつがたつちやうから。

「わざわざ変なフラグ立てないでよ!!」

コウもフラグと言っているの、恐らく同じことを考えていたのだろう。まあ、ゲームを嗜むものとして、りんのセリフはあまりに危険すぎるからな。どうやったって逃れられないカルマを感じる。

「まあ、そんなことはいいとして、タケルつてもう自分のやれることって大体終わった？」

「うん、大体は終わったかな。どうかしたのか？」

「いやー、さつきプログラマー班を覗いたんだけど、なかなか酷い状態になってたからさ。助太刀に行ってもらえないかなって」

「そんなことならお安い御用だよ。俺もそろそろ、バグを探したいなって思ってた頃だったから」

「タケルさん、それは絶対におかしいですって……」

はじめに呆れながらツッコまれるも、俺自身大して苦だと思っていないので仕方ない。そのまま俺は飲み物を持って席を立つ。

「それじゃあタケル、お願いね」

「任された」

言われた通りプログラマー班の所へ行くと、どよんとした空気が流れており、コウの

言う通り酷い状態となっていた。

ぱっと見、元気そうなのは桜さんぐらいだ。あのうみこさんですら、目の下にクマをつくてるくらいだし。若いつて素晴らしいな。取り敢えず二人の元へ歩いていく。

「あ、あのく、うみこさん？」

「……何ですか」

「指定個所のデバッグについてなんですけど……」

「停止バグでもありましたか？」

「……正解」

ドンッ！

「ひいっ！ ごめんなさい!!」

うん、予想以上に酷い状態だったわ。俺もビクツとしちやったし。

「大丈夫っすかうみこさん？」

「……タケルさんでしたか。すみません、お見苦しい姿を」

「まあまあ、この忙しさじゃ仕方ないですよ」

「ありがとうございます。それであなたは何を？」

「コウに言われて手伝いにきたんですよ。酷い状態だつて言われたんで」

「酷い状態と言われて、否定できないところが辛いですね。正直、人手は一人でも増えたほうがいいので、お手伝いをお願いしてもいいですか？」

「元よりそのつもりなので大丈夫ですよ。それじゃあ空いてる机、借りますね」

適当な机を見つけて腰を下ろす。さーて、今日も頑張つてバグを探しましょうか。

「……うみこさん、タケルさんつて毎回嬉しそうにバグを探してますけど、もしかしてマゾなんですか？」

「薄々、私もそうじゃないかと思つていたんです。珍しく気が合いますね」

「二人とも、聞こえてますから」

「私は冗談ですよ。桜さんは知りませんけど」

「ちよ、ちよつとうみこさん!!」

桜さんの絶叫を軽く受け流したところで、うみこさんが財布から一万円札を取り出す。

「あ、後今日は泊りになります。これで皆の分の栄養ドリンクなどを買ってきてください」

「イエッサー」

ビシッと敬礼を決める桜さん。その姿をうみこさんはじつと見つめ、

「……心配なので涼風さんも一緒に」

「信じてくださいよー!!」

こういうところでは、まだいまいち信用されていないみたいだ。そんなこんなで差し入れを買いに行く桜さんを見送り、俺とうみこさんは再び仕事へと戻る。

「桜さんがいると退屈しませんね」

「騒がしいの間違いですよ。……まあ、確かに現場は明るくなりましたけどね」

「あの底抜けの明るさはたまに救われますよ。まだ学生ですけど、早めにスカウトでもしたらどうですか？ 実力だって申し分ないわけですし」

桜さんの評判はちよくちよく聞いている。バグの報告を細かく入れてくれたり、実際企画なんかからの評判もいいみたいだ。

本人もなんだかんだこの職場を気に入ってくれているみたいだし、今から声をかけておいたつていいと思うんだけど。

「……既に葉月さんには進言してありますよ」

「あつ、そうだったんですか」

意外な返答に俺が驚きの表情を浮かべると、うみこさんは恥ずかし気に視線を逸らす。

「ま、まあ、私も評価してないわけではないですから」

「……二回目ですけど、絶対うみこさん、桜さんの事好きですよね」

「……………」

パンパンパンツ

照れ隠しにエアガンを乱発されました。その後は真面目に仕事を続けること30分。

「戻りましたー!」

元気な声とともに、桜さんと涼風さんが戻ってきた。二人の手には差し入れ用に買ってきたお菓子やらジュースやらの袋が握られている。

「おかえり〜」

「買い出しありがとうございます。……それは？」

「うみこさんはこれだと思って!」

桜さんが手にしていたのは「ケロリン大魔王」とパッケージに描かれている栄養ドリンク。

あれは飲まなくても分かる。めっちゃくちや疲労に効くやつだ。そんな栄養ドリンク

をうみこさんは手に取り、

「よく分かりましたね。もうこれじゃないと疲れが取れないんですよ私……つて、そんなわけではないでしょう!!」

「うみこさん、テンションおかしいよ!」

やっぱり、深夜まで作業していると頭がおかしくなるみたいだ(白目)。きちんと休みを取るって大事。うみこさんのノリツツコミなんて初めて見たぞ。

ちなみにノリツツコミの後は、領収書じゃなくてレシートを貰ってきてしまったことを怒られたり、ケロリンをみんなで飲んだりしました。

ケロリンを飲んだ後は眠気もスッキリ。正直、レッドブルより効いた気がした(小並感)。

☆
★
☆

そして、深夜の作業も無事終了し、マスターの確認もできた。

部屋には俺とコウ、それにりんの同期三人組が残っているだけ。他のみんなは既に帰宅している。別に帰ってもよかつたんだけど、何となく名残惜しくて残ってしまった。

もしかすると、コウとりんも同じなのかもしれない。

「いやー、今回もどうにかこうにか無事に終わったね〜」

「ほんとにな。正直、まだ終わったって感覚がないんだけど」

「それは言えてるわね。……この後、致命的なバグが見つかったりして」

「だから、フラグ立てるのはやめてってよりん！」

「ふふっ、冗談よ」

「冗談でも言っていない冗談と、悪い冗談があるぞ……」

この期に及んでフラグを立てようとするりにツツコミを入れる。このタイミングで致命的なバグって、絶望以外の何物でもない。

というか、会社の存続にも関わってきそう。

「それにしても、青葉もこの半年で馴染んだよね」

「言われてみると……初めからいたって言われてもおかしくないかもな。他の皆と仲良くなるのも早かったし」

「青葉ちゃんのコミュニケーション能力がなせる業なのかしらね？」

「……私は、入社して結構長いこと馴染めなかったからなく。少し羨ましいよ」

コウが少しだけ自虐気味に呟き、表情にも影が差す。そんな彼女の言葉を聞いて俺は、

「ごめんな」

ほとんど反射的に謝っていた。

なにに対してごめんと言っているのか……恐らく過去、自分の犯した過ちに対してだろう。

今までは何とか蓋をしていた申し訳なきが、彼女の言葉によって溢れだしてしまっ

「いめん……」

あの時、俺が先輩と一緒にになってコウをいじめていなければ、彼女はもつと早く会社に馴染めたはず。

仕事での成果だつてもつと良くなっていたかもしれない。

二人と普通に仕事ができるようになるにつれ、申し訳なさはどんどん大きくなっていった。

『……………』

暗い顔をして首を垂れる俺の姿を二人はしばしの間見つめ、

「……………っ!? いひゃいひゃい!!」

何故か同じタイミングで両頬を摘んで引っ張つてきた。突然の事に困惑する俺。

「全く、タケルって思いのほか繊細というか、昔の事を引きずるタイプというか」

「ほんとよね。男がなよなよする姿はあまり見せないほうがいいわよ」

少し怒ったような顔をするコウと呆れた眼差しを向けるりん。

「昔の事を引きずるってのは私も同じだけどさ、前にも言ったよね？ その時の事はもういいって」

「ま、まあそうだけどさ……」

歯切れ悪く彼女から目を逸らす。確かに言われた。だけどやっぱり簡単には気持ちの整理ができなくて……。

「そもそも、あの時の事は私にだって原因があるんだよ？ 生意気だったし、口下手だったし……多分、タケルの神経を逆なでするようなことも言ってたと思う」

「……いや、あの時は俺がお前の言葉を曲解してたからさ。悪いのは全部俺——」
「だーかーら!!」

少し声を大きくし、再び頬を引つ張ってくるコウ。普通に痛い。めちゃくちゃ痛い。

ほつぺたが取れそうだ。

「タケルの悪いところだよ？ 何でもか何でも自分を悪く言うところ。自分で自分を認められないところ。もうちよつと自分を認めてあげてもいいんじゃない？」

「……………」

「もう、困ったなあ。…………それじゃあとつておきのこと。一度しか言わないからよく聞いてね」

俺の瞳を改めてじつと見つめ、

「私はタケルの事、すごく信頼してる。タケルになら安心して仕事を任せられる。タケルの作ったストーリーなら、私は自信を持って自分の仕事ができる。…………これだけ言うてもまだ不十分？」

真っ直ぐな彼女の言葉が、じんわりと心の中に沁み込んでいく。早くコウに返事を…………。

しかし、何か言おうにも言葉にならなくて…………しばらくの間、何も言えずに黙ってい

るとコウが焦ったような声を上げる。

「ちよ、ちよっと！ ポカンとしてないで、何か言ってよ！ 結構恥ずかしかったんだよ
!？」

「ご、ごめん。ちよつとびつくりしすぎたというか何というか……」

「全くもう……それで、どうだったの？」

「もちろん、十分すぎるほどだったよ」

「ほんと？」

「ほんと。……だから、そろそろ引つ張るのをやめてくれない？」

「嫌。まだ本当に自分を認めてるか分からないから」

地味に痛いんだけどな。

「ところで、りんは？」

「……えっ？」

「りんからも何かないのになって。思う所は色々あるんじゃない？」

コウが話を振ると、りんは少しだけ考えるような素振りを浮かべる。

「そうね……私はあの時の事を百パーセント許したわけじゃないわ。コウちゃんと違って、どうしても割り切れない部分もあるから」

「……悪かった——」

「でもね、私だってコウちゃんと一緒。あなたの事を認めてないなんて一言も言っていない」

力のこもった言葉に思わず顔を上げる。

「あなたにどんな心境の変化があったのかは分からない。だけどあの時、関わった人中であなただけは変わった。気付いてないかもしれないけど、タケルの努力はずっと見てきたのよ？」

「お、おう……」

「偉そうな言葉かもしれないけど……変わった事実まで否定したら、それはあなたの努力を否定することになる」

「りんの言う通り。タケルが必死になって頑張ってきたのはちゃんと隣で見てたから」

さ。もちろん、りんと一緒にね」

「確かに認めてはいるけど、別に隣でつてわけじゃ……」

にひっと笑顔を浮かべるコウに、若干不満げな表情を浮かべるりん。

「それにしても珍しいね。りんがタケルの事をそこまでフォローするだなんて。ちよつとびつくりしちゃった」

「ほんとよ、何が楽しくてタケルの事を慰めてるのか……まあだけど」

俺を見つめる彼女の眼差しが少しだけ優しくなる。

「だからこれだけは覚えておいて。あなたの事は確かに嫌いだけど……誰かの為に頑張れる、その姿は嫌いじゃないから」

言い慣れない言葉に恥ずかしくなったのか、プイツとそっぽを向くりん。

一方俺は、普段ならかけられることのない優しい言葉の数々に、ポカンとした表情を浮かべるだけだった。

そんな俺たちを見ていたコウが笑い声をあげる。

「あはは。りんつてば、今セリフ、ツンデレみたいだったよ？ 特に最後の嫌いじやないからつて、言葉が最高にツンデレっぽかった！」

「だ・れ・が、ツンデレよ!! タケルに対してツンとすることはあつても、デレるなんて絶対じゃない話!! 虫唾が走るわよ!!」

「流石にそこまでは言い過ぎじゃ……タケルからも何か言つて——」

コウの言葉が突然途切れる。

「……まったく。どうしたの？」

「いや……歳を取ると涙腺が緩くなるなつて」

「歳つて、まだ私たち25だよ？」

気付くと、俺の瞳から熱いものが溢れてきていた。

そんな俺の姿を見てコウが一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐに引つ込めニヤニヤとした笑みをりんに向けた。

「りんつてばタケルのこと泣かした。葉月さんに言いつけてやろつと」

「ちよっ!? コウちゃん!! 小学生じゃないんだから! そもそも、私はタケルの事を泣かしたかったわけじゃ……というか、タケルは何で泣いてるのよ!」

「いや、全く分かんない……」

「わかんないつて、それじゃあ、本当に私がタケルをいじめて泣かせたみたいじゃない!」

「りんつてば、タケルに酷いこと言つてたもんね。これはタケルも傷ついて当然かもね」

「あ、あれは言葉の綾というか何というか……」

「あははっ!」

二人の会話に俺は、涙を流しながら笑い声をあげる。自分でもどうして涙が出ているのかよく分からなかった。

多分、二人から優しい言葉をかけてられて無意識のうちに泣いていたのだろう。それと、やっぱり努力を認められたことが一番嬉しかったんだと思う。

自分の犯した過ちの償いとはいえ、誰かに見て欲しかった。誰かに認めてほしかった

た。

その努力を、一番認めてほしかった二人に認めてもらえたから。だから……涙が出てきているんだと思う。

「ちよ、ちよつとタケル！ いい加減、泣き止みなさいよ!!」

「ご、ごめん……だけどなかなか止まらなくて」

「あーあ、もうちよつとりんが優しく慰めればタケルもこんなに泣かなかつたのに」

「あんなの、普段に比べれば大分抑えたほうよ！」

「それじゃあ、普段の暴言が積もり積もってタケルを傷つけてたって感じだね。りんってば、それも計算して罵倒してたとか？」

「だから違うわよ!!」

「あははははっ!!」

「タケルは笑うか泣くかどっちかにしなさい!!」

もしかすると、俺はずつとこの姿を望んでいたのかもしれない。同期三人で笑い合う、そんな姿を。

☆ ★ ☆

帰り道。部屋が隣通しの私たちは、マンションまでの帰り道を何気ない話をしながら帰っている最中だった。

隣を歩くタケルの表情は凄くスッキリしている。……スッキリというよりは、憑き物が落ちたと言ったほうが言い得て妙かもしれない。

逆に言うと、彼がああの時の事をそれほどにも気にしていたということにもなる。

(私も忘れたわけじゃなかったけど、あんなに気にしていたとは思わなかったわ)

むしろコウちゃんの方が気にしていなかったくらい。普通は逆のような気がするんだけど……。

なんて考えているうちにお互いの部屋の前へ。いつものように軽く挨拶をして部屋に入ろうとしたところで、

「ありがとな」

タケルが笑顔を浮かべる。彼の笑顔はこれまで見てきたけど……初めて見た笑顔だった。

「……何よ。急にお礼なんて」

「いや、ただ何となくな」

「バカみたい。それじゃあまた明日ね」

そう言っつて私は扉を開け部屋の中に入る。

ほんとバカみたい。

あいつも……あいつの笑顔を見て波打ってしまった私の心臓も。

家族の襲来は往々にして突然起こるものである

「ふう……」

ゴミ袋を回収ボックスに入れた私は、小さくため息をつく。

現在の時刻は朝の8時。本来であれば会社へ行くための準備をしている時間なのだが、今日は違う。

「マスター後の休みをもらったのはいいけど、思いのほかやることもないわね」

夏休みがない代わりに貰う休みののだが、世間一般の休みとずれているため友達と時間が合わないのも困りものだ。休みが合えば、久々に会いたかった友達とかもいたのに。

ちなみに、コウちゃんは私より早く休みをもらっているため、今頃会社に行く準備をしている頃だろう。……さっき電話したから大丈夫だと思うけど。

仕事がり落ち着いている時期ではあるのだが、流星に全員が一斉に休むわけにはいかな

いので、前半組と後半組に分かれてとっている。

厳正なくじ引きの結果、私は後半組でコウちゃんも前半。くじ引きの結果とはいえ、少し結果を恨んだことは内緒。

タケルは私と同じ後半組。ほんと、変わってくればよかったのに。私の気持ちなんて知らずに今頃、間抜けに寝入っている頃だと思うけど。

(まあいつまでもズルズル引きずってるのもよくないわね……つて、あら?)

首を傾げる私の視線の先には見たこともない女の子の姿が。大学生くらいかしら? あんな子、このマンションにいた記憶がないのだけど……。

私の疑問を他所に、女の子はエレベーターのボタンを押しその中へと消えていった。

(まあ、きつと誰かの彼女さんだったのね)

勝手に納得した私は、部屋に戻るためエレベーターのボタンを押す。

(……あら? 私が住んでいる階と同じ階で止まっていたわね)

単なる偶然だとは思うけど……なんて思いながら私もエレベーターへ乗り込む。そして、自分の階で止まったエレベーターから降り――

「っ!？」

その女の子がいた。しかも、タケルの部屋の前に。めちやくちやインターホンを連打している。正直、不審者にしか見えない。

(ま、まさかタケルの彼女だったなんて……でも、あいつに彼女なんていたかしら?)

マスター後に開かれた飲み会では「彼女がいなくって嘆いてた気がするけど……。そもそも、彼はコウちゃんの事が好きだったはず。

(……………それにどことなくタケルと似た雰囲気を感じるような)

気になって見つめすぎたのがいけなかったらしい。

「………?」

「っ!?!」

その子と思いつきり目が合ってしまった。どういうわけか、身体が固まってしまふ私。お互いに見つめ合う事10秒ほど。

「………つたく、うるせーぞ。誰だよ一体………って、カナデじゃん。来るときはあれほど連絡を入れろと………あれ? りんもそこで何してんだ?」

正直、タケルが起きてきてくれて助かった。

☆ ★ ☆

「なるほどー! 職場の同僚さんだったんですね。誰かと思っちゃいました!」

「ごめんなさいね、ちよつと驚かせちゃつて。まさかタケルの妹さんだつて思わなかったから」

納得した様子で相槌を打っているのは俺の妹である興梠カナデ。そしてその隣には、なぜか部屋の前で我が妹と見つめ合っていたりん。

正直、どうしてりんまで部屋にあげてしまったのか。コレガワカラナイ……まあ、カナデが『一緒に一緒に!!』といって聞かなかつたからだけど。

ちなみにカナデは都内の大学に通う女子大生だ。普段は実家から大学へ通っている。

「カナデちゃんはちよくちよくタケルの部屋に来たりするの?」

「はい! 兄さんが休みの時を見計らつて! まさか隣に職場の同僚の方が住んでいるなんて思いませんでしたけど」

「私も、まさかタケルにこんな可愛い妹がいるだなんて思わなかつたわ」

「えへへ。私もまさか兄さんの職場にこんな美人さんがいるなんて思いませんでした」

「うふふ、タケルと違ってカナデちゃんは本当に良い子ね」

目の前で百合百合な空間が出来上がっている。俺は完全に蚊帳の外だ。いや、別にいいんだけどさ。

「というか、さつきも言ったけど来る時にはあれほど連絡しろと」

「したよー。でも既読も何にもつかないから、まあいいやつて思ってた。どうせ徹夜でゲームでもしてたんじゃよ？」

「……………」

「凶星なんだ。これだからゲーマーは…………だからモテないんだよ？」

「モテないは余計だ」

「…………タケルつてば、休みだからって好き勝手し過ぎよ。もっと規則正しい生活をしろよ」

「いいだろうが。休みなんだから」

逆りにんみみたいな規則正しいタイプの方が珍しい気がする。…………珍しいよね？

「まあ、今回の事は俺が悪かったってことで……………それで、我が妹は何をしにきたんだ？」
「何って…………ゴミいちゃんのお世話に決まってるじゃない」

「ゴミいちゃんって……」

某ラノベ主人公じゃないんだから。俺はあんなに目は腐ってないし、ひねくれてもないぞ。

そもそも、25歳にもなって妹にお世話される方がよっぽどやばい気がする。

「実際にゴミいちゃんじゃん！ 部屋も汚いし、洗濯物も溜まってるし、カップラーメンの空箱ばかり台所にたまってるし」

「そ、それは……」

「確かにそれはゴミね。とても人間とは思えないわ。ゴミブリ以下よ」

「オイコラりん。お前の言葉は普通に悪口だから」

部屋が汚かったり、やたらカップラーメンの空き箱があるのは丁度面白いゲームに熱中しすぎたからで……。長期休みじゃなければ、こんな惨状にはなっていない。というか、ゴミブリ以下流石に酷すぎる。

「とにかく、こんな部屋にいたら変な病気にかかっちゃうからサクッと掃除しちゃうよ

！ 兄さん、掃除用具は？」

「あそこの棚の中だよ。あつ、りんはもう帰ってくれていいからな」

「……私も手伝うわよ」

「えっ？ いいよ。俺の部屋んだし」

「ここまでできて「はいそうですか」なんて言えないわ。それに、今日は予定があるわけでもないから」

そういつて軽く腕まくりをするりん。俺はそんな彼女を見つめ、

「……お、お金はいくら払えばいいんですか？」

「一円たりともいらぬわよ!!」

怒られました。いやだつて、普通に怖いじゃん。りんが何の見返りもなく掃除を手伝ってくれるつて。ちよつとお金を使い過ぎちやつたクレジットカードの請求くらい怖いよ。

しかし、ここで余計なことを言えばもつと怒られるので俺は彼女の好意を素直に受け取ることにした

「じゃ、じゃあ、手伝ってもらえると助かります」

「初めからそういえばいいのよ、全く」

何はともあれ、りんも含めた三人で掃除をすることに。流石、人数がいるとあつという間に事が進むということで、掃除は小一時間ほどで終わった。

「ふう〜、お茶がうまい」

「ほんとね。カナデちゃん、私の分までありがとう」

「いえいえ〜、それほどでも〜」

今はカナデが淹れてくれたお茶を飲みつつ、部屋でくつろいでいるところだった。りにすつかり懐いたカナデは、頭を撫でられふにやつとした笑みを浮かべている。

そもそも、うちに急須なんてあったんだな。どうして家主が知らなくて、たまにしか来ない妹が知っているんだらう？

「それにしても、やっぱり掃除をすると気分まで明るくなるよな」

「だったら最初からやりなさいよ。あそこまで汚くなるなんて、ほんと信じられないわ」
「なかなか時間もとれなくてな」

「どうせ時間のある時はゲームばかりやってるくせに」

「うるせい」

「……………」

「ん？　どうかしたか、カナデ？」

不思議そうな顔をしているカナデに気付き俺は視線を向ける。

「いやー、なんというか……………」

「うん？」

「兄さんたちって付き合ってるの？」

『はあっ!?!』

俺とりんの言葉が重なった。どこをどう見ればそんな結論になるのか。その結論に至った理由を教えてほしい。

「うわっ！ びっくりした。そんな驚くこと？」

「お、驚くも何も俺とりんが付き合ってるなんてありえないから」

「ほんとよ！ 私がこいつと付き合うなんて絶対にありえないわ！ それこそ天地が

ひっくり返つてもね!!」

「いやいや、それはこつちのセリフだから！」

「……滅茶苦茶仲いいじゃん」

『仲良くない!』

「……そういう所だよ」

！
呆れた眼差しを向ける我が妹。そういう所も何も、俺たちはそんな関係じゃないから

「そもそも、付き合つてもないのにどうして隣同士の部屋に住んでるの？」

「いや、それは、たまたまというか……」

「そ、そうね、本当にたまたまなのよ」

「たまたまねえく？ まあいいや、これ以上は詮索しないであげる。私には関係のないことだしね。ところで兄さん、この家にお菓子とかはないの？」

「昨日俺が全部食べちゃったから何にもないよ」

「ええー！ こんなに可愛い妹が来てお菓子の一つもないの!？」

「自分で可愛いっていうなよ……ないものはないぞ」

「買ってきてよ、兄さん」

「嫌だよめんどくさい。だったら自分で買ってこいよ」

「……兄さんが中二の頃——」

「今すぐ買ってきます！」

俺はその辺に置いてあった財布を掴み、ジャンパーを羽織る。

「いいか、今から買ってこくるけど、さっきの事は絶対に言うなよ？」

「それはフリと受け取っていいのかな兄さん？」

「フリなわけねえだろ！ とにかく、何も言うんじゃねえぞ!？」

「分かってるって。ちなみにお菓子の他にジュースもね」

妹の声を背中で受け止めつつ俺は部屋を出る。畜生、あいつ余計なことばかり覚えていやがって……。

心の中で悪態をつきながらもコンビニに向かう俺だった。

「りんさん、ちよつと聞いてもいいですか？」

タケルがお菓子を買って行ってから数分の事。カナデちゃんの方から声をかけてきた。正直、さつき恋仲を疑われたから何を言われるか……。

「え、ええ、構わないけど。何のこと？」

「……兄さんの事です」

「タケルの？」

「こくと頷くカナデちゃん。タケルの事で私に聞きたいことなんて、何かあるのかしら？」

「その、兄さんは……無理してないですか？」

その一言で、何となくカナデちゃんが今日、ここに来た理由を察した。

「……タケルは、昔から無理をする性格なの？」

「無理をするっていうよりは、周りが見えなくなるっていうほうが正しいかもしれない」

そこから聞く話はおおよそ、フェアリーズストーリー2の制作時と同じようなものだった。

「あれは兄さんが高校2年生の時なんですけど、うちの父が病気で倒れてしまったんです。幸い後遺症とかは何もなくて、今は元気に元の会社に通っています。だけど倒れてしまった後が問題で——」

カナデちゃんの表情が一層と暗くなる。

「その時、『父さんが働けなくなった分まで俺が働くから』ってバイトを始めたんです。別に始めるのは良かったんですけど……」

「……周りの制止も聞かず、働きまくって倒れたってところかしら？」

「半分あたりです。倒れるまではいかなかったですけど、倒れる寸前だったって感じですよ。当時の兄さんの友達が無理やり保健室に連れて言ってくれて……結局、学校も一週間近く休みましたからね」

ほんと、まんまあの時と同じ。あのバカはほんとに……。

「……タケルってば、その時から何も学んでないじゃない」

「あ、あはは、ほんとそうですね。まさか社会人になってから同じことをするなんて思っていないませんでしたから」

自虐気味に笑うカナデちゃん。

「別にあの時だって、あんなに無理をする必要なんてなかったんです。確かに家計へのダメージは大きかったですけど、貯金だって多少はありましたし。昨日今日で生活が行き詰まるわけではなかったんです。……ほんとにおバカですよ？」

「……そうね、本当におバカねあなたの兄さんは」

誰かの為に一生懸命になれる、そんな姿は昔から何も変わっていないみたい。だけど……頑張り過ぎにもほどがあるのよ。あの時だつて——。

『タケル、あなた相当顔色が悪いわよ。やっぱり早く帰つて休む——』

『大丈夫だつて。それに、お前も他の皆の同じくらい忙しいんだから俺だけ呑気に休めねえよ!』

『でも……』

『大丈夫大丈夫。お前が思つてるよりも俺は頑丈だからさ』

あの時もっと必死に止めておけば……今でも後悔している。

「……でも、少し安心しました」

「安心?」

「兄さんの話に出てくる人が本当に素敵な人だったので」

「話に出てくる?」

「はい。実家に帰つてくるとたまに話してくれますよ。会社の事について色々。その中でも特にりんさんと、八神さんの事が多いですね」

「ちなみに、タケルは私たちの事をなんて？」

ちよつと気になったので聞いてみることにした。

「そうですね……八神さんの事はいつも『あいつは凄い。本当に天才だよ』とか『あいつはちゃんとした格好をすればすごく可愛くて——』とか言っていましたね。正直後半については話し出すと長くなるので適当に頷いてますけど」

苦笑いで答えるカナデちゃん。あいつはほんと、コウちゃんの事になると……ブーメランとか思ったやつ、怒らないから出てきなさい。

「だけど、兄さんは本当に八神さんの事を尊敬してるんだなって思いました。ちよつと尊敬の度合いが過ぎる気がしますけど」

「まあ、タケルにも色々あるのよ。……それで私の事はなんて？」

「りんさんの事はですね、『ほんと、あいつは口うるさい』とか『いつも突つかかってきて可愛くない』とか」

あいつ、自分の家だからって好き放題……帰ってきたらお仕置が必要みたいね。すると、カナデちゃんが私を見つめて微笑んでいるのに気付く。

「どうかしたの？」

「いや、実はその言葉の後が面白くてですね。兄さんはりんさんのことを悪く言ってるようで、いつも最後に『だけど、滅茶苦茶尊敬してる』ってぼそって言うんですよ？尊敬してるなら、最初からそう言えばいいのに」

彼の意外な言葉に私は内心で驚く。正直、もつとボロクソに言われてるもんだと思っただから。でも、尊敬してるか……。

「ふふつ、カナデちゃんの言う通りね。ほんと、普段もプライベートも素直じゃないんだから」

「……………」

「ん？ どうかした、カナデちゃん？」

「い、いえ！ 何でもないですよ。……素直じゃないのはお互い様かも」

最後の言葉は聞き取れなかったけど、タケルの可愛げのあるところが知れたので満足だ。

その後はタケルの帰ってくるまで、カナデちゃんとのんびり話していたのだった。

☆ ★ ☆

「……ねえ」

「ん？ どした？」

カナデが帰った後、なぜか部屋に居座っていたりんから声がかかる。

「あなたって、昔から無理する性格なの？」

「……カナデから聞いたのか？」

「そうよ。……それでどうなの？」

「まあ、そんなところかな。自覚はないんだけど」

「自覚がないのは大問題よ。……カナデちゃん、すごく心配してた」

「そっか……後でちゃんと謝つとくか」

「そうしなさい。じゃ、私はそろそろ自分の部屋に戻るから」

それだけ伝えると、りんは玄関へ。扉を開けて自分の部屋へ戻る……前に俺の方へ振り返る。

「どうかし——」

「私の事、尊敬してくれてありがとう」

悪戯っぽい笑みを浮かべるりん。一方、言葉の意味を理解した俺は一瞬で体温が急上昇する。

「……はあっ!? お、お前、何を言っつて!?!」

「お邪魔しました〜」

俺の文句を聞く前にりんはさっさと扉を閉めてしまった。残された俺は思わぬ辱めにため息をつく。顔が熱い。

「……カナデのやつ、余計なことまで話しやがって」

顔の火照りが収まるまでは若干の時間を要したのだった。

お洒落をするのは思いのほか大変

「はあ、休みが終わるのも早かったな」

マスター後の休みもあつという間に終わり、俺はため息をつきながら電車の窓に映つた自分の顔を見つめる。

やっぱり長期休みの後は、いつもよりも少しだけテンションが低い。朝も中々起きられなかったしな。

休みの間は妹が襲来した以外は特に変なことが起こるわけではなく、平和な日々だった。おかげで積みあがったゲームが片付く片付く。……休み終盤は「何やってんだろ俺……」と思わなかったこともないけど。

しかし、ゲームの楽しさが勝って最後までやりつくしてしまった。

「あつ、タケルじゃん！ おはよー！」

そんなところで見知った声が俺の耳に届く。

「……おうコウか。おはよう」

「……朝から死にそうな顔で、死にそうな声出さないでよ。どこのゾンビかと思ったよ」

丁度同じ電車に乗ってきたコウが呆れたような声を出す。俺と違ってコウは元気そうだ。というか、ゾンビは流石に失礼だぞ。

「全く、そんなゾンビみたいな声を出されると、こつちまで暗いテンションになるんだから！ シャキツとしてよジャキツと！」

「悪い悪い。でもな、そうは言ってもやっぱり長期休み明けは、誰だつてこんなテンションになるよ」

「否定はできないけど、タケルほど酷い人はなかなかいないって」

そうだろうか？ 長期休み明けのサラリーマンなんて、誰もが死にそうな顔をしてると思うんだけど。

窘められている間に最寄り駅に到着し、会社までの道を二人で歩いていく。

「タケルは休みの間、どこか行ったの？」

「いや、全く。妹が部屋に来たくらいかな？」

「そうなんだ！ それ以外は……あつ、どうせゲームしかしてないか。ごめんごめん」
「勝手に納得しないで。少しは話させて。あと謝らないで」

予想以上に悲しくなるから。

「そう言ってるけど、どうせ私の言った通り積みあがったゲームを片付けたとか言うんでしょ？」

「……まあ、そうだけどさ」

「やっぱり……少しは外に出て陽の光を浴びたら？」

「コンビニ行く時はちゃんと外に出てるから」

「それは外に出たって言わないから」

「まあ、それも基本的に夜なんだけど」

「陽の光すら浴びてないじゃん……」

雑談に花が咲く中、俺は「そういえば」と思い出す。

「今日は雑誌の取材が入るんだっけ？」

「うん、そうだよ。毎回恒例のやつ！」

「確か、攻略本用の取材だったよな？」

「その通り！ フェアリーズストーリー2の時と同じだよ」

「了解了解。それはいいとして……お前、本当にその格好でいいの？」

「なんで？」

首を傾げるコウの服装は、至って普段通り服装。黒のTシャツにジーンズ。いや、もう見慣れた光景ではあるんだけどさ。

「なんでって……もうちょっとお洒落な格好をした方が、雑誌映えしそうだからさ。攻略本用とはいえ、写真も撮るんだし」

「いいっていいって別に。別にお洒落な格好したって、いつも通りだって何も変わらな
いでしょ？」

「……またりんが怒りそうだな」

というか、前回はりんちゃんとした格好にさせられてたっけ。半ば強引に。

今回は逃げ切るつもりなのだろうか？　とても逃げきれないと思うけど。それに、俺もりに協力を求められたら断らないだろうし。まあ、その時になつたら考えればいいか。

さて、そんな事を話しながら会社に到着したので俺たちは荷物を置き、コーヒーを淹れに行くためいったんブースを離れる。

コーヒーを淹れてきて自分のブースに戻ると、そこには涼風さんの姿が。そして彼女の格好はいつものスーツではなく、少しお洒落な格好となっていた。一瞬、別の人が会社に出社してきたのかと思ったよ。

「うわっ！　誰かと思つたら青葉じゃん！」

コウも同じことを考えていたみたいで、驚きの声を上げる。

「あつ、おはようございます」

「休み明けから気合入り過ぎじゃない？」

「スーツがクリーニング中なんですよ!!」

「そうだったんだ。俺もてつきり気合を入れてきたとばかり」

「興梠さんまで！」

ブンブンと頬を膨らませる涼風さんをどうどうと宥める。言い方は悪くなるかもだけれど、小動物みたいで可愛かった。

「ところで、今日私は何をすればいいんですか？」

「あつ、そうそう！ これ、前作の攻略本なんだけどさ」

そう言って、コウが自分の席から古い攻略本を取り出す。前作からそんなに時間が経ってないとはいえ少し懐かしく感じるな。

「ここにキャラとかモンスターの3Dモデルの画像が載ってるでしょ？」

「はい」

「これを用意して出版社に送るんだけど、スクリーンショットを取ってほしくてさ」

「分かりました！ ちなみに、どこからどこまでですか？」

「全部！」

「はい、全部……って、全部!？」

「そう、全部！ だって他の皆はまだ休みだし！」

サラツと、とんでもないことを言いだすコウ。確かに人手は少ないけど全部って……涼風さん困惑してるじゃん。

「大丈夫だよ涼風さん。俺もちゃんと手伝うから」

「あつ、そうですか」

俺の言葉に、涼風さんはホツとした表情を浮かべる。

「……手伝うって、タケルはあんまりやることないからでしょ？」

「うるせえ。余計なことを言うんじゃない！」

事実だから否定できないじゃん。一応、企画の仕事があるっちゃあるんだけど、まだ締め切りまで時間があるからな。

「それと、巻末の方にちよろつと設定画が載るんだけど、ソフィアちゃんはこのままで大丈夫？」

「へっ？ どういうことですか？」

「私はあるまりしないんだけど、人によつては設定画集つてそれ用に書きおろしたりするんだよね」

「そうなんですネ！」

「それで、青葉はどうする？」

涼風さんは少し悩んでいたようだったが、

「あれは全力で描いたものなのでこのまま載せてください！」

涼風さんらしい真つ直ぐな回答だった。うんうん、こういう真つ直ぐさは大事だね。

「オツケー！ じゃあ攻略本の方はお願いね」

「はい！ でも、私の描いた絵が攻略本に載るんですよ……ふふっ♪」

これまたいい笑顔を浮かべて微笑む涼風さん。これからの涼風さんもより一層期待できるだろう。

「おはよう、なんだか嬉しそうね！ 何かいい話でもあった？」

「へっ？ い、いやなんでも！」

そんな話をしているタイミングでりんが入社してきた。涼風さんはびっくりしたのか、りんの言葉にあたふたと手を振っている。可愛い。

「ところで青葉ちゃん、今日はお洒落してるけど、青葉ちゃんもインタビュー？」「インタビュー？ なんですかそれ？」

そういえば涼風さんは、新入社員なのでインタビューを見るのも初めてだったか。インタビューを受けるのは一部の人だけなんだけど、見るだけでも貴重な体験だね。

「いや、涼風さんはインタビュー関係ないよ」

「あつ、そうだったの。気合の入ってた服だったから受けるものだとばかり。服装は関係なかったのね」

「そうなんです。実はスーツがクリーニング中でして」

かくかくしかじかと理由を説明する涼風さん。俺たちにも同じ説明してたから大変だな。それだけ、彼女のスーツ姿以外が珍しいってことだけど。

「でも、だから遠山さんもお洒落してるんですね！ 素敵です！」

「うふふ、ありがとう」

確かに今日のりんは、いつもよりお洒落感が強い服を着ていた。女子力の塊だよな本当に。……後、お洒落感って何だよ自分で言っといてなんだけど。

「あと、コウちゃんの服も持ってきたからね」

「っ!？」

やっぱり持ってきてた。流石、ある意味期待を裏切らない。そんなりんの言葉にビクツと肩を振るわせるコウ。

「ええ……いいよ私は。めんどくさいし」

「めんどくさい!? またそんなこと言つて！ 大体毎日同じ服着てガミガミガミガミ」

いつも通り、りんの軽いお説教が始まってしまった。まあ、あれはコウの言い方も悪い。勝手に服を選んできたとはいえ、めんどくさいは流石によくない。

去年だって、撮影の服については散々揉めてるから余計にだ。取り敢えずここは俺が助け舟を出して――。

「そうですよ！ 服を選ぶのって大変なんですからね！」

「えっ？ 何で青葉までムキになってるんだよ」

まさかの涼風さんからりに援護射撃が入った。ある意味助け舟ではあったんだけど、一体どういうわけだろう？

「す、涼風さん?」

「興柊さんも同じタイプだと思っんですけど、服を選ぶのって色々気を使って本当に大変なんですからね!」

「あつ、ハイ」

新入社員に説教をされる入社7年目がいるらしい。……俺の事です。とにかく、これから服を選ぶ時にはちゃんと気を使うことにしよう。

結局、コウはりんから逃げきれずに会議室へと連行されて行った。……毎年こうなるなら、素直にお洒落すればいいのに。

ちなみに俺は「ギリギリ及第点」と言われて逃げきっていた。まあ、男はジーンズとパーカーでそれっぽくなるからね。というか、俺は取材を受けないんだから気にする必要はないんじゃない?

「……で、涼風さんは何を?」

「遠山さんから見張っておけて。逃げるからみたいですけど……そんな子供みたいな真似するんですかね?」

「あー、まあ時期に分かかると思うよ」

俺の言葉に首を傾げる涼風さん。そして、待つこと数分。

ガチャ、ガンツ、「いたっ!?」「うわっ!?」

案の定、逃げ出そうとしたコウが扉を開け、その扉が涼風さんの額にぶつかった。痛そう（小並感）。

「ちよっ！ 扉の前で何してるの!?!」

「お前が逃げ出すからって、りんから言われて待機してたんだよ」

「よ、余計なことを……」

額を押さえて唸っている涼風さんの代わりに俺が状況を説明する。後で涼風さんにシップを持っていつてあげないと。結構酷い音したし。

「ほれ、どうせ逃げきれないんだからさっさと着替えてこい」

「そもそも、どうしてそんなに着替えるの嫌なんですか？」

最もな質問だ。涼風さんの疑問にコウは少し顔を赤くしながら答える。

「いやだつてお洒落つて恥ずかしいじゃん。それに私、胸もないし色気もないから男っぽい服が似合うんだよ……」

なんてことを言うんだよ！ と心の中だけでツツコむ。コウは胸がないことをしきりに気にしてるけど、そもそも素材がいいんだからそんなことは関係がない。

更に、悔しいけどコウの事をよく分かっているりんが服を選んできているのだから間違いないはずだ。

「そんなことないですよ！ 八神さんの事をよく分かっている遠山さんのコーデならきつと大丈夫ですつて！」

涼風さんも同じようなことを思っていたようで、コウに向かって力強く宣言する。彼女の言葉にコウも背中を押されたようで、

「じゃ、じゃありんを信じるよ。……あんまり期待すんなよ」

そして部屋の外で待つこと数分。

「……ね、普通でしょ?」

めちやくちや可愛くなったコウが部屋から出てきて卒倒するかと思った。いや、りんのコーデなら大丈夫だと思ってたけど、想像以上だ。

「凄い、八神さん可愛いですよ!」

「ほんと、コウちゃん可愛い!」

「えっ、ほんと?」

二人も俺と同じ意見の様で、りんに至ってはスマホを取り出してパシャパシャと取り始めるレベルだ。理解できてないのは本人くらい。……後でりんから写真を貰わないと。

可愛い可愛いと二人に連呼され顔を赤くするコウを微笑ましく眺めていると、

「興柁さんもそう思いますよね？」

当たり前前のごことを聞かれたので俺は首を縦に振る。

「そりゃ、もちろん。というか、可愛いって思わない人はいないんじゃないかねえか？」

「確かにそうですね！」

「もちろんよ。私が選んだ服を着てるんだから！」

「ほんと、そのセンスだけは尊敬に値するよ」

「だけとは何よ！」

「あ、あはは……」

「ちよつと、私を置いて勝手に話を進めないでよ!!」

真つ赤な顔でツツコミを入れるコウ。おっと、すっかり三人だけで盛り上がってしまった。反省反省。

すると何か思い出したのか、涼風さんがおもむろに前作の攻略本に手を伸ばし、

「あつ！ 前作の攻略本の記事に確か……あつた！」

彼女が指差したのは前作の完成時の際、コウがインタビューを受けているシーンが載っているページだった。これまた懐かしいページを……。

この時も社内で「誰だこの美人は!」ってなった記憶がある。

「これ！ この人！ 少し雰囲気違うなって思ってたんですけど……謎が解けました！
写真写りのせいじゃなかったんですね！」

「あとで覚えてろよ……」

若干失礼なことを言っている気もするのだが、この写真と普段のコウはほとんど別人なのであながち間違いでもない。

「さっ、コウちゃん！ そろそろ撮影だから準備して！」

「うへへ、本当にやるの？」

「やるに決まってるでしょ！ ほらっ、行くわよ！」

コウの手を取って歩き出すりん。これじゃあどっちがインタビューを受けるのか分からないな。だけど、あれくらい強引なほうがちょうどいいのかもしれない。

ちなみに、その後の撮影はコウが少し照れてたくらいでつつがなく終わったのだった。

好きな奴からの言葉ほど動揺を誘うものはない

攻略本の撮影日からまた少し期間が経った。その間に無事、フェアリーズストーリー3が発売となり、ホツと胸をなでおろしたのは記憶に新しい。

そして、今日は打ち上げの日となっていた。

「打ち上げてこんなに人が集まるんですね」

「営業さんや外注会社さん、クレジットに名前が載っている人には全て声をかけてるみたいやからな」

「私も呼ばれてるくらいだしね」

隣で話をしているのは涼風さん、ゆん、桜さん。ほんと、桜さんのようなバイトの子にも声をかけるからね。まあ、桜さんに関しては、開発に貢献している部分もそこそこあるので普通に呼ばれてはいただろう。

「そして、声優さんも来るからサインを貰うのだ！」

「私も私も！」

「用意がいいなお前ら……」

呆れる俺をしり目に、サイン色紙を掲げて目を輝かせる二人。確かに、ヒロインとかを担当した声優さんも参加するけどさ。それにしたって職権乱用が過ぎる。

「そう言ってるタケルさんも本当は欲しいくせに！」

「い、いや、俺は別に欲しくなんてないし！ 全然大丈夫だし！」

「目が泳いでるやないですか……」

ほんとは大ファンだからめっちゃくそ欲しいけど。

ここは年上としての威厳を保つためにも我慢だ。尚、ゆんのツツコミによつて威厳が保てたかは微妙である。

「あつ！ 次、八神さんが挨拶の番ですよ！」

涼風さんの言葉を受け壇上へと視線を移すと、コウがりんからマイクを受け取ってい

るところだった。

あいつ、挨拶とか慣れてないし大丈夫か？ と勝手に思ってしまう。

「えー、今回主にキャラクター周りのリーダーをやらせてもらった八神コウです。えつと、あれ……何言うか忘れちゃった」

ズツコケそうになった。本人は「こういうの慣れてなくて」と頬をかいている。ちよつと抜けている挨拶に、周りがドツと沸いた。すると、

「いつも通りでいいんですよ!!」

「八神さーん、頑張ってください」

壇上に向かって声を上げるはじめと涼風さん。二人からの声援にコウは驚いたような表情を浮かべる。しかし、今までどこか硬かった表情がふつと緩んだ気がした。

「……私は三部作の一作品目からキャラデザとして携わって、この7年近くの間は色々なことがありました。辛いことも多かったです——」

一度言葉を切って顔を上げたコウは、清々しい顔をしていた。

「でも、今回の作品は楽しいことばかりだったような気がします。スタッフの皆ありがとう。今後ともよろしく」

彼女の挨拶はそこで終わり、観客からは拍手が起る。

何というか意外だった。コウの口から楽しかったって言葉が出たことが。でも、あいつの言う通り今回の開発は大変だったけど、楽しさが勝った開発だったと思う。

「では最後に、ディレクターの葉月から」

そして最後にディレクターである葉月さんにマイクが渡り乾杯となった。

ちなみに桜さんが「葉月さんがあんな真面目なこと言うなんて。やつぱりただの面白お姉さんじゃなかったんだね」と発言していたのは内緒。

☆☆☆

さて、はじめ達はサインをもらいに行ってしまった、残ったのは俺と涼風さん。それにコウとなっていた。

ところで、涼風さんはサインをもらいに行かなくてもよかったのだろうか？ 確か、ファンだつて言つてたはずだけど。

「コウ、さっきの挨拶よかったよ。なつ、涼風さん」

「はいっ！ とつてもかっこよかったです！」

「いやー、緊張しちやつて。でも、声をかけてくれたおかげで助かったよ」

そう言つてニコツと笑顔を浮かべた。本人からの感謝に涼風さんも笑顔で答えている。

「おつ、珍しい三人組だね」

「……珍しいとか言いながら、パシャパシャ写真を撮らないで下さい葉月さん」

「もう、葉月さんまた〜！」

「さつき、八神の挨拶を撮りそびれたからね。代わりにと」

「とらなくていいですよ！」

スマホを片手に現れたのはもちろん葉月さん。生き生きとした顔で、スマホのシャッターボタンを押している。やっぱり面白お姉さんじゃないか！

「だけど、涼風君も今回の開発はよく頑張ってくれたね。おかげでソフィアも人気が出たよ」

「そ、そんな……私はただ一生懸命やっていただけで」

「いやいや、その一生懸命さが良かったんだよ。後は、君にソフィアの仕事をふった八神の判断が正しかったということだね」

「べ、別に面白そうだから振っただけですよ……」

「そういうことにおこう。次は八神にアートディレクターをやってもらってもいいから。八神をこれからもよろしくね」

変な声が出そうになった。何気ない会話から出てきた爆弾発言。突然の人事発表ほ

ど、びっくりすることはない。

それにしても、コウが次のAD……本人が納得して引き受けるのだろうか？

「は、はあ」

「ちよっ!? 私がAD!? りんのままでいいでしょ!？」

気の抜けた返事をする涼風さんとは対照的に、コウは慌てたような声を上げる。

「遠山君には今のPと共同でPになってもらう予定だよ。本人の希望もあるしね」

「ええっ!? 聞いてないですよ!!」

「そりや、今言ったからね」

さらりと言つてのける葉月さん。こういう所はほんと、トップを務めるだけあるよな。

「タケルからも何か言つてやつてよ!」

「……いいんじゃないか? 俺は葉月さんの考えに賛成だよ」

「タケルまで!!」

大きな声を上げるコウとは対照的に、俺は冷静に答える。反対する理由なんて全くな
い。

「……私じゃ、みんなついてこないですって」

「そうかな? ……まあ、無理強いはしないけど、考えておいてくれよ」

「……………」

コウは何も言わないまま、その場から離れていった。やっぱり、あの時のトラウマは
簡単に払しょくできないのかもしれない。

「八神さん……? あの……、えつと……」

残された俺と葉月さんに、涼風さんが何か言いたげな瞳を向けてくる。

「なんで八神がADを嫌がるか不思議かい?」

「……はい」

「興梠君、彼女に話してもいいと思うかい？」

「いいと思いますよ。多分、涼風さんなら大丈夫ですから」

「えっ？」

意味が分からないという表情を浮かべる涼風さん。まあ、それは当然だろうな。今から話すことは、俺たちの間でもあまり触れないようにしていることだから。

「実はね、八神は一度ADになったことがあるんだ。フェアリーズ2の時にね」

「は、初耳です。それって相当若い頃ですよね？」

「……まあ、本人にとっては苦い思い出なんだけどね」

「苦い、思い出ですか？」

その後は、葉月さんが全て話してくれた。俺に何も話させなかったのは、葉月さんせめてもの配慮だろう。

彼女の話を聞いた涼風さんは、しばらく神妙な面持ちを浮かべていたのだが、

「でも……やっぱり八神さんは今も昔も優しい人だったんですね」

「どうしてそう思うんだい？」

「だって本当に優しい人じゃなかったら……やめていった後輩の事で、悩んだりしないと思いますから。それに本当に無神経な人だったら、人が傷ついてるのを見て落ち込んだりしませんよ」

よ。やっぱり大丈夫だった。ほんと、涼風さんがこの会社に入社して来てくれてよかったよ。

「うん。私もね、そう思うんだ」

涼風さんの言葉に葉月さんもニツコリと微笑む。

「ちよつと私、八神さんを探しに行つてきますね。用事もあるので！」

涼風さんがコウを探しに行つた後ろ姿を見送り、俺は葉月さんにぽそつともらす。

「……ありがとうございます。俺がコウの後を引き継いでアートディレクターをやったこと、黙っていてもらって」

涼風さんと話していた時、葉月さんは「別の人間に交代してゲームは完成した」といった。それは別に間違いではない。

「私は別に構わないのだけど、良いのかい？　せつかく涼風君の評価を上げるチャンスだったのに」

「あの時の俺は、ただ必死にやっていただけです。それに下地自体はコウがほとんど考えていたようなものでしたし、引き継いだ後は楽なものでしたよ。俺だけじゃなく、りんもいましたから」

「……私は少なくとも君が、それに遠山君が楽をしていたなんて思っていないけどね」

責める様な口調。そして表情。恐らく彼女は俺がフェアリーズストーリー2の完成直後に体調を崩して一週間、休んでいたことを気にしている。

「楽かどうかは別にして、あの時の俺はただ自分のことができることをしただけですから。そ

もそも、体調を崩したのは俺の責任です。同じ作業量のりんは体調を崩さなかったわけですから」

「またそう言つて君は……今回の開発だつてかなり無理をしていたそうじゃないか？」
「……俺はまだ何も返せていませんから。コウやりん。そして、あなたにも」

あれはまだ俺が、心も体も今よりずっと若かった頃。恐らく上司が葉月さんじゃなければ今頃、俺は既に退社をしていただろう。

そもそも、まともに社会人をやれていたかどうかすら分からない。

「私はもう十分返されてるつもりだけどね……八神もだけど、君も過去の事にこだわり過ぎじゃないのかな？」

拘り過ぎ、か。むしろ俺の出来事は拘り過ぎなくらいがちようどいい気がする。

「そうかもしれないですね……」

「まあ、これ以上は何も言わないよ。それよりも、八神の所に行つてあげたらどうだい？」

「どうしたんですか急に？」

「センチメンタルなところを少し慰めてあげれば、八神も君に惚れ直すと思つて」

想像以上に俗な理由だった。俺は少し呆れた視線を葉月さんに向ける。

「だったらいいですけどね。そもそも残念ながら俺はコウに惚れられてないですから」

「……まあまあ、グダグダ言つてないで行つてきなさい！」

「あんたは俺の母親ですか……じゃあ一応行つてきますね」

葉月さんと別れ、人の間を縫うようにして会場の外へ。

「あれ？ タケル……君？」

「ん？ ひふみか」

コウを探しに会場から出たところで、ひふみとぼったり出会う。その手にはなぜか色紙が。

……恐らくだけど、はじめ達と一緒にサインをもらつてきたな。畜生、俺も素直に頼

んでおけば……ぐぬぬ。

「どうした？ まだパーティーは続いてるだろ？」

声優のサインを貰えなかった悔しさを押し殺し、ひふみに声をかける。

「続いてる、けど……私、人の多いところ、苦手……だから」

「……そういえばそうだったな」

今でこそ普通に話してくれるから忘れがちだけど、ひふみってすごい人見知りだったな。

「入社から結構立ったけど、相変わらず人ごみは苦手なんだな」

「し、仕方ないじゃん……」

少しだけ唇をムツと尖らせるひふみ。普段はそんな仕草をしない分、三割増しで可愛く見える。

「……ところで、さつきは三人で何話してたの？」

「見てたのか」

「うん……それで」

「まあ、大した話じゃないんだけどな」

ひふみはあの時の事を知ってるから、特に隠しておく必要もないだろう。さつき話したことをそのまま彼女に話す。

「そう、だったんだ……あの時の事を」

「涼風さんに話しても大丈夫だと思っただけだから。案の定、全く問題なかったけど」

「ふふっ……流石青葉ちゃん、だね」

そこで、ひふみの目がスツと細くなる。

「……タケル君が、ADをやったことは話したの？」

「……いや、話してないよ。葉月さんも気を使ってくれた」

すると、ひふみが俺の服の袖をキュツと掴む。

「もう、無理はしないでね」

あまり自己主張しない彼女にしては珍しい。だけど、それも当然か。俺が倒れた時の事をひふみは知っている。

同僚の二人から怒られた以上に怒られた気がする。しかも淡々と。目のハイライトが消えてて、滅茶苦茶怖かった。

(でも、後輩としてなんだかんだ一番心配してくれてるんだよな)

急に目の前にいるひふみが可愛くなり(普段も十分可愛いんだけど)、俺は彼女の頭をくしゃくしゃとなでる。

「わわわっ!! た、タケル君、どうしたの!?!」

「いや、何でもないよ。だけど、ありがとな」

「ほんとに……わかってる？」

「分かってるよ。それに今はコウやりんだだけじゃなく、頼れる後輩もたくさんできたからな」

「……その、後輩の中に……ちゃんと私は入ってる？」

「もちろんだよ」

そう答えると、ひふみが満足げに頬笑みを浮かべる。駄目だな俺は。後輩にまで心配をかけて。

「うん……タケル君が、困った時は……頼りにしてくれていいから」

「その時はよろしく頼むよ、ひふみ先輩」

「も、もうっ！ タケル君ってば……からかわないで」

ぶくつと頬を膨らませるひふみ。こんな表情を見せてくれるほど仲良くなったってことだよな。

「それじゃあ、俺はちよつとコウを探してくるから」

「うん、わかった……コウちゃんのこと、よろしくね？」
「任された」

ひふみも、コウの性格はよく分かっているみたいだ。これでコミユ力があつたら非の打ち所がない完璧なる美女が誕生するんだけどな。

軽く手を振り、ひふみと別れる。少し探すと思いのほか早く彼女は見つかった。

「こんな所にいるじゃん」

「……タケル？ どうしてここに？」

「お前を探してたんだよ」

コウは、パーティ会場から少し離れたところにあるベンチで黄昏ていた。俺はその隣に腰を下ろす。

「どうして私を探しに？」

「いや、涼風さんがお前を探しに行つてな。ちゃんと二人で話せたかなって」

「青葉ならさつき来たよ。それに、はじめたちも。なんかサインをねだられたけどさ」

……タケルが余計な入れ知恵でもした？」

「そんな事するわけないだろ。サインはあいつらが欲しがっただけで、俺は何にもしてないよ。葉月さんならやりかねないけど」

「ふつつ、確かにそうだね。だけど、いきなりサイン色紙持ってやってきたからびつくりしちゃったよ」

「流石、有名人になるとやっぱり違いますね」

「からかわないで」

『……………』

しばしの沈黙の後、コウがぼそつと言葉を発する。

「……タケルはさ、本当に次回のA Dが私でいいと思ってる？」

「どうした急に？」

「いいから答えて」

強めの口調。からかいを入れていい場面じゃないだろう。俺は頭をかきながら彼女の質問に答える。

「いいも何も、俺は適任だと思ってるよ」

思っていたことを素直に口に出す。前回の件は、コウだけが悪いわけではない。フオローしきれなかった俺たちにも原因はあるのだ。

それに、最近の状況を見ていけばコウ以外に適任はいないとすら思っている。しかし、気持ちは十分に伝わっていないようで彼女の表情は相変わらず晴れない。

「……………自信がないんだ」

「……………」

俺は黙ってその先の言葉を促す。

「青葉はさ、尊敬できる上司だと言ってくれた。ついて行くと言ってくれた。ただ、やっぱり不安で……………」

ぽつり、ぽつりと、不安を吐露していく。

「私がADをして、ちゃんとみんなが付いて来てくれるのかなって。あの時みたいになたみんなが離れて行っちゃうんじゃないかって。……また辞めちゃうんじゃないかって」

苦悶の表情を浮かべ、ギュツと拳を握り締めるコウ。

彼女の言葉はそこで途切れ、二人の間に沈黙が流れる。パーティ会場の喧騒がやけに耳につく。

……どのくらい沈黙が続いただろうか。

「そんなに心配しなくても大丈夫だと思うけどな」

彼女の方を視線を向けずに答える。俺の中で、既に結論は出ていた。

「軽く聞こえるかもしれないけど、俺は絶対に大丈夫だと思う。そもそも、お前は心配し過ぎだ。今のお前を見て、ついてこない後輩はいないだろうよ。涼風さんからの言葉がその裏付けだ」

本当に尊敬してなきや、そんな言葉は出ないと思う。しかも、その言葉を直接言ってくれるところに二人の信頼関係が見て取れる。

だから心配しなくて大丈夫といったのだ。はじめやゆんも直接は言わないが、想いは一緒のはずだろう。

「それに、今はお前の事を理解してくれてる連中がいつばいいいるじゃねえか。りんや俺はもちろんだし、葉月さんとかうみこさん。それにひふみを含めた後輩たちもお前の事を慕ってる」

入社当時の事を考えれば、本当にコウは努力して変わってきたのだ。

どこか素っ気なく、誰とも交わろうともしない……昔の俺が今のコウを見たら、腰を抜かすかもしれないだろう。

「というか、ついてこないやつがいたら俺が無理やりにも引つ張り上げるつもりだから。安心してくれ」

「……ふふつ、タケルはそれでいいの?」

ようやくコウの表情が少しだけ緩む。

「いいも何も、俺がそう決めたんだからいいんだよ。あの時とは違ってちゃんとフオリーできる体制になってるんだからさ」

「あんまり、タケルっぽいやり方じゃないね」

「お前がADになるんだ。やれることは何でもやってやりたいんだよ。俺はお前を全力で支えてやりたいんだ」

こればかりは嘘偽りない俺の気持ちだった。あの時、一緒に支えてやれなかったせめてもの報いとして。

一方、俺の言葉を受けたコウの頬が少しだけ赤く染まる。

「っ!! ……はあ、なんだかずるいなあ〜」

「んっ? 何を言っつて——」

俺の言葉が途中で止まる。なぜなら、コウがなぜか俺の肩に頭を預けてきたからだ。

「お、おいつ、何してんだよ!？」

「何って、タケルの肩を少し借りてるだけだよ」

急なことに困惑する俺。まわりに人がいないとはいえ、こいつがこんなことをしてくるなんて想像がつかなかったからだ。

動揺する俺を他所にコウは話を続ける。

「……タケルってさ、ほんといい方向に変わったよね」

「そ、そうか？ 自分ではあんまり自覚がないんだけど」

「ううん、変わったよ」

「そっか……近くで見てるお前に言われるのならそうそうかもな」

「絶対にそうだよ。……かつこよくなった」

聞き間違いだと思ったけど、確かに聞こえた。

一気に顔が熱くなる。今日のコウは少しおかしい。

「そ、それってどういう意味だよ？」

「……どういう意味だと思う？」

全く意味が分からないと視線を向けると、意味深な笑みを浮かべるコウと目があつた。

俺を試すような、それでいてどこか楽しそうなコウの表情。それが余計に俺の心臓へダメージを与える。

「わかんないから聞いてるんだけど……」

「じゃあ教えない」

結局、教えてくれなかった。

「ところで、肩はいつまで貸していれば？」

「……私がいいって言うまで」

「さいですか……」

そのままの姿勢のまま待つこと数分。

「……うん、ありがとう。もういいよ」

ようやく？ 解放されて俺は思わず背もたれに体重を預ける。普段は感じることはない、彼女の体温や甘い匂いがやけに生々しかった。

「ど、どういたしまして……」

「何でそんなに疲れてるの？」

不思議そうな表情で俺の顔を覗き込んでくる。そりや、もちろん緊張とか興奮とか色々……本人には苦笑いで返したただけだけど。

「だけど、ありがとね。青葉とタケルのお蔭で少しは自信付いたから」

「それなら、肩を貸したかいたったつてもんだよ。涼風さんにも後でちゃんとお礼を言わないとな」

「確かに。……ねえ、タケル」

「ん？ どした？」

「また私が貸してつて言ったら……タケルは次も貸してくれる？」

上目遣い。少しだけ上気した頬。膝に添えられた右手。断れるわけがない。

「……いつでも言ってくれ」

「ふふっ♪ 約束だからね？」

彼女の笑顔に「おう」と、短く答えるだけで精一杯だった。